

# 戦前における地理学・地理教育に関する研究

— 西亀正夫の業績を通して —

三 上 昭 莊 著

広島経済大学

地域経済研究所

1 9 9 3

—— 広島経済大学研究双書 第11冊 ——

戦前における地理学・地理教育に関する研究

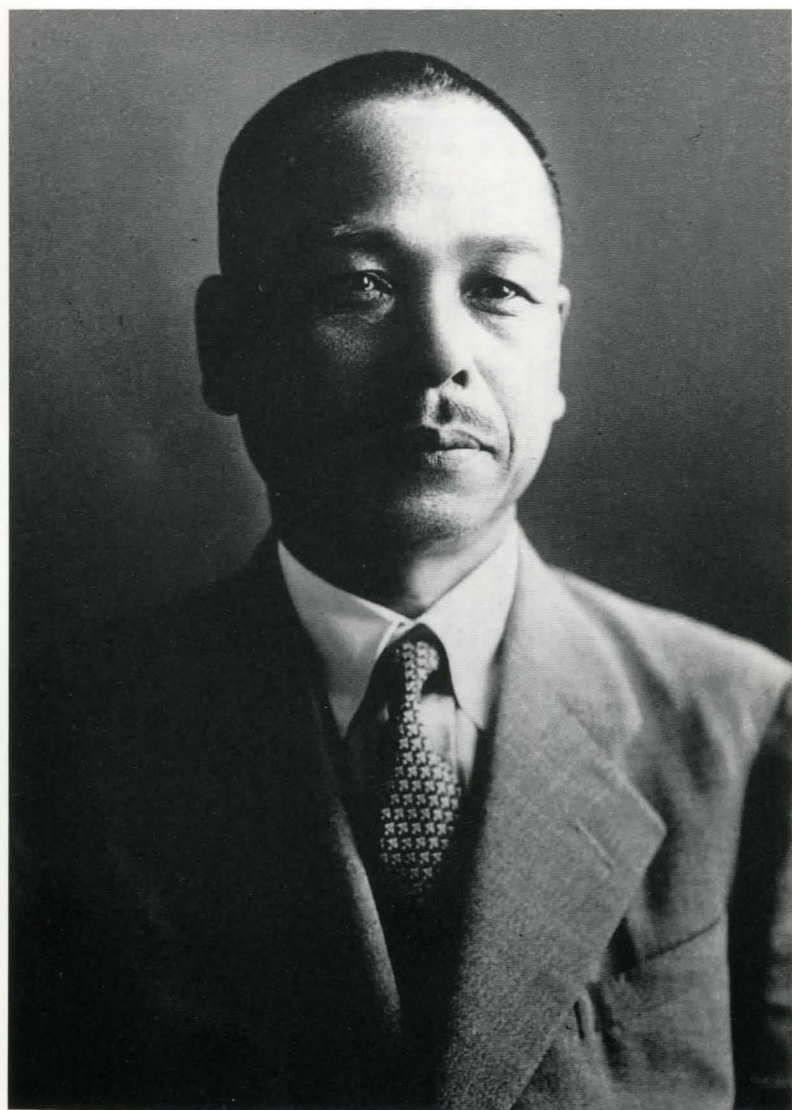
—— 西亀正夫の業績を通して ——

三 上 昭 荘 著

広 島 経 済 大 学  
地 域 経 済 研 究 所

1 9 9 3





西 亀 正 夫 (昭和11年)



## は じ め に

第2次世界大戦後における地理学および地理教育は大きく変容していると言われている。果たしてそうであろうか。本書は、戦前の地理学および地理教育について、在野の立場から地理学の建設、地理教育の改善を畢生の事業として、終始一貫努力奮闘された篤学者西亀正夫の業績を考察し、それを通して、今後の地理学及び地理教育に生かされるべき課題について論じようとするものである。

西亀正夫について関心を持つに至った動機は、昭和30（1955）年夏、東北大学理学部地理学教室に能登志雄教授を訪問した際、「西亀正夫先生を知っているか」と聞かれたことに始まる。私が広島大学教育学部附属高・中学校に勤務し、広島出身であったことからの質問であったと思われる。能教授は昭和11（1936）年から昭和16（1941）年まで広島市に置かれていた広島幼年学校教官であったので、地理学を同じく専攻している者として面識があり、またその活躍について注目されておられたためと思われる。私は西亀正夫の著書の2・3冊を見たことはあったが、その経歴等については知らなかったので、「知りません」と答えた。その後、意識して著書などを集めていたが、十分に集めることができないでいた。

昭和60年（1985）年4月より学校法人石田学園広島経済大学に勤務することになって、僚友紺家逸治助教授より「西亀先生を知っているか」と問われ、「石田学園山陽中学校時代に担任であった」ことを聞かされて驚くとともに、西亀正夫の事績を研究する足掛りが見つかったと歓喜した。昭和20（1945）年8月6日、このとき山陽中学の生徒を引率して建物疎開に行かれて原爆にあわれ、殉職されたことも聞かされた。

さらに幸運なことに石田学園法人部に西亀正夫の履歴書が残っていた。この履歴書から研究の道が開けたといつてよい。（口絵参照）

本籍地に行って先生の親戚を訪問し、御子息が東京に健在であることを確認するとともにお墓にお参りして帰宅した。

御子息西亀達夫さんのところには、疎開されていた著書の改訂原本、草案ノート、未発行原稿など一括して保存されていることを確かめ、東京にお伺いして経歴書きや著書、写真などを拝見させていただいた。

これによって、西亀正夫の偉大さを再認識することになり、地理学の建設、地理教育の改善・普及に努力された事績を攻究する意欲を増すこととなった。

西亀正夫の研究は、広島経済大学研究論集（人文・自然・社会科学編）第9巻第4号（1987年3月）より第16巻第1号（1993年6月）まで『篤学者西亀正夫の研究』という題目のもとに25回に分けて執筆させていただいた。雑誌『人文地理』の学会展望において「大河論文」との批評を受けたが、実にA5判600頁を越える長篇となった。この『篤学者西亀正夫の研究』では、西亀正夫の研究業績について、地理学の建設時代、地理学の成熟時代、地理学の完成時代にわけて経年的に攻究した。

本研究双書においては、西亀正夫の業績を地理学の研究、地理教育への貢献を中心にまとめ、西亀正夫の地理学の建設、地理教育の改善・普及・発展について論じ、日本における地理学・地理教育の発達史上における貢献について位置づけた。

わたくしの研究がこのような形で刊行されることになったのはわたくしにとっても予想外のことであり、石田学園広島経済大学に対し深く感謝申し上げます。

1993年11月

広島経済大学

三 上 昭 荘

# 目 次

口 絵 .....	1
はじめに .....	3
I 篤学者西亀正夫の生涯 .....	9
1. 篤学者としての西亀正夫 .....	9
(1) 第1期——地理学建設時代 .....	22
(2) 第2期——地理学成熟時代 .....	23
(3) 第3期——地理学完成時代 .....	24
2. 文検地理科への合格 .....	28
(1) 出生から高等小学校卒業まで .....	28
(2) 准訓導としての勉強時代 .....	28
(3) 高等成師学会による文検準備時代 .....	28
(4) 召集時代 .....	30
(5) 安芸郡小学校時代 .....	31
(6) 文検合格 .....	32
3. 任地における実践と研究 .....	33
(1) 教員養成所時代における実践と研究 .....	33
(2) 岡山県西大寺町立高等女学校時代における実践と研究 .....	34
(3) 福岡県立浮羽高等女学校時代における実践と研究 .....	36
(4) 朝鮮総督府咸興高等普通学校時代における実践と研究 .....	42
(5) 吉田高等女学校時代における実践と研究 .....	43
(6) 広島県立広島第二中学校時代における実践と研究 .....	45
(7) 広島県山陽中学校時代における実践と研究 .....	49
II 地理学に関する研究 .....	52
1. 自然地理研究時代 .....	52
2. 聚落の研究と交通の研究 .....	59



(1) 聚落の研究 .....	59
(2) 交通の地的研究 .....	64
3. 人文地理学の体系化 .....	67
(1) 『人文地理学講義』執筆のねらい .....	67
(2) 『人文地理学講義』の内容・構成 .....	70
(3) 『人文地理学講義』の評価 .....	75
(4) ま と め .....	80
4. 文化地理学の体系化 .....	80
(1) 『文化地理学の諸問題』の出版 .....	80
(2) 『文化地理学の諸問題』の内容と構成 .....	83
(3) 『文化地理学の諸問題』への評価 .....	86
5. 農業地理学の体系化 .....	92
Ⅲ 地理教育に関する研究 .....	97
1. 地理教育に関する論考 .....	97
(1) 『地理教育の諸問題』 .....	97
(2) 『非常時局と地理教育』 .....	102
(3) 『皇国中心地理教授』 .....	103
2. 地理教授法への論及 .....	104
(1) 西亀正夫の地理教授 .....	104
(2) 地理教授法の変遷 .....	108
3. 教材としての地誌および辞典 .....	121
(1) 地誌に関する著述と研究 .....	121
(2) 『最新物産辞典』 .....	130
(3) 『日本地理教材辞典』 .....	130
(4) 『重要商品地理学』 .....	133
4. 郷土地理教育とのかかわり .....	135
(1) 郷土地理教育への論考 .....	135
(2) 『郷土地理の調べ方と実例』 .....	138

5. 小学校地理教育への貢献 .....	140
(1) 『具体化せる小学地理教材と教授法』シリーズ .....	140
(2) 小学校国定教科書に関する研究 .....	148
(3) 『統合式地理教授の実際』 尋五・尋六 .....	150
6. 児童生徒用読本の執筆 .....	154
(1) 『少年少女世界地理文庫』 .....	154
(2) 『趣味の地理・学習旅行文庫』 .....	161
(3) 『少年国史文庫』 .....	167
(4) ま と め .....	168
7. 中等学校向け参考書の執筆 .....	169
(1) 『簡明外国地理活法』 .....	169
(2) 『最も能率の上る覚え方』シリーズ .....	171
(3) まなこ叢書 .....	175
(4) 中学講義録の執筆 .....	175
(5) 『夏季地理練習帖』 .....	176
8. 地理区論争 .....	177
(1) 地理区論争の発端 .....	177
(2) 西亀正夫の地理区論 .....	180
(3) 香川幹一の西亀正夫への批判 .....	184
(4) 地理区論争の結末 .....	186
(5) 『地理区と地理教授』の著述 .....	189
IV 広島地学同好会などでの活躍 .....	193
(1) 広島地学同好会の設立と発展 .....	193
(2) 広島地学同好会報（地学）への投稿， および広島地学同好会（広島地学会）例会での発表 .....	198
(3) 地理教育同志会 .....	200
おわりに .....	202
(1) 地理学観 .....	202

(2) 地理教育への貢献 .....	204
(3) 地理教育の技術 .....	206
(4) 著作者として，研究会講師として .....	206
あとがき .....	208

# I 篤学者西亀正夫の生涯

## 1. 篤学者としての西亀正夫

西亀正夫が篤学な地理学者・地理教育者と位置づけられる所以は、表 I-1 の経歴と業績より明らかである。

西亀正夫は、雑誌「地理学研究」に連載された「地理学に篤学な諸名士傳」に矢津昌永、吉田東伍、大関久五郎、西村萬寿、志賀重昂、牧口常三郎、飯山七三郎、寺崎留吉、正木助次郎、小田内通敏、西田興四郎、などとともに篤学な諸名士の一人として登場している。

「地理学研究」第3巻1号に「徒らに功名を追う事のみに急であって足元の修業を怠りつつあるものの多い世の中に、僅か小学校を卒業したと云う外に何等の学歴もなく、何等の背景も、後援とともなく堅志健行十有八年の辛苦勉励の効あって、本邦地理学界に於ける錚々たる篤学者として、女子教育界の重鎮として其の名全国に知られたる模範的教育家である。」と述べてある。当時、広島県吉田高等女学校（組合立）の校長の要職にあり、<sup>(1)</sup>文部省検定試験合格者で校長になることは稀れであったことを考えると不屈不撓遂に名誉ある月桂冠を得た一人であったといえよう。

西亀正夫が活躍した明治30年代から昭和10年代にかけては、日本の地理学発達史からみるとどのような時代であったろうか。山口貞雄著『日本を中心とせる輓近地理学発達史』によると、明治20年頃までの前期は「新時代の啓蒙思想の先陣を切って、一般国民の常識として歓迎せられた。……黄金時代も決して永続しなかった。……世界事情的啓蒙が次第にその勢力を失ひ、西洋学問の生命とする理学が重要化して来た……苦難時代……」(p. 61~62)

明治20年頃から明治35年頃までの中期は「自然地理派の抬頭にはじまり

戦前における地理学・地理教育に関する研究

表 I - 1 西亀正夫の経歴と業績

経	歴
明治16(1883)年1月1日	広島県賀茂郡早田原村大字風早に生まれる
明治22(1889)年9月	風早簡易小学校簡易科入学
明治23(1890)年7月	風早簡易小学校簡易科下級修業
明治25(1892)年12月	風早尋常小学校第3学年を卒業
明治27(1894)年4月	風早尋常小学校補習科第2学年を補習
明治30(1897)年3月	三津高等小学校において高等小学校(修業年限4カ年)卒業
明治30(1897)年4月	広島市研学館にて漢学, 数学, 英語修業(1カ年)
明治31(1898)年6月	検定試験を受け小学校教員免状を受ける (修身科・教科・国語科・算術科・地理科・歴史科・習字科)
明治31(1898)年7月	賀茂郡内海尋常小学校准訓導
明治32(1899)年5月	賀茂郡仁方尋常高等小学校准訓導(尋常科勤務)
明治34(1901)年7月	検定試験で修身・教育・地理・体操の成績佳良の証明書を受く
明治35(1902)年7月	検定試験で歴史・理科・算術成績佳良の証明書を受く
明治36(1903)年6月	依願退職
明治36(1903)年10月	渡子尋常小学校代用教員
明治37(1904)年4月	充員召集に応じ陸軍看護卒として歩兵第11聯隊に入営
明治37(1904)年9月	看護手代用として軍医の事務補助を命ぜられる
明治38(1905)年11月	召集解除
明治39(1906)年2月	安芸郡瀬戸尋常高等小学校准訓導
明治39(1906)年4月	戦役の功により勲八等瑞宝章・従軍記章を受ける
明治39(1906)年8月	検定試験を受け国語・図画成績佳良の証明書を受く
明治39(1906)年11月	安芸郡奥内尋常小学校准訓導
明治40(1907)年9月	
11月	
明治41(1908)年	

# I 篤学者西亀正夫の生涯

## 論文・報告など

「地学雑誌」創刊，東京地学協会（明治22年1月）

港湾に就て(1) 芸備教育第31号

港湾に就て(2) " 第32号

潮流に依って起こる渦の研究 地学雑誌 第19年225号

" (第2稿) " 228号

日本風景の科学的観察 科学世界 第1巻15号

" (その2) " 第2巻2号

" (その3) " 第2巻4号

" (その4) " 第2巻8号

" (その5) " 第2巻10号

日本風景の科学的観察(その6) " 第2巻11号

瀬戸内海岸の変動に就て 地学雑誌 第20年239号

戦前における地理学・地理教育に関する研究

経 歴	
明治42(1909)年 2 月	検定試験により地理科教員免許状を受ける (女学校・師範女子部)
明治42(1909)年 4 月	私立松本学校教諭
明治43(1910)年 9 月	私立伊豫教員養成所教諭
明治44(1911)年 3 月	検定試験により地理科教員免許状を受ける (中学校・師範男子部)
明治45(1912)年 2 月	西大寺町立高等女学校教諭兼舎監
大正 4 (1915)年 8 月	別府旅行
大正 4 (1915)年12月	奈良・京都旅行(中等学校地理歴史教員協議会参加)
大正 5 (1916)年 8 月	日本アルプス登山
大正 6 (1917)年 4 月	福岡県立浮羽高等女学校教諭
8 月	中等学校地理歴史科教員協議会参加(広島)
10月	高等官 8 等
12月	地理実習法について講習会を開く
大正 7 (1918)年10月	草案 西亀
11月	勲七等瑞宝章を受ける
11月	旅行と研究 碧潮
大正 8 (1919)年 1 月	正八位を受ける
5 月	日本交通地理学草案 錦雪
8 月	高等官 7 等待遇 中等学校地理歴史科教員協議会参加(東京)

# I 篤学者西亀正夫の生涯

論文・報告など			
花嵐岩帯の変動に就て	東洋学芸雑誌	第26巻	330号
〃 (第2稿)	〃	第26巻	337号
国民道德の根底	愛媛教育	第282号	
衣食住(上)(下)	〃	第283号, 第287号	
言論の権威	〃	第287号	
修身科の採点について	〃	第291号	
联合会教育品展覧会	〃	第295号	
小学校地理教授	〃	第304号	
高等女学校の歴史につきて	〃	第308号	
地理教授法私見	〃	第314号	
安芸西条盆地の地形に就いて	地質学雑誌	第19巻	
瀬戸内海岸の隆起に就て	地学雑誌	第25年第278号	
備前平野	地学雑誌	第25年第291号	
地理教授の3大欠陥	岡山教育会誌	第114号, 第115号, 第119号	
雑誌「歴史と地理」史学地理学同致会, 創刊(大正6年11月)			
播磨に於ける億計・弘計二王子の御遺跡	歴史と地理	第1巻第6号	
筑後の巨樹	〃	第2巻第2号	
地理科及び歴史科の自学自習	中等学校地理歴史科教員協議会		
地理実習教程私案	教育界	第17巻第7号	
新案測図板	現代教育	59号(大正7年6月号)	
地人相関の教材—修正小学地理書研究の1—	教育界	第17巻第9号	
統計的教材—修正小学地理書研究の2—	教育界	第17巻第11号	
地理教授の設備	現代教育	63号(大正7年10月号)	
時局と地図につきて	普通教育(大正7年10月号)		
郷土調査につきて	教育実験界	第39巻第12号	
聚落の研究	歴史と地理	第2巻第5号	
〃 (中)	〃	第2巻第6号	
聚落の研究(3)	〃	第3巻第1号	
〃 (4)—聚落の内容に就て—	歴史と地理	第3巻第3号	
〃 (5)	〃	第3巻第5号	
〃 (6)	〃	第4巻第1号	
〃 (7)	〃	第4巻第4号	



戦前における地理学・地理教育に関する研究

経	歴
大正9(1920)年3月	従7位を受ける スケッチブック
大正10(1921)年6月	福岡県小学校学事調査会委員(地・歴)
7月	第5回全国中等学校地理歴史科教員協議会(京都)へ参加
11月	高等官6等待遇
大正11(1922)年1月	正7位を受ける
大正11(1922)年6月	福岡県小学校学事調査会委員(地・歴)
7月	福岡県立浮羽高等女学校舎監
10月	日向神に旅行
大正12(1923)年3月	願により本職並兼職を免ず
大正12(1923)年4月	朝鮮咸興高等普通学校嘱託
大正12(1923)年4月	勲6等瑞宝章を受ける
大正12(1923)年10月	朝鮮咸興高等普通学校教諭

# I 篤学者西亀正夫の生涯

論 文 ・ 報 告 な ど			
聚落の教材—修正小学地理書研究の3—	教育界	第18巻第4号	
教授用地図の設備	現代教育	67号(大正8年2月号)	
挿繪と地図—修正小学地理書研究の4—	教育界	第18巻第5号	
地理科の応用としての郷土調査	教育学術界(大正8年3月)		
大革新を要する中等学校の地理教授法	教育実験界	第40巻第4号	
海外発展の教材—修正小学地理書研究の5—	教育界	第18巻第7号	
地理の野外実習方案	現代教育	70号(大正8年5月号)	
我が校の地理教育	福岡県立浮羽高等女学校(大正8年5月)		
新に試みたる地理ノートにつきて	現代教育	72号(大正8年7月号)	
立体的教材—修正小学地理書研究の6—	教育界	第18巻第12号	
藤戸渡(上)	歴史と地理	第5巻第1号	
太田川下流に於ける争奪現象	"	第5巻第2号	
藤戸渡(下)	"	第5巻第3号	
新案縮尺計	現代教育		
西亀正夫編	改造世界地理提要(大正9年7月)		
西亀正夫著	郷土誌稿(大正9年11月)未刊		
交通の地的研究(1)	歴史と地理	第5巻第5号	
" (2)	"	第6巻第1号	
" (3)	"	第6巻第2号	
交通の地的研究(4)	歴史と地理	第7巻第2号	
" (5)	"	第7巻第6号	
" (6)	"	第8巻第5号	
大戦とスカンジナビア	教材集録		
会誌「地理教材研究」創刊, 地理教材研究会	目黒書店(大正11年4月)		
交通の地的研究(7)	歴史と地理	第9巻第4号	
" (8)	"	第10巻第1号	
" (9)	"	第10巻第5号	
北九州の工業	地理教材研究 第一輯		
減びゆくヨーロッパ	教材集録		
地理教授に関する研究	福岡県入賞論文		
九州の方言に就て	地理教材研究 第二輯		
交通の地的研究(10)	歴史と地理	第11巻第4号	
普通教育統計実習方案	朝鮮総督府入賞論文		
地理実習器の考案			
地震計の模型の作成			
交通の地的研究(11)	歴史と地理	第13巻第1号	

戦前における地理学・地理教育に関する研究

経 歴		
大正13(1924)年 6 月	広島県吉田高等女学校長兼教諭	
大正14(1925)年		
経 歴	主 要 論 文 ・ 報 告	
大正15(1926)年 4 月	広島県立広島第2中学校教諭	聚落の生態に就いて 地球 第5巻第4号 交通の障害に就いて 地球 第6巻第3号 芸予叢島の聚落について 地理教材研究 第7輯 熱帯農業に就いて 地球 第6巻第5号 宇品築港計画批判 地理教材研究 第9輯
昭和2(1927)年 2 月	高等官 5 等	別府間歇泉 地球 第7巻第4号
3 月	従 6 位	地理的景觀の個性と通性 地球 第8巻第3号
7 月	地歴協議会 参加(札幌)	九州地方聚落瞥見記 地理教材研究 第10輯
昭和3(1928) 4 月	教頭	北日本の聚落(1) 地球 第9巻第3号
4 月	校長事務取扱い	北日本の聚落(2) 地球 第9巻第4号
5 月		消費地理に関する二三の問題 地球 第10巻第3号
8 月		広島市雜観 地理教材研究 11輯
昭和4(1929)年 7 月	地歴協議会 参加(台湾)	南支那の交通 地球 第12巻第6号 北海道樺太雜記帳 地理教材研究 第13輯

# I 篤学者西亀正夫の生涯

論 文 ・ 報 告 な ど	
日向神探勝記 地理教材研究 第4輯 会誌「地球」創刊, 地球学団 博多成象堂(大正13年2月) 会誌「地理学研究」創刊, 地理学研究会 帝国書院(大正13年5月) 会誌「地理教育」創刊, 地理教育研究会 中興館(大正13年10月) 世界的商品「砂糖」 地理学研究 第1巻第6号(大正13年10月)	
一時的港市に就いて 地球 第3巻第1号 朝鮮人の生活と環境及び歴史 地理教材研究 第4輯 関東大震災と神戸港 地球 第4巻第3号 最新物産辞典(共著) 帝国書院 簡明外国地理活法 日本社 夏期練習帖1〜4年・上級用(日本社) 愛知県碧海郡地理研究会の地理講習会で「晩近の地理学」について3日間講習(大正14年8月) 吉田高女の講習会で「晩近地理学」を講ず 会誌「地理学評論」創刊, 日本地理学会 古今書院(大正14年3月)	
著 書	参 考 資 料
最も能率の上る日本地理の覚え方 三宅書店	広島師範地理国史講習会(地理)3日間, 小学地理書に現われたる経済地理の解説および研究法 8月 九州旅行
具体化せる小学地理教材と教授法 尋5 厚生閣書店 " " 尋6 " " " " 高1, 高2 " " 日本地理資料(共著) 帝国書院	8月 北海道樺太旅行 5月1日 西条にて「西条盆地」について講演 5月8日 安佐郡練習会「小学教科書の取扱」講演 10月22日 広島市民講座「不景気の根本原因」 12月11日 福山市「地理学の本質と地理教材の取扱」
最も能率の上る世界地理の覚え方 三宅書店	夏期大学地理学講習会において聚落地理を講習(日本大学) 5月22日 中島青年団「支那事情」 5月23日 温品校「誤謬教材」 12月22日 落合父兄会「愛」
人文地理学講義・上巻 古今書院	広島教育養成所第1回夏季講習会, 10時間, 最近地理学の諸問題

戦前における地理学・地理教育に関する研究

経 歴	主 要 論 文 ・ 報 告
昭和5 (1930)年	
昭和6 (1931)年	筑紫平野東部の村落立地 地球 第16巻第5号 合衆国の紡績業 広島地学同好会報 第2巻第4号 広島市・呉市 日本地理大系一中国・四国篇一 改造社
昭和7 (1932)年7月 地歴協議会参加(京城)	倉橋島の人文景(1) 広島地学同好会報 第3巻第3号 呉市の前面・その経済形態の特相 地球第18巻第3号 文化地理学の諸問題(1)~(2) 広島地学同好会例会 満洲の現況に就て 広島地学同好会例会 倉橋島の人文景(2) 広島地学同好会報 第3巻第4号
昭和8 (1933)年3月 勲5等瑞宝章 7月 正六位	砥部焼産地としての砥部町の研究 地球第19巻第5号 文化地理学の諸問題(3)~(6) 広島地学同好会例会
昭和9 (1934)年	広島市の人口 地球 第22巻第3号 厳島町の地理学研究 地理学 第2巻第1号 人口圧管見 地理学 第2巻第11号 比婆郡新発見のピラミッドに就て 広島地学同好会例会
昭和10 (1935)年	美保関町研究 地球 第24巻第1号 広島市の東西性と南北性 広島地学同好会

# I 篤学者西亀正夫の生涯

著 書	参 考 資 料
日本地理講義 日本大学出版部	7, 8月 台湾・南支那旅行 11月17日 豊田郡本郷「支那事情」
人文地理学講義・下巻 古今書院	広島教員養成所夏季講習会, 5日間, 20時間の講義 「広島湾諸島の人口現象」の報告に対して広島県より奨励金30円を受ける 広島地学同好会設立(昭和5年1月)
農業地理学 古今書院	会誌「地理教材研究」の廃刊(昭和6年3月) 広島教員養成所夏季講習会, 7日間, 「交通地理」「郷土地理」を講義
郷土地理の調べ方と実例 厚生閣書店 景観区分世界経済地誌・北米篇 共立社 満洲国中心支那地理 厚生閣書店 少年少女世界地理文庫(12巻) 厚生閣書店 趣味の地理学習旅行文庫(10巻) 厚生閣書店	広島県地理 広島県教育会編 広文館(西亀正夫氏が書いたという) 夏休中満洲視察旅行(京城で全国中等学校地理歴史科教員協議会の旅行) 愛媛県郷土地理研究会主催の講習会(松山市)で講演, 「地理教育の諸問題」
地理教育の諸問題 古今書院	雑誌「地理学」創刊, 古今書院(昭和8年10月) 広島教育講習所講習, 7日間, 講義 広島地学同好会に於て「文化地理学の諸問題」について講演
具体化する小学国史教材と教授法 厚生閣書店 文化地理学の諸問題 古今書院 広島県郷土景観地誌 広島2中地理教室	会誌「歴史と地理」廃刊(昭和9年11月) 広島教員養成所の講習会において「地形学」「地理受験の着眼点」5日間講義 成羽地理学会へ参加
非常時局と地理教育 古今書院	広島地学同好会報の会報係となる

戦前における地理学・地理教育に関する研究

経 歴	主 要 論 文 ・ 報 告
	報 第5巻第4号 生まれ出た徳山市 地理学 第3巻第12号 世界生活景観地誌 <sup>(1)~(2)</sup> 広島地学同好会 報 第6巻第1号・2号
昭和11(1936)年4月 教育功績者 として表彰 7月地歴協議会 参加(東京)	広島市郊外 地球 第26巻第2号 世界生活景観地誌 <sup>(3)~(4)</sup> 広島地学同好会 報 第6巻3号, 第7巻第3号 地理教育を省る 地理学 第4巻第4号 地理眼と地理識 広島地学同好会報 第7 巻第2号 軍都としての広島 地理学 第4巻第7号
昭和12(1937)年4月 広島山陽中 学校教諭	水と広島 地球 第27巻第2号 世界生活景観地誌 <sup>(5)~(7)</sup> 広島地学同好会 報 第7巻第4号, 第8巻第1号・第3号 広島市の東西性と南北性 地理学 第5巻 第1号 市になった「三原」 地理学 第5巻第1号 地理教育と地理区 地理学 第5巻第3号 白地図について デルタ 第1巻第1号 再び地理区について 地理学 第5巻第8 号
昭和13(1938)年	気候グラフの一考察 地理学 第6巻9号 澳門遊記 デルタ 第2巻第2号 木次線全通 変動教材 第6巻3号 オーストリア合併のドイツ 広島地学同好 会例会 30年前の文検 地理学 第6巻第10号
昭和14(1939)年7月 地歴協議会 参加(新京)	銃後の地理教育 広島地学同好会報 世界生活景観地誌 <sup>(10)</sup> 広島地学同好会報 満ソ国境の近況 広島地学同好会例会
昭和15(1940)年	世界生活景観地誌 <sup>(11)</sup> 広島地学同好会報
昭和16(1941)年	世界生活景観地誌 <sup>(13)~(14)</sup> 広島地学同好会 報 広島県地誌 地理学 第9巻第11号

# I 篤学者西亀正夫の生涯

著 書	参 考 資 料
<p>青少年少女国史文庫(12巻) 厚生閣書店</p>	
<p>広島県郷土地誌 広島2 中地理教室</p>	<p>広島地学同好会報発行・編輯人となる 東京における地理歴史協議会に出席(尾野作次郎＝高師附中教諭とともに) 広島放送局より「スペインの地理と風俗」と題して放送 安佐郡教員練習会主催の郷土地理講習会に於て「安佐郡の地理的研究」と題して講義 芦品郡新市小学校の地理研究会で「日本地理」一般について講演</p>
<p>総合式地理教授の実際(共著) 尋5 古今書院 総合式地理教授の実際(共著) 尋6 古今書院</p>	<p>雑誌「デルタ」創刊, 古今書院(昭和12年10月) 会誌「地球」廃刊(昭和12年6月) 愛媛県に講習および研究のため出張</p>
<p>広島県郷土地誌 広島地学同好会編輯部 日本地理教材辞典 厚生閣 地理区と地理教授 古今書院</p>	<p>尾道市久保小学校における地理科研究会で「最近地理教育の動向」につき講演</p>
<p>重要商品地理学 古今書院</p>	<p>北満洲へ研究旅行(7.20～8.22) 「史跡の花を採ねて」の題でFKより放送</p>
<p>皇国中心地理教授 東京詫谷書店</p>	<p>町内会長</p>



戦前における地理学・地理教育に関する研究

経 歴	主 要 論 文 ・ 報 告
	共栄圏の理想的性格 地理学 第9巻第4号
昭和17(1942)年	世界生活景観地誌 <sup>(15)</sup> 地学 第13巻1号
昭和18(1943)年 昭和19(1944)年 昭和20(1945)年 8月7日、建物疎開中原爆にあり戦災死	世界生活景観地誌 <sup>(16)</sup> 地学 第14巻1号

浪漫地理学派、歴史地理学派等あらゆる新旧の主張乃至は学风が一時に濫立して、帰する所を知らざりし時代」(p. 121)

明治35～6年より始まり、大正時代を経て昭和初年に至る後期は、「次第に成熟して行く自然主義の大波に併合され行く情勢に始まり、その爛熟時代を経て、やがて人間主義の抬頭により崩壊過程に入る頃までである。言わば自然主義的地理学の黄金時代と見ることが出来よう。」(p. 121) とまとめられている。

このような日本の地理学発達段階からみると、西亀正夫はまさに近代地理学の成熟時代から活躍しはじめたといえよう。

西亀正夫の生涯を地理学発達史（地理教育を含む）との関わりでみてゆくと、大きく3期に区分できるであろう。

### (1) 第1期——地理学建設時代

明治30年頃から明治45年頃までの明治時代である。独学で小学校の教員免許状を獲得する努力をしながら次第に地理学へ傾斜を強め、中等学校の地理科免許状の獲得へ向かった時代である。明治44（1911）年3月中等学校地理の免許状を獲得した。この期間の地理関係の雑誌としては「地学雑誌」のみであったこと、当時の地理学界は自然地理学派の抬頭時代であったこともあり、また文検受験のためにまず自然地理学の勉強が必要であっ

# I 篤学者西亀正夫の生涯

著 書	参 考 資 料
広島県地誌 日本地歴研究会 編 恒春閣	
広島県地誌(改版) 日本地歴 研究会	墓地は豊田郡安芸津町風早にある

たことも関係していると思われるが、自然地理学に関わる報告を行なっている。この期間は西亀正夫にとっては地理学の建設時代であった。

## (2) 第2期——地理学成熟時代

大正初めから大正末頃までの大正時代である。主として高等女学校に勤務し、その校長となって、教員としては一応頂点をきわめたといえよう。岡山県西大寺高女在勤中は舎監として、寄宿舎の経営に没頭し、生徒の自治に就いて優良な実績をあげている。福岡県羽浮高女在職中は主として教授法に向かつて全力を尽し、その教授法は模範的教授法として有名であった。このことが福岡県当局者の認めるところとなって学事調査委員(地歴)に抜擢され、福岡県下地理教育改善につとめた。また、各地の講習会などの講師として活動した。

創刊された雑誌「歴史と地理」「地理教材研究」をはじめ、「教育界」「現代教育」などの雑誌に多くの地理学・地理教育の発展・充実・改善に関わる報告を行なっている。青野寿郎「本邦地理雑誌興亡記(4)」によると『地理教材研究』は大部分が各地在住の中等学校地理科教師の執筆にかかるもので、主としてそれらの人々の在住地域の真面目な地理紹介と目されるものである。……論文執筆者は全体を通じ会の代表者たる西田教授が殆んど毎号書かれている外は、北海道函館の松丸乙近氏、広島<sup>●●●</sup>の西亀正夫氏、福

岡の金尾宗平氏、奈良の三村信男氏、浜松の佐々木清治氏、三重の辻井浩太郎氏等の名が見受けられる……」と述べてあり、西亀正夫の活躍の様子がうかがえる。この期間は人文地理学とは何かを摸索し、地理教育はどうあるべきかを纏めた時期と云える。

当時、地理学の本質について、次のように述べている。「自然地理と人文地理とを2つながら研究するということは、どうも一つの独立した科学として不徹底だと思います。現今の地理学は何だか各種の自然科学と人文科学との併列の様に思います。生物地理学は生物学とは違ひ、政治地理学は政治学とは違って居るにしても、気象地理学と気象学、水界地理学と海洋学とは差異があるか不明です。私はジョーンが『地理学は人類の生態を論ずる科学なり』と論じたのにヒントを得て、地理学は人間生活と自然環境との関係、即ち『自然に対する人間の「アッヂャストメント」の研究なり』と云はんとして居ます。ですから私に取っては地形学も、地震学も、気象学も、海洋学も、凡て地理学の基礎であって、真の地理は以前の人文地理と云って居た形の部分に存するのであると考えて居ます。」この所論は、当時においては進んだ妥当な説であったといえる。

吉田高等女学校校長時代も常に英・米・独・仏の地理書や雑誌を収集して研究をつづけ、地理学の新傾向たる人文地理学を大成しようと日夜努力をつづけた。

まさに西亀正夫にとって地理学の成熟時代といえる期間であった。

### (3) 第3期——地理学完成時代

昭和初年頃から昭和10年代後半までの昭和の戦前時代である。広島県立広島第2中学校の教頭として勤務し、地理学、地理教育について自分の考えを次々に著作として発表した。小学校地理教育のためには『具体化せる小学地理教材と教授法』シリーズであり、自分の地理学体系を著したものとしては『人文地理学講義（上）（下）』であり、地理に興味をもたすためには面白い地理読本が必要であるという年来の主張からは『少年少女世

## I 篤学者西亀正夫の生涯

『趣味の地理学習旅行文庫』、中学校生徒の自習用として作成し準教科書として採用された『最も能率の上る日本地理の覚え方』などとして結集したといえる。さらに地理の専門雑誌「地球」「地理学」の創刊にあわせて多くの投稿をした。文部省検定試験受験者や小学校教員のための講習の講師として広島県は勿論、中国・四国・九州の各県で活躍している。広島では「広島地理歴史同好会」<sup>(2)</sup>「広島地理学会」<sup>(3)</sup>「広島地学同好会」などの中心的人物として例会・発表会などでは必ず発表した。まさに西亀正夫にとって地理学の完成時代といえよう。

西亀正夫の地理学界における位置づけについては、山口貞雄著『日本を中心とせる軌近地理学発達史』によると、「前期時代より活動していた東京女高師の野口保興氏、東京高師には矢津昌永に代って大関久五郎、奈良女高師には西田与四郎、広島高師には中目寛氏を始めとして……、他方、中、小の中等・初等教育界にも、数多くの専門家が、大正以後簇出した。文部省囑託の小田内通敏氏、広島県の西亀正夫氏、長野県の三澤勝衛氏、大阪の山極二郎氏、東京地学協会的小林房太郎氏などはその中の錚々たる人達である」(p. 139)「中等乃至は初等の教育界に身を置きながら研究に、指導にと、発達史を飾るべき人達は数多い。今記憶のみを辿って見ても大正頃より活動された小林房太郎氏、石川成章氏、西亀正夫氏、小田内通敏氏等の外に、太陽黒点と取組み、その隻眼を失ふも止めず、且つ信州の地理学的研究にその一生をかけられた故三澤勝衛氏、……大阪地理学会の生みの親であられる故山極二郎氏、東京高師の生んだ鬼才と唄われ……故川口丈夫氏等は、今は亡き学説史を飾る巨人達である。」(p. 193~194)「これ等の熱心な研究家等によって送られた論文及び著書は数多く、中には指導論文として学界に重きをなせるものもある。又中には単なる実証的研究の域を脱して本質論に関する論争さえ繰り広げられてゐる。……又同様に元老的位置にある西亀正夫氏と、香川幹一氏、川口丈夫氏とが参加しての「地理区」に関する論争も当代を飾る一挿話である。」(p. 195~196)と評価しており、西亀正夫は大正時代から昭和10年代まで日本の中等・初等の

地理教育界において地理学の建設・地理教育の改善を唯一の「モットー」として終始一貫、奮闘努力した第一人者といえよう。

西亀正夫の地理教育界における位置づけをするとすれば、矢津昌永、牧口常三郎、守屋荒美雄などの第一世代について、小田内通敏、西田與四郎、三沢勝衛、山極二郎氏などともに西亀正夫は第二世代に位置する人物であり、香川幹一、山本熊太郎などの第三世代へと移っていく間に位置していると言える。

西亀正夫が若い研究者のために、自分のたどってきた道について話した次の言葉をみれば努力のあとを窺うことができる。

「私は徹頭徹尾、独学でやって来ましたが、決して私の頭がよいわけはありません。ただ努力したのであります。私は小学校をでてから今日まで職務の傍一日6時間の勉強を怠った事はありません。従軍中は2時間に減じましたが、それでも日曜日などには1日13時間を読み通したこともあります。今日でも、毎日6時間は必ずぶつうしでやります。私は20幾年間1日として夜の12時より早く寝たことは無いのです。それから私は勉強のために次の様なことを誓ひました。第一、寄席、芝居の類は一切覗かぬこと。第二、物見遊山は決してせぬこと。第三、人の家を訪問して坐り込まぬこと、用事はなるべく立ちながらすませること。第四、友だちが遊びに来てても要用でなければ勉強すること。但し、自分の研究した事を聞いてくれる人なら大いに話す。それがために今日まで真の知己はありますが、世間で云う所謂友だちが一人もありません。能も、釣も、獺も、生花も、盆栽も、之等の道楽を持ちません。私の道楽は研究旅行、読書すること、書くこと、しゃべることだけです。」(…は筆者による)

先生の教えを受けた生徒や教員の中には、これ等の話しを聞いて発奮して成功した人も多い。

昭和9(1934)年4月ごろの、西亀正夫の悲願を立てて努力しようとする「姿」が、広島地学同好会報(第5巻第1号)「悲願を立てて」に見ることができる。会員 SEIKO 生の署名で、書かれている。

## I 篤学者西亀正夫の生涯

「最近、地学方面でも諸種の会合や会合の数が増し、出版物・紀要・会誌・科学雑誌など澤山でき、書く人も読む人も多くなった。多くの学者が早く次々貴重な論文を書いている。自分もなんとか物にしなければならぬ。このためには“悲願をたてなければならぬ”。

本年はその一年として単文50編と纏った本2冊を書くことにした。毎月5編は書けるかもしれないが、忙しい時間の間や研究の暇に2～3冊の単行本を書くのが大変だ。精力体力に乏しい自分ではあるが、力のつづく限り筆の運ぶ限り渾身の力を注いで、この願いを成就すべく努力する覚悟である。」というわけである。

西亀正夫の執筆への意欲が伺われ、また実行したのである。

### 〈注〉

- (1) 明治40年7月、吉田町外6カ村組合立乙種農学校創設（尋卒3年制）。大正2年4月、女子部付設。大正8年5月、高田郡立農学校と改称。大正8年5月、女子部分離、吉田町外6カ村組合立吉田女子技芸学校開設。大正10年4月、吉田実科高等女学校と改称（尋卒4年制）。大正12年4月、組合立吉田高等女学校と改称。大正15年4月、県移管、広島県立吉田高等女学校。現在は、戦後の学制改革により広島県立吉田高等学校となっている。
- (2) 中等学校の地歴担任教師の組織であった、教授法の研究やエキスカージョンをしていた。広島高師の及川儀右衛門、広島二中の西亀正夫、広島市商の上原三衛、広島県商の田中源三、山陽中学の香川等などが中心に活動した。
- (3) 小学校の地理科主任や地理好きの人の集りで、主として郷土研究を行なった。西亀正夫が先達で、皆実小の奥村熊夫、天満小の片山美夫、神崎小の波田勝などが活躍していた。

### 〈参考文献〉

- (1) 雑誌「地理学研究」、帝国書院、第1巻～第8巻。
- (2) 雑誌「芸備教育」、広島県教育会、第16号～第417号。
- (3) 雑誌「地球」、地球学園。
- (4) 雑誌「歴史と地理」、史学地理学同致会。
- (5) 雑誌「地理学」、古今書院。
- (6) 雑誌「デルタ」、古今書院。

- (7) 会報「広島地学同好会報」。
- (8) 雑誌「地理教材研究」，目黒書店，第1～15輯。
- (9) 雑誌「地学雑誌」，東京地学協会。
- (10) 山口貞雄：「日本を中心とする輓近地理学発達史」，済美堂，昭和18年。
- (11) 守屋荒美雄記念会：守屋荒美雄伝，昭和15年。

## 2. 文検地理科への合格

### (1) 出生から高等小学校卒業まで

西亀正夫は，明治16（1883）年1月1日，広島県賀茂郡風早村（早田原村を経て現在は豊田郡安芸津町風早）の能島家の3男として生まれた。明治23（1890）年7月風早小学校簡易科下級を修業，改正小学校令の施行により風早尋常小学校に移り，明治25（1892）年12月第3学年を卒業した。つづいて補習科に2年在学し，隣村三津町（現在安芸津町）にあった三津高等小学校へ進み，明治30（1897）年3月高等小学校（修業4年）の過程を満14歳で卒業している。

### (2) 准訓導としての勉強時代

高等小学校卒を業すると，広島市にあった研学館において漢学・数学・英語を修業した。明治31（1898）年6月には小学校教員検定試験により尋常小学校准教員免許状を受け<sup>(1)</sup>，明治31（1898）年7月より賀茂郡内海村（現在安浦町）の内海尋常小学校准訓導として勤務した（図Ⅰ－1）。明治32（1899）年5月からは，賀茂郡仁方町（現在の呉市）の仁方尋常高等小学校准訓導として明治36（1903）年6月まで4年2カ月勤務している。この間に月俸は6円から10円に昇給している。

この間に尋常小学校本科正教員免許状をとるための勉強にはげんだ。

### (3) 高等成師学会による文検準備時代

一方，仁方尋常高等小学校に勤務していた明治34（1901）年7月から明

小学校教員免許状	
修身科教育科国語科 算術科地理科歴史科 習字科	廣島縣 能島正夫 明治十六年一月生
右ハ前記ノ科目ニ就キ検定シ本證書授與ノ 日ヨリ向七ケ年間廣島県管内ニ於テ尋常小 学校本科准教員タルコトヲ免許ス	
割印 明治三十一年六月廿五日 廣島縣印	第一三六五號

図 I - 1 小学校免許状の写し（生年月日は明治13年5月で受けている）

治36（1903）年6月まで、東京にできた高等成師学会に入会して地理歴史・法制経済について修業している。高等成師学会は帝国書院の創立者守屋荒美雄氏等が明治34（1901）年4月に設立し、高等師範学校の教程に遵拠して、教育倫理、地理歴史、法制経済の3種の講義録を発行し、通信教授によって、日本の中等学校（師範学校、中学校、実業学校および高等女学校）教員の欠乏を補充することを企画したものであった。入会金15銭、会費毎月50銭、講義録毎月2冊配布であった。

この高等成師学会の地理歴史の講義録を熱心に読んだことが、地理科の研究に専念する動機になった。地理歴史および法制経済の講義録をとって勉強することは、当時の月俸が6円程度であったことを考えると大きな出費であった。

この当時のことを西亀正夫は『守屋荒美雄伝』<sup>(3)</sup>のなかで「守屋先生の思ひ出」として次のように述べている。

「……まだ、日露戦争より前のこと、私は小学校を卒業して准教員を勤



めながら、何か勉強したいという念願に燃えて居た。その時、高等成師学会というものが生れて、教育、法制経済、地理歴史という3つの講義録がでることになったので、早速その地理歴史部に入会したのが、私の地理に携わるようになった最初の動機であった。……

そのうち、高等成師学会の懸賞論文があったので、それに応募して2等（1等は無かった）を与えられ、“君は頗る有望だから是非文検を受けろ”とすすめられた。……しかし私は文検を受けようにも当時18歳で年齢が足りなかったので、そのことを申し上げると、“生年月日を3年ほど前にすればよいではないか”と教へられたが、その時はまだ私には十分な自信が無かった。」

高等成師学会の第1回懸賞論文2等を受けたのは明治35（1902）年6月であった。<sup>(4)</sup>この題目および内容については不明である。

地理科の文部省検定試験を受けるための準備のためか、児童数の減少のためか、明治36（1903）年6月仁方尋常高等小学校を依願退職した。この間、明治35（1902）年2月より明治37（1904）年3月まで2年2カ月にわたって、大日本英語学会において英語を修業した。

依願退職後3カ月して、明治36（1903）年10月から広島県安芸郡渡子尋常小学校（現在の音戸町渡子）に代用教員として勤務することとなった。

#### (4) 召集時代

日露戦争が起ったので、明治37（1904）年4月召集され、広島市にあった歩兵第11聯隊補充大隊に陸軍看護卒として入営することとなって、折角の勉強が一頓挫することになった。ところが飽くまで学究的な西亀看護卒は、少閑をぬすんで勉強にはげんだ。明治37（1904）年9月からは看護手代用として軍医の事務補助を命ぜられたこともあって、入営中も2時間は勉強した。日曜日などには1日13時間読み通したこともあったと話している。この入営中に高等商業学校出身の戦友がいたので、刺激を受けて英語の独学に猛進し、入営中の明治38（1905）年11月までの約1年半のあいだ

## I 篤学者西亀正夫の生涯

に、当時の中学校英語教科書ナショナルリーダーの第4学年までを習得したと言う。

### (5) 安芸郡小学校時代

召集解除後は広島県安芸郡瀬戸尋常高等小学校（現在の音戸町）に、明治38（1905）年12月から明治39（1906）年2月までの3カ月間代用教員として、明治39（1906）年3月から11月までの9カ月間は准訓導身分で尋常科教員として勤務した。つづいて広島県安芸郡奥内尋常小学校（現在の音戸町）に移り准訓導として、明治42（1909）年4月依願退職するまで在職した。

瀬戸尋常高等小学校、奥内尋常小学校に勤務中は、文検受験の準備とともに地理研究につとめ、研究結果をつきつぎに発表した。

筆者の調査したところでは、最初の投稿は、芸備教育<sup>(5)</sup>、第31号（明治39（1906）年11月25日）に教授資料として書かれた『『港湾に就て』・音戸・能島正夫』であった。これは音戸村の瀬戸尋常高等小学校に勤務し、結婚する前のものであったことを示している。明治40（1907）年3月15日に西亀家の婿養子となった。

この教授資料を書くにあたって二三の経済地理書を参考にしたとあるが、第一は、牧口常三郎の『人生地理学』（明治36《1903》年発行）が考えられる。『人生地理学』第1篇第15章に港湾があり、第1節港湾と人生、第2節港の要素、第3節港湾要素の人工的補欠、第4節要素具備の程度により生ずる港湾の種類及び階級、第5節貨物の<sup>どんと</sup>吞吐作用による港の区別、第6節港湾の成因と要件、第7節港湾の盛衰、と項目だてされており、これを参考に小学校教員を対象にしたまとめたことはあきらかである。

西亀正夫が残した勉強帳明治38（1905）年7月27日の日付けのある「No 3, Physical Geography, M. Noshima」の中に「港」についてのメモがある。

## (6) 文検合格

明治41(1908)年は、論文執筆で活躍した年であるとともに、文検地理科のために勉強した年でもあった。除隊後、例の講義録でまた勉強をはじめて、思い切って受験したと述べている。

前述の勉強帳よりみるに、吉田弟彦『地文学』、佐藤伝蔵著『地質学』、牧口常三郎著『人生地理学』、地学雑誌、新聞などで勉強した跡が残っている。人生地理学の内容への異説、山崎直方の人文地理の考え方についてなどのメモもある。ほかにも地文で『新撰大地文学』(6冊)、石川成章『地文学講義』、『地文詳論』下編、地誌で、山上萬次郎『新撰大地誌』日本の部外国の部(各3冊)、地名辞書、などで勉強されたことをうかがえるメモがある。また歴史、法制経済、測図、物理化学、代数幾何三角、英語の勉強も必要と思われていた。この文検受験については、昭和13(1938)年、「地理学」第6巻第10号に「30年前の文検」として書いている。

明治41(1908)年9月実施された第22回文部省教員検定試験地理科予備試験に合格した。さらに、明治42(1909)年2月実施の第22回文部省教員検定試験地理科本試験を受けて、師範学校女子部・高等女学校の免許を得た。師範学校男子部・中学校の免許試験とは一部の問題が略されている。本試験、示物教授法試験についてみても、地文学の内容が多く、当時の地理学の傾向を反映していた。

第22回地理科教員検定本試験合格者は21人であり、うち6人が師範学校女子部・高等女学校の教員合格者であった。26歳の若さで合格したのである(矢津昌永20歳、牧口常三郎24歳、守屋荒美雄24歳)。西亀正夫は、辛じて合格したと述べている。一度に師範学校・中学校・高等女学校の免許状に挑戦せず、師範学校女子部・高等女学校に絞られたのは安全確実を考えてであろうか。師範学校男子部・中学校の地理科の免許状は、明治44(1911)年2月の検定で獲得している(図I-2)。

文検に合格して私立松本学校の教諭になったことで、奥内尋常小学校時代の月俸10円から月俸30円と約3倍になっている。文検に合格して中等教

# I 篤学者西亀正夫の生涯

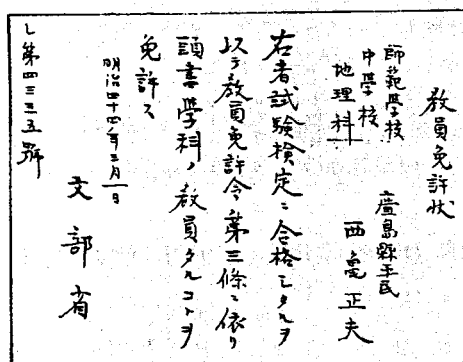


図 I - 2 教員免許状の写し

教員免許令の第3条は「教員免許状ハ教員養成ノ目的ヲ以テ設置シタル官立学校ノ卒業者又ハ教員検定ニ合格シタル者ニ文部大臣之ヲ授与ス」

員になることが経済的に如何に魅力あるものであったかがわかる。

## 〈注〉

- (1) 研学館は私的な准教員資格をとるための塾ではなかったかと思われる。
- (2) 明治30年12月10日に尋常小学校本科准教員試験科目中算術科（筆算）と歴史科に及第している。
- (3) 守屋荒美雄伝，守屋荒美雄記念会，昭和15年2月10日発行，p. 644.
- (4) 賞金として金参円を高等成師学会会長子爵長岡護美より与えられる。
- (5) 芸備教育は，明治37年6月創刊，毎月1回25日に発行。広島市皆実村，広島県私立教育会が発行，一部金2銭，郵税5厘であった。この雑誌のおもな執筆者は広島師範学校の教諭訓導であった。

## 3. 任地における実践と研究

### (1) 教員養成所時代における実践と研究

地理科の中等教員免許状を得ると，明治42（1909）年4月から私立松本学校の教諭となった。松本学校は，明治34（1901）年4月，松本隆興が創設し，明治36（1903）年5月，準教員養成所（修業1年にて準教員免許取

得)として認可を受け、明治40(1907)年4月、正教員養成所(修業年限2年にて正教員免許取得、準教員コースも併設存続)として認可されていた。学校所在地は賀茂郡吉土實村(現在東広島市西条町吉行)にあった。勤務年限は、明治43(1910)年8月までの1年5カ月余と短かったが、このときの教え子の中には後で共著者となった奥村熊夫がいる。当時、教員数12~3人、生徒数男50人、女30人で別学であった。

明治43(1910)年9月から愛媛県越智郡亀岡村(現在菊間町)にあった私立伊豫教員養成所に移った。伊豫教員養成所は明治39(1906)年4月1日開校、12月小学校尋常科准教員無試験検定の認可を得て修業年限1カ年で准教員を養成していた。明治44(1911)年には教員5人、男子15名、女子12名であった。この教員養成所に勤務してした時から愛媛教育協会発行の雑誌「愛媛教育」に多くの執筆を行なった。

「愛媛教育」第304号「小学校地理教授」(大正元年9月25日)において「小学校の地理教授は、地図を軽んじた地名物産の陳列に陥っている、基礎的観念を無視した机上の空論になっている。地図学習が行なわれていないことに問題がある。」ことを指摘した。この論は牧口常三郎著『教授の統合中心としての郷土科研究』(以文館 大正元年11月刊 60~61ページ)に転載されている。

「愛媛教育」第314号「地理教授法私見」(大正2年7月25日)において「教科書中心の問答主義の教授法を提唱してある。地理は理解的の学科である。」(後で再述する)との論を張っている。

## (2) 岡山県西大寺町立高等女学校時代における実践と研究

西亀正夫は、明治45(1912)年2月9日付で西大寺町立高等女学校教諭に移り、3月31日舎監に任ぜられ、大正6(1917)年3月31日まで教諭兼舎監として勤務することになる。

大正2(1913)年からの校務分掌をみると表1-2のようである。

西大寺高等女学校創立30周年記念号「玉かさし」(昭和11《1936》年4

# I 篤学者西亀正夫の生涯

表 I-2 校 務 分 掌

大正 2 年 4 月	監督部長，監督係 地理科主任，歴史科主任，本二担任	舎監 校友会講演編集係
大正 3 年 4 月	監督部長，監督係 地理科歴史科主任，本一担任	舎監 校友会学芸部長
大正 4 年 4 月	監督部長，生徒団指導長 地理歴史科主任，本二担任	舎監 校友会学芸部長
大正 5 年 4 月	庶務部長 地理歴史科主任，本三担任	舎監 校友会文芸講演及会誌編集係

月)のなかに、広島第2中学校西亀正夫署名の「思い出」の記があり、勤務時代の様子を伺いすることができる。

「思い出」の記および大正2(1913)年の校務分掌などからわかるように、大正2(1913)年までは地理科・歴史科は勿論、国語科も教えていた。大正3(1914)年4月からは地理歴史科のみになり時間数が減少している。当時は1人で地歴を担当しなければならなかったことがわかる。

また、着任後に和歌の講義を月に1回行ない、和歌の指導を行なっている。「玉かかし」の第8号～第11号でみると、碧潮なる雅号により、年に6回前後、生徒の詠んだ歌を選んで発表し、末尾には自分の詠んだものを付けている。和歌の指導は在任中続いている。

寄宿舎生の修養をはじめ全生徒の修養に力をいれ、丹下マツ女史による講話を何回も行なっている。

西大寺高等女学校時代の地理教育に関する発表には、岡山県教育会機関誌である「岡山県教育会誌」第114号(大正2《1913》年1月号)、第115号(大正2年3月)、第119号(大正2年11月)の3回にわたって書いた「地理教授の三大缺陷」という論述がある。

第1の欠陥は「教材の排列」であり、第2の欠陥は「地図教育の不充分」、第3の欠陥は「一般に教式が如何にもまずい」をあげて論じている。中でも注目することは「地図が即ち教科書である地理書はその説明書だ位に考

へてほしい。」と地図基本主義の教授を主張している。

西大寺高等女学校時代に地理教科書の執筆に参与している。『守屋荒美雄伝』の「守屋先生の思出」のなかで、「私が岡山県の女学校に奉職していた時に、堀孟志君が来られて先生の地理教科書を紹介された。尤もその頃先生の名は表面に出されないで、地理教授同志会という名で、全国の同志が相互に筆をとると云った形式であって、私もその一人に加へられ、その翌年には謄写刷の原稿が廻って来て、筆を加へさせられたものである」とあり、帝国書院発兌、地理教授同志会編纂『日本地理・外国地理・地理概説』の編纂・執筆に参与したことがわかる。

大正4（1915）年には、地歴教室と地理博物実習室がつくられ、地理教育の充実に努力されたことが推察できる。

### （3） 福岡県立浮羽高等女学校時代における実践と研究

大正6（1917）年4月1日から福岡県立浮羽高等女学校に勤務した。浮羽高等女学校は福岡県浮羽郡吉井町に明治41（1908）年4月1日浮羽郡立浮羽高等女学校として設置され、大正4（1915）年7月より福岡県立浮羽高等女学校となった。西亀正夫の着任当時は、学級数8、生徒数309名、教職員16名と前任校とほぼ同じ規模であったと言えよう。

大正6（1917）年の着任当時には、地歴を受け持つ教諭は西亀正夫と裁縫と地歴を持つ女教諭の2人であったと推定される。当時の学科課程表から地歴の時数および内容を見ると、

第1学年	3時間	日本歴史、日本地理
第2学年	3時間	日本歴史、満州地理、世界地理
第3学年	3時間	外国歴史、世界地理
第4学年	3時間	外国歴史、日本歴史、地理概説

であり、各学年は2学級であったことから地歴総時数は24時間あり、西亀正夫が地理・歴史の授業の大部分を持ち、女の先生が一部を持つたと思われる。

## I 篤学者西亀正夫の生涯

大正12（1923）年9月まで在任し、①地理教育の関する研究、②修正小学校地理教科書研究、③聚落の研究・交通の地的研究などの教材研究、④地理学の研究、⑤浮羽高女における実践、⑥福岡県における学事調査委員（地・歴）としての活躍など、地理教育、地理学における発展、改善・充実にそそいだ努力は、ただただ驚嘆するのみである。

この浮羽高等女学校時代における地理教育に関する研究のうち目立つ点は、地理実習に関する研究であり、それに必要な教具の開発、地理教授に必要な設備、郷土調査についての発表が多い点である。

福岡県立浮羽高等女学校に着任すると、大正6（1917）年7月15日には福岡県教育会浮羽郡支部総会において、「郷土誌に就て」という発表を200名の参加者を対象に行ない、また大正6（1917）年12月には「地理実習法について」の講習会を開いている。

教具の開発の一つとして、「測図版」の考案は地理実習に力をいれた点からも注目されよう。

測図板については「新案測図板」（「現代教育」第59号，大正7（1918）年6月号）に書いている。

測図板は、「私の考案したもので、僅かに一個十銭でできるから、全生徒に買はせて居る。この測図板は13種の用途ある極めて重宝なものであるから、試用御希望の方は代価と郵税を送り下されば、スグ実物をお送りします。(実費 1 個10銭, 郵税10個迄八銭)」と測図板の宣伝がしてある。

「これは自分の学校（浮羽高等女学校）のみならず2～3の小学校でも使用して見て、非常な歓迎を受けて居る」と使用実験もしてある。

測図板と名付けたのは、「あまりに用途が広いので名のつけ方に困って  
假りに名付けたものであり」その構造は「一枚の平たい金属板に回転する  
肘木を取りつけたもの」であると名称と構造を説明してある。

その用途の主なものの次の13をあげている。

1. 地図上に於て甲地点が乙地点の何れの方位にあるか測定できる。概略の方位のみならず極めて精密な方位もわかる。この場合には普通の



三角定規を併用するとよい。

2. 地図上に於て2地点間の直距離を測ることができる。之は尺度があればできる話しであるが、この器があれば尺度はなくてもよい。
3. 地図上に於て2地点間の曲線距離がわかる。即ちカービメーターに代用することが出来る。もとよりカービメーターの様に精密には出来ぬけれども、下手にやっても十分の一以下の誤差を生ずるに過ぎない。
4. 地面の傾斜を測ることが出来る。即ちクリノメーターの代用をするので、上手にやればクリノメーターと殆んど違はぬ価が得られる。
5. 山の高さを測ることができる。之も精密に注意深くやれば殆んど精確な価が得られる。
6. 太陽や北極星の高度を測ることができる。それによって其地の緯度が知れる。
7. 磁石を併用すれば太陽や月の出没方位を測ることが出来る。
8. 磁石を併用すれば谷の走向や河川の方向其の他何でも地物の方位方角を測ることができる。
9. 磁石を併用すれば三角測量が出来る。即ち行く事能わざる地点の距離や位置が極めて正確に知られる。
10. 晴天の日でさえあれば磁石が無くても方角を知ることが出来る。
11. コンパス代用をする。即ち紙上に任意の大きさの円や弧が書ける。
12. 分度器の代用をする。即ち円や半円を任意の角度に区分することが出来るから、比較図表などを書くに極めて便利である。
13. 定規の代用にもなる。

うち2, 4, 7, 12の用途は活字を落として書かれており、用途としては二次的のものと考えたのであろう。

「この様な種々の用途があるのであるから、この器一個で地理上の実測の大部分が出来るのみならず、別にコンパス・分度器などを買う必要がないから非常に経済的で重宝である。」と経済性も強調してある。

さらに、「今その使用法に就いて図でも書いて説明すればよいのである

が、その実物を見ない人には一寸わかり難かろうと思って差控へた。」と事物の詳細の説明はさけている。

次に「教授用地図」について、「現代教育」第67号、(大正8〔1919〕年2月号)に独特の考えを述べている。

「地理科の教授に地図の必要なことは云うまでもないが、書店で販売して居る普通の掛図のみでは充分では無い。必ずや土地の情况学校の模様に適用した種々の郷土地図を作らねばなるまいし、また近時高唱されつゝある地図基本主義、実習中心主義の授業法をとる上からも、種々の特殊な地図が必要である。しかもこれらは教師自身で作らない限り、到底満足なものとは得られないのである。」という認識から、地図の製作の指針にということから書いたものである。

「一般の掛図については、大体私の唱えつつある独自研究式の教授法で云うと、掛図として従来用いられてある様なものは殆んど不用である。兒童自身が地図を有し、兒童自身が描図しつつ学習して行くなれば、教師は掛図を指示する必要は殆んどない。①復習の際の暗射図として、②簡明な説明でもせなければならぬ時の指示用として、③劣等生に対して特に必要な、というようにしか使用することは無い。」と掛図不要論を唱えている。

「もし、また必要があったら教師が即座に板上に書けばよい。初歩教授の際などは殊に教師の描図、兒童の目の前で見る間に出来て行く即席の略図が最も効果が多いのである」として、教師の略図の描図になれることが必要なことであり、教育効果の高いことを強調している。

「就中或小区域の地図、例へば東京市とか日光とか鎌倉とか及至は阿蘇山とかスイスの湖水とか云う類は説明しながら描図するのが一番よい様である。併し、之は可成りに教師の素養を要することで、凡ての小学校教師諸君に望むのは少々無理かもしれぬ。そうなれば時間前に小黒板にでも書いておくか、或は簡単な掛図を製作して置く外は無い」として、地理専門でない教師に対する方策も述べてある。

以上のような考えから、「掛図としては日本全図と世界地図とアジア州

とヨーロッパ州とがあれば沢山である」としている。理由は、日本全図は、台湾・カラフトが大抵一軸になっているからよい。世界全図はメルカトル式であるため面積の誤が甚しいのとアジア州やヨーロッパ州の様な稍詳細を要する部分が小さきに過ぎるので、この2州だけ別図を用意するのだというのである。なお欲を云えば「その地方だけの地図」があればよい。

「これだけの掛図は何時の教授にも必要なので、地理の時間には必ずこれだけを壁間に掲げて置く必要がある。」として、自分の経営している地理教室での配置例を示している。「教室の正面に、右に日本全図、左に世界全図（三省堂の分）、塗板の上にアジア全図とヨーロッパ全図、教室の後方には中央に郷土の地形図（幅約2間あり）、右に福岡県図左に九州全図を掲げて居る。」これだけあれば教授中に指示して説明するには何等差支えない。地図中心学習の基本はあくまでも自分の地図帳を使用するという考えに立っている。

つぎに、地理教育における『地理ノート』の必要性について「新に試みたる地理ノートにつきて」、(「現代教育」第72号、大正8《1919》年7月号)に述べている。この論旨は、「地理科の教授にノートの必要であることは今更論ずる迄もない様であるが、参観した4〜5の中等学校の中には、ノート無しの教授をしている所もあった。贅言の様であるが先ず必要性を説いておこう」というわけである。

「第一に地理教授は地図が基本である。地理教授の効果を全からしめるには、先ず地図教育を徹底せしめねばならない。地図教育の徹底は、単に地図を見せしむるばかりでは不充分であり、是非地図を書かせねばならない。それも歸ってから書いて来いという宅修任せでは不充分、是非とも教師指導の下に教授時間中に書かせるのではなくては充分の効果はない。そのためには是非ノートが必要である。

第二に地理の内容には地図に表わすことの出来ない教材もある。また地図に表わすことは出来てもそれでは教授になって纏りのつかぬ様な事項もある。かかる事柄は是非表記せねばならない。

## I 篤学者西亀正夫の生涯

第三に地図や教科書は一般的で、地方的特色も個性に応じた地理教授するにはノートに応用するのが一番便利である。

その他尚数えたてればいくらかもあるが、これだけでもノートの必要であるということには異論はあるまいと思う。」と必要性を説明してある。

「私は、地理教授に地図基本主義、実習中心主義、自学自習主義を標榜して居るから、ノートの使用については可なり細心の注意を拂い、又相当研究もしてみた。実際私は地理書よりも地図よりもノートの方を一層重んずると云ふ位に考へている。若しも生徒が試験でも受けるとか、それで無くとも復習すると云う場合には、地理書よりも地図よりも、先づ彼等のノートを開くことが最大急務であると考へさせる迄にノートを重んじているのである。」とノートの活用の重んじていることを述べている。

上記のような理由から、教授において、「生徒はノートに地図を描き、地理書の文章を表記し、統計表を作り、問題の解答を作ると云ふ様な、ノートを使用して学習することが全時間の殆んど7～8割に相当している。」と授業においてノートの使用を重大視していた。

従来は普通のノート、罫の入らない白紙ノートを使用していたが、描図に多大な時間がかかり、自論である女子教育においては宅修全廃論者であることもあって、全部教授時間内にやらせるとすれば随分多大の時間を要した。白地図の使用もやらせてみたが価が不廉であるし、散佚し易くもあるし、ノートと共用することは不便であった。そこで、遂に特定ノートの製作ということを思いついた、というわけである。

ちょうど、地理教授同志会で地理ノートの編纂がなされた。西亀正夫も会員として地理ノートの編纂に参加した。これが出来上ったので大正8(1919)年4月から使用した。これによって「私の従来不便として居た点が除かれて、極めて理想に近い教授ができて、非常に愉快に感じて居るのである。」と地理ノートの使用感を述べている。

#### (4) 朝鮮総督府咸興高等普通学校時代における実践と研究

大正12(1923)年4月より朝鮮総督府高等普通学校嘱託(給与216円)として咸興高等普通学校に勤務し、大正12(1923)年10月5日付けで、朝鮮総督府高等普通学校教諭として勤務されることになった。朝鮮に転勤することになった動機は、朝鮮に行くことによる実地研究にあったのではないかと推察される。後述する la brosurita korespondo(「仮とじの通信」, 第6号, 大正13〔1924〕年6月)の末尾に「私の朝鮮満州研究もまず一段落を致しまして、近く内地へ帰還の予定であります。……」とあり、傍証となると思われる。さらに、現在でいうところの単身赴任であり、家族は吉井町(福岡県浮羽郡)に置いて行つたことでもわかる。給与面では浮羽高等女学校で大正12(1923)年年俸1,800円であったが、咸興高等普通学校では月俸135円割増81円であり、給与面ではかなりの昇給となったことが伺える。

咸興高等普通学校における地位は、「大正12(1923)年手帳」や教職員の写真より教頭かその次に位置するところにあったと思われる。大正13(1925)年7月の西亀先生惜別記念の写真より5年のクラス担任であった事が伺える。「大正12年手帳」に、咸興高等普通学校へ帰任する途中の大正12年9月30日から10月1日にかけて、金剛山(外金剛)旅行の記録がある。

大正12(1923)年、朝鮮総督府主催の統計展覧会に「普通教育統計実習方案」を出品して入賞している。大正12(1923)年9月の関東大震災がおこったので、思いつきで「地震計の模型」を考案したとの記録があるが、実体を知るよしがない。

咸興高等普通学校時代の活動で注目すべきことは「la brosurita korespondo」いう「仮とじ通信」を月1回の割合で配布し、地理教材を紹介していることである。咸興時代に6回発行し全体では9回出している。西洋紙を1/4にした大きさで、一頁10～11行、一行25字、8頁のものである。各々の題目は表I-3のようである。その内容は、世界の最近の動向

## I 篤学者西亀正夫の生涯

表 I - 3 「la brosurita koresponda」一覧

N-ro. 1	英国の近状	1924年1月
N-ro. 2	レーニン死後の露西亜	1924年2月
N-ro. 3	世界の言語	1924年3月
N-ro. 4	米国の排日	1924年4月
N-ro. 5	露西亜の政治組織	1924年5月
N-ro. 6	大公使、領事	1924年6月（大正13年6月） （以下広島県吉田高女より発行）
N-ro. 7	奥地利近状	1924年10月（大正13年10月）
N-ro. 8	最近の日露貿易	1925年4月（大正14年4月）
N-ro. 9	鉱物資源と政治活動	1925（大正14年9月）

が中心であることがわかる。

第1号「英国の近状」の末尾に、「この小冊子通信は凡1ヶ月1回出して最新の地理教材を紹介します。希望の方は遠慮なく『朝鮮咸興高等普通学校内西亀正夫宛』に申込下さい。」とある。

第2号の末尾には、「この小冊子通信は凡毎月1回発行して最新の地理教材を報導します。寄贈の範囲が狭いので謄写にして居ますが、将来は活版にし、今少し内容を充実させ度い考です。配布希望の方は……。」とあり、この通信を発展、拡大を考えていたことがわかる。

N-ro. 7「奥地利近状」の末尾に挨拶状があり「7月初旬朝鮮を辞し、吉田高等女学校長となり転任しました。……尚私どもの計画と編輯によって「地理学研究」という雑誌が生まれて居ます。これは特に文検受験の希望者には毎号無代で差上げますから、どうか御遠慮なく私まで御申込み願います。」と書いてある。帝国書院守屋荒美雄発行になる雑誌「地理学研究」に関わっていたことがわかる。

### (5) 吉田高等女学校時代における実践と研究

大正13（1924）年6月30日付けで、広島県高田郡吉田町にあった広島県組合立吉田高等女学校に校長兼教諭として転任した。県立移管になる大正

15年（1926）年3月31日迄1年10ヶ月、校長として勤務した。赴任当時は、教員7人（男5人、女2人）、書記1人、舎監兼務2人など、生徒数は各学年50名で約200名であった。

在任中に校友会誌「愛」の発刊をはじめ、校舎の移転、教員検定試験を受ける人のために毎年二回の教育科の講習会の開始、県移管に対する準備など学校の発展に努力した。

広島県吉田高等女学校校長時代の様子は、地理学研究会の機関誌「地理学研究」第3巻1号、（大正15年1月帝国書院発行）の「地理学に篤学な諸名士傳」のなかで「不屈不撓遂に名誉ある月桂冠を戴ける篤学者とはそもそも誰か、現に広島県吉田高等女学校長として名声一斯界に知られて居る西亀正夫其の人なのである。」と文部省検定試験を受けて教員になった人で、校長になることが稀であったことよりの賛辞となっている。

さらに当時の地理学への取り組みを「氏は最近複雑なる校長生活にも拘らず益々、思想圓熟常に英・米・仏の地理書を収集して、研究は愈々佳境に進みつつある、而して最近勃興し来った地理学の新傾向たる人文地理学を大成せんとして日夜努力している。」と評されており、校長時代も地理学研究に努力していた様子が伺える。

また、大正14（1925）年12月25日から3日間、吉田高等女学校において、小学校の先生を対象に地理の講習会を開かれ、「輓近地理学」について西亀校長、「地理に必要な国際公法」について黒木教諭が指導し、40余名の申込みがあったとの記録がある。これも西亀校長が地理学の普及を考えて行なったものであろう。大正14（1925）年の夏に、愛知県碧海郡地理研究会において「輓近の地理学」について3日間の講習をしている。

その他に、地理教材研究、地球、地理学研究などの雑誌への投稿がみられる。また最初中等学校用参考書『簡明外国地理活法』などの執筆がみられる。

吉田高等女学校時代に校友会誌「愛」は、大正14（1925）年1月から発刊されている。縦15cm 横11cm に、活版で8ページのものである。西

## I 篤学者西亀正夫の生涯

亀正夫校長の発案であることは、岡山県西大寺高等女学校時代校友会誌の編輯の中心におられたことから推察できる。「愛」の使命について、第1号の末尾7頁の下段に次のように述べてある。

△ 生徒や卒業生に対しては、少しなりとも修養の刺激を与えたい。これは私共のささやかな愛の発現です。

△ 父兄や学校関係の方々には、時々学校の様子をお知らせしたい。これは皆様に本校を愛して頂きたいからです。

△ そんな意味で生れた本誌「愛」は、成べく毎月一回位出したいのですが、経済上の関係もありますから当分不定期といたします。

会誌「愛」は第1号（大正14年1月）から第6号（大正15年3月）まで6冊発行されている。

### (6) 広島県立広島第二中学校時代における実践と研究

大正15年（1926）年4月1日付けで広島第二中学校教諭として発令（広島県）され、4月20日に就任している。大正15年度は、地理・歴史を受持ち、中学4年生（19組38名）を担当し、教務係として事務分担をしていた。また校友会では図書部に属し、指導にあたつた。

大正15（1926）年5月は、昭和天皇が皇太子殿下のとき広島県を行啓された。その時に、教育品台覧があり、「泉校長が陳列部長、御親閲当日は山本・西亀……の諸教諭は、それぞれ任務をうけて部署につく等、正に本校総動員の状態にあった」もようである。広島第二中の出品の中に、「地理実習用簡易測図版 西亀教諭」があった。かつて浮羽高等女学校時代に考案した新案測図版を改良したものであろう。

昭和2（1927）年度は2年8組の担任で、主として地理授業を受持っていた。昭和2年11月26日には視学委員稲村純一大阪外語校教授来校、地理科の研究教授あり、中等学校小学校教員61名出席との記録がある。西亀正夫が授業をしたと思われる。

昭和3年（1928）4月1日からは教頭・教務主任となり、昭和3年3月31



当時の様子が「創立60周年記念誌」(p. 200)の中に、「回想 五回笠岡正次」として次のように書かれている。「初代校長泉先生の温容、二代校長清水先生の威と情を兼ねられたお姿は忘れられない。泉先生は『規律ある家庭』ということを目標とし、鉄拳制裁のことは断然これを排しておられたようである。昭和3年4月13日、退職上京せられる時には、全校職員生徒が広島駅に見送りしている。現在とは交通事情も違っているが、師弟間の情というものが濃やかに感じられることである。5月28日の朝会で西亀教頭が『校長去り僅か2カ月にして校紀紊乱したのは自分の罪である』と訓示しておられるが、どのようなことがあったのか生徒の私には知る由もない。……」西亀教頭の校長事務取扱いとしての姿が伺える。

図 I - 3 は、昭和 5（1930）年卒業第 3 回生のアルバムに載せられた当時の写真である。40 代の若さがみられる。

郷土参考室の内容の充実が校友会の事業として進められ、その中心として努力していた。郷土室係は創立当初から、西亀教頭—地理的方面、小川教諭—古草・古書・古文書および郷土関係の図書、渋谷教諭—動植物方面、の3氏が之に当るとあり、西亀教頭の関わりがみられる。

郷土室は、本館2階にはぼ一教室分の広さをもっていた。また、当時の中学校としては珍しく、地歴研究室と2つの地歴教室をもっていたことは注目してよい。西亀教頭の力による面があったのではないと思われる。

地歴教室の隣には地歴研究室があり、そこに地理関係の書籍が準備され、生徒が借り出して読むようになっていた。このため生徒各人から2円の献金を求められたと第6回卒



図 I - 3 広島二中第 3 回卒業アルバムによる、西亀教頭

## I 篤学者西亀正夫の生涯

業生梅田正義は話された。

広島第二中学校時代における研究活動および執筆活動について概観する。

西亀正夫の研究活動は系統地理学のなかでは人文地理学であった。とくに昭和4・5（1929・30）年の『人文地理学講義』(上)(下)で集約されている。広島第二中時代も一貫して集落地理学の研究を続けられていた。また、昭和7（1932）年から9（1934）年にかけては文化地理学について一つのまとめをした。

地誌学に関する研究および執筆は、昭和4（1929）年の『日本地理講義』にはじまり、『満州国中心支那地理』『広島県地誌』『景観区分世界経済地誌』などを中心に、昭和18年出版が困難になるまで続いている。

地理教育に関しては、昭和2・3（1927・28）年、参考書と『具体化せる小学地理教材シリーズ』にはじまり、昭和4～5（1929～30）年にかけて『少年少女地理学習文庫』（12巻）の執筆、昭和7～10（1932～35）年にわたる『郷土の調べ方、地理教育の諸問題、非常時局と地理教育、地理区と地理教授』など、小学校の地理教育から中等教育にわたっている。

昭和7（1932）年には、趣味の『地理学習旅行文庫』（10巻）が出版されており、昭和2（1927）～10（1935）年にかけての執筆活動は驚嘆にあたいする。昭和6（1931）年から7（1932）年にかけて、小学校の地理科主任など地理の好きな人がつくった「広島地理学会」のメンバーなどが校正を手伝ったとのことである。このごろ目を悪くした時期もあった。

昭和5（1930）年1月に「広島地学同好会」が設立されてからは同好会活動の中心メンバーとして活動し、例会では毎回のようにより発表し、発表したものが後に単行本として出版されたものもある。例えば『文化地理の諸問題』はこれにあたる。昭和11（1936）年からは編輯・発行人として広島地学同好会の運営、会報の発行にあたっている。

広島第二中時代も、広島県は勿論、東京・中国・四国・九州など各地の地理学講習会に講師として出張され、文検受験者や小学校教員の指導にあ

たった。

中等学校地理歴史科教員協議会開催にともない、昭和2（1927）年8月に北海道・樺太旅行、昭和4（1929）年7・8月に台湾・南支那旅行、昭和7（1932）年8月に満鮮旅行参加し、現地研究を行ない、その見聞を雑誌、著作などに発表している。

このような活動の様子および西亀正夫その人についての傍証として、次の3つの資料がある。

一つは、西亀正夫自身が、前述したように岡山県西大寺高等女学校校友会誌創立30周年記念号「玉かさし」（昭和11年4月）に「思い出」（広島第二中学校 西亀正夫）として書いたものである。「……私もその頃は若かったのですけれども、今では孫が出来るほどになったのですから、老境に入ったことを自覚せずには居られません。併し元気は相変わらず一ぱいです。近頃は体重も17貫5百といふ肥り方で、昔の痩せ男の面影はありません。日々3時間の読書と4時間の著述とを欠かさず実行していますが、まだ成すべき事のみ多くて常に追はれ勝ちです。福岡で生まれた次男が今高等学校の一年生、その次の女の児が女学校四年生です。長男は高等学校3年の時亡くなり、長女は兵庫県の方に嫁いでいます。あと10年、働き続けねばなりません。十年したら子供を教養するだけの義務は終えますから、それから後は食うことの心配をやめて、一心に学問のために盡したいと思っています。その準備として今しきりに独逸語の研究中です。」（これは昭和10年に書かれたものと推定できる。）昭和10年当時の西亀正夫の姿と家族の様子が伺える。「肥っておられた」こと、「1日3時間の読書と4時間の著述という猛勉強ぶり」、「10年後を考えての学問のために盡したいという地理学研究の意欲」、「ドイツ語の勉強」などをみることができる。家庭の上では、昭和6（1931）年長男恭夫さんの死亡、昭和8（1933）年には奥様の死亡、昭和9（1934）年には長女の結婚、孫の誕生があった。

一つは広島第二中会誌、第8号、昭和12年9月に転退職新任諸先生の紹介欄があり、次のように記されている。「西亀先生には、昭和12年3月31

## I 篤学者西亀正夫の生涯

日附にて御退職になりました。顧れば、先生は、去る大正15年吉田高等女学校より御来任以来、満11箇年、泉校長、清水校長、吉本校長の下に教務主任として、又地歴科主任として、明晰なる頭脳と、圓滿なる人格と、蘊蓄深き学殖とを以って、母校後進の指導と校運の発展とに御盡瘁になりました。特にその間、同窓会副会長として孤々の声をあげたばかりの同窓会を今日まで守り育てて下さいました。今後は専ら山陽中学校に奉職されることになりました。我々は先生の御功績を稱へ、その深き御恩を感謝すると共に先生の御健康と御発展とをお祈りして止みません。」

もう一つは広島二中第一期会『懐旧録』（昭和42年9月15日発行）がある。この中に、「諸先生」（ABC生）という記事があり、次のように書かれている。「西亀正夫先生は、中々の地理学者だった。我々に縁があったのは地理通論で卒業の五年生だった。何故海運は安くあがり鉄道は高くつくかとか、港や渡場や橋のたもには何故町が発達するか、という様な説明や質問で、これは確かに地誌ではなく地理である。これなら少々聞かせて貰わねばならぬと地理学に興味を感じた。昭和3年だったか、先生の著として、『人文地理学』とか言う上下二巻の著作を東京で見た時、成るほど、故あるかなと思った。後のこと、広島高等師範の中に地学同好会というセンターがあったので、月一回の発表会に出席させて貰った処、西亀先生は毎回発表されるので、由って来る処深遠と思った。その頃はもう、山陽中学に奉職されていたらしいが、職務の他に勉強やら学会の世話やらで短命を誘ったというものが、澆刺としていられたのに亡くなった。勉強家は短命に注意を要する。」

以上3つをみても、西亀正夫教頭の広島二中時代の活躍の姿を見ることができる。

### (7) 広島県山陽中学校時代における実践と研究

昭和12（1937）年4月より石田学園山陽中学校に勤務されることとなった。<sup>(1)</sup>年齢54歳であった。当時の山陽中学校は、学生の規律厳正と学力向上



錦  
重  
勤  
**力 努**

図 I-4 昭和14年頃の写真  
と筆蹟（第28回卒業アルバム）

を図ることを教育目標にかかげ、優良教師の招聘、教練教師の増員など、学園は発展中であった。

西亀正夫も優良教師の一人として招聘されたものと思う。原爆により山陽中学校関係資料が消失しているため、山陽中学時代の学校内における詳細を知ることが出来ず、卒業アルバムなどから推察するにとどめる。

校務について、図書部に関係し、昭和15（1940）年3月、昭和17（1942）年3月に卒業生を送り出している。昭和15年3月の卒業クラスはA. B. C組があり、B組を担当され、44人の生徒を送り出している。写真と筆蹟をみると図I-4のようである。昭和17（1942）年3月の卒業クラスはA. B. C.

D組があり、そのうちB組の担任として48人の卒業生を送り出している。卒業アルバムには授業風景があるが、国史・公民・修身の授業も担当されていたようである。

昭和19（1944）年4月からは中学1年A組の担任であった。<sup>(2)</sup>第2次世界大戦が激しくなるに従って学徒勤労令により各地の軍需工場に召集され、また疎解作業に動員されるようになった。西亀正夫も同僚2人とともに昭和19（1944）年7月25日から中学1年生260名をつれて市内家屋疎開作業に動員されている。昭和20年（1945）入学の1年生も7月から作業令によって市内疎開作業に動員され、そのまま歴史的な8月6日を迎えることになった。中1の担任であった西亀正夫は同僚3人、中学1年約260名とともに市内雑魚場町（現在中区国泰寺一丁目の東部）において疎開作業中に被爆され、翌8月7日に死亡された。

山陽中学校時代における地理学および地理教育に関わる研究活動や著作

## I 篤学者西亀正夫の生涯

をあげると、① 地理教育に関わる地理区論争昭和12～13（1937～8）年、② 『地理区と地理教授』昭和13（1938）年、③ 『日本地理教材辞典』昭和13（1938）年、④ 『重要商品地理学』昭和14（1939）年、⑤ 『皇国中心地理教授』昭和16（1941）年などがある。

この外にも広島地学同好会における活動は依然として続いている。「世界生活景観地誌」(5)～(16)はこの期間に執筆したものであり、広島地学同好会報の編集発行人としての会務を引受けて奮闘していた。

### 〈注〉

- (1) 明治40年（1907）4月8日に石田米助氏によって、広島市南竹屋町352番地の1に私立広陵中学校として開校され、大正10年（1921）山陽中学校と校名変更、財団法人組織となった。昭和8年（1933）年、商業学校が併設された。昭和8年当時、全生徒1,500名、職員70名を越える状況に発展した。昭和11（1936）年には職員数78人（事務職員を含む）生徒数1788人（夜間部含む）であった。石田学園は昭和16年（1941）頃、校地5,421坪（校舎敷地2,700坪）、建造物2,520坪を持ち、職員96名、生徒1,890名とある。昭和20年（1945）8月6日、原子爆弾のため校舎と附属施設を全焼した。戦後学制改革で、昭和23年（1948）年新制高校、昭和26年学校法人石田学園に改組した。中・高等学校は石田学園から分離したが、昭和42年（1967）年、広島経済大学が石田学園を母体として設立された。（石田学園50周年記念誌、昭和32年12月3日発行による）
- (2) 広島経済大学助教授紺家逸治は中学1年A組に在学していた。

## Ⅱ 地理学に関する研究

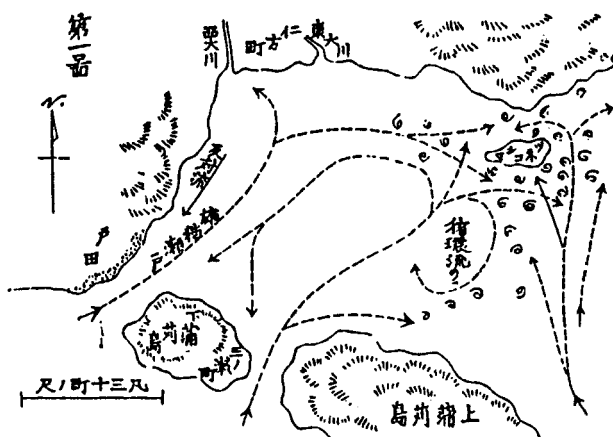
### 1. 自然地理研究時代

地理学の研究は、明治40（1907）年以前から地理学関係の雑誌「地学雑誌」「東洋学芸雑誌」などを講読して研究し、「地学雑誌」の第19年、第225号と第228号に「潮流に依て起こる渦の研究」を投稿している。

この研究は前に勤務していた仁方尋常高等小学校に近い猫瀬戸の渦と潮流について研究したもので（図Ⅱ－1）、西亀正夫の本格的な地理学的研究の処女作と云ってよいであろう。

「潮流に依て起る渦の研究」第225号（p.677～681）は、諸言、地形、潮流、渦流、潮流の混乱、の項目だてで5ページにわたって述べられ、明治40（1907）年8月2日投稿されている。

緒言で「自然界の現象にして、其地に住する者の目には、何の不思議と



図Ⅱ－1 猫瀬戸の潮流（自筆の凸版）

## II 地理学に関する研究

も感ぜぬ事柄も、学者の目に觸れては多大なる興味を以て、世に紹介せらるゝ例甚だ多し、最近本多博士の鳴門の潮流に関する研究の如きも其一なり。博士の記述せらるゝ所によれば、渦流は本流と逆流との境界点に生成し、而して其速かなる流れの方向に随て移動するものなりと云ふ。然れども此の如き例は、吾人の已に屢々之を実見したる事なれども、不注意なる吾人はさして珍らしき現象とも思はざりしなり、曩きに博士の記述の世に公にせられてより、余は始めて舊き觀念を喚び越し、非常なる興味を惹起したり、而して之と同時に、更に其の種類性質を異にする一の渦流に就て研究せんとの好奇心に駆られ、再び其地に旅して遂に此稿を起すに至れり。もとより浅学不才の余が觀察なれば事実の誤りも、特定の謬りも甚だ多き事なるべし、切に先輩の叱正を乞ふ。」と述べている。本多博士（理学博士・本多光太郎）が「地学雑誌」第19年、第218巻（明治40年2月号）論説「鳴門の潮流」（p. 83～91）に触発されて研究に取り組むことになり、仁方尋常小学校に見聞していた猫瀬戸の渦について再調査し、明治40（1907）年9月号に寄稿した。

当時の地学雑誌の寄稿規定（東京地学編輯規定抜粋）によると「1. 雑誌登載ノ材料乃時間ハ編輯委員ニ於テ之ヲ選定ス」とある。当時、無名であった西亀正夫の原稿が「地学雑誌」に載せられたことは、この研究が評価されていたとみてよいであろう。紹介者の有無は不明である。猫瀬戸の潮流は、図II-1の地図のようなものであった。

研究の末尾は、「以上は、余の幼稚なる觀察と2～3無智の漁夫の語る所を総合せしに過ぎず。只此の記事が多少にても学者の疑問を起す材料たるを得ば、事実の真相は他日を期して世に紹介せらるゝ事あるべきを信ず（8月2日稿）」で結ばれている。

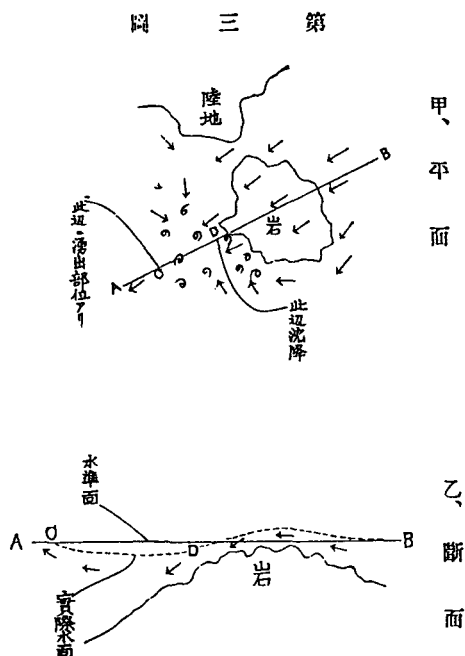
ついで11月2日に第2稿、第228号（明治40年12月号）を寄稿されている。項目は、湧渦の現象、流速の差異により生ずる渦、非常に小なる一種の渦、流れの方向の差異によりて生ずる渦、海底の凹凸より生ずる渦、である。第2稿を書いた理由として「余は前稿において猫瀬に於ける渦流に



就て研究の一端を公にしたり。而して余はその後数回或は汽船により、或は漁船を賃して該地を往復し、其結果前稿に多少の誤謬ありたるを発見せしと同時に、更に種々なる渦流の現象を実見したり。今茲に其の観察の一斑を発表せんとす。若し前稿と齟齬するものあらば、そは前稿の修正なり。」と述べており、明治40年（1907）の夏休暇などを使用して調査し研究を深められたことがわかる。

海底の凹凸より生ずる渦について、「多少広大なる面積を有する岩石が、海面近くに隆起せることがある場合、水の大部分は岩を越えて進まざるべからず、岩上においては、水面非常に隆起し、其反動として、反対側の水面は低下す。その高低差が長さ5米にして殆ど半米にも達せんとするもの、雌猫の東方の海岸近くにおいて実見した。あたかも河の急流に似ている。このようにして岩を越えて流れ落ちる水はが然深みにくるので、ここにおいて海底に沈み両側よりこれを補はんとして流れよる海水と共に大混乱を起し、多数の渦を生ずるに至る。」と説明してある。（図Ⅱ-2 参照）

これらの報告は、小西和著の『瀬戸内海論』に引用され評価されている。「猫瀬戸の潮流に就き、西亀正夫氏は、数回、実地の調査を遂げたとのことで、其結果に據れば、……斯る相違



図Ⅱ-2 海底の凹凸より生ずる渦の模式図（自筆の凸版）

## II 地理学に関する研究

を見る理由は、一つに海底の凹凸と、潮流の速度の差異と、流向の不同に基づくのである。」(p. 503) と著述されいる。

明治41(1908)年になると、雑誌「科学世界」に「日本風景の科学的観察」という報告を6回にわたって連載した。

(其1) (「科学世界」第1巻, 第15号《p. 1184~1186》) においては次のように述べている。「已に志賀先生の日本風景論あり, 山上先生亦我風景を論じて5大標識を定めらる故に, 吾人の論ずべき餘地無きが如しと雖も而も亦自ら独特の所見感想無きに非ず即ち本誌の餘白を借りて之を世に問はんとす思ふに日本の風景は単に之を地形上より見る時は自ら3個の標式あるものゝ如し曰く

- |                              |   |  |
|------------------------------|---|--|
| 地上より<br>見たる日本<br>風景の<br>三大標式 | { | 1. 瀬戸式…島嶼磊落として、瑠璃盤上に壁を列するが如きも瀬戸内海の外松島等をも含む。                    |
|                              |   | 2. 富士山式…白扇倒に懸る東海の天即ち之なり然れども単に単成火山のみならず塊状火山の讃岐富士花崗岩の伊豫小富士等をも含む。 |
|                              |   | 3. 耶馬溪式…妙義山寒霞溪立久恵の如き集塊岩の風景なり。                                  |

更に……日本風景の優美瀟洒跌宕なる所以のものは単に地質地形等のみの所成にあらず, 必ずや之を洵欄彩色する所の或他の物質無かるべからず然り大に有り曰く水曰く生物曰く天体曰く人工即ち之なり。」

(其2) (第2巻2号, 《p. 127~p. 130》) においては, 耶馬溪, 瀬戸内海にわけて詳述している。(其3) (4号, 《p. 219~222》) には紅葉, (其4) (第8号 《p. 533~537》) には紀州熊野, (其5) (第10号, 《p. 689~691》) には海, 桜, 春の野山, (其6) (第11号, 《p. 748~786》) には水の景色, 流るゝ水, 飛ぶ水, 湖沼に分けて述べている。

前述の小西和『瀬戸内海論』の第14, 内海関係の23の学術, 6. 風景の分類観察, 1. 日本の風景と瀬戸内海で「……近年, 井上禧之介氏は地学上, 日本の風景の成因を探求, 分類して, 之を富士・妙義・松島・橋立・厳島

の5大標式に別け、西亀正夫氏は更に8大標識を定めたが、此等は頗る趣味ある分類法で、確実な学術を基礎とせる点に於て、固より三景・八景などゝ同視すべきでない。」(p. 935)と述べて、8大標識が確実な学術を基礎にした点を評価している。

西亀正夫は日本の風景を地形上よりみたら、瀬戸式、富士山式、耶馬溪式の3大標識になり、瀬戸内海は、屋島、五剣山、讃岐富士、伊予の小富士、象頭山、寒霞溪、千光寺の奇岩、厳島を加えて、これを8大標識として取上げたものと思われる。(「科学世界」第2巻2号 p. 128~130)

明治41(1908)年には、「地学雑誌」第20年、第239号に「瀬戸内海岸の変動に就て」(p. 820~821)という短報がある。要旨は、瀬戸内海の沿岸は隆起せしめつつある徴候あり、その徴候として、

1. 汀線の痕跡——広島県下小情島北東岸において現今より約4尺の所に舊汀線の痕跡、賀茂郡風早の東部にも八尺位の所
2. 砂の堆積——音戸町波多見、仁方町戸田等の海岸において砂浜は年々其幅を増加しつつある。
3. 口碑伝説——三津町において現今の海岸より十数町内地において「潮くゝり」と称する岩あり、一面には大川の堆積作用であろうが雨期のみ水のある川で且古生層地を流ているので、三角州の発達が斯く急激なるは土地の隆起によらざれば説明し難し。

と述べている。いずれも生活地から実例をあげて論じている。

松本学校在職中の明治42(1909)年に、地学的に注目すべき論説を、「東洋学芸雑誌」第26巻、第330号・第337号に「花崗岩帯の変動に就て」(第一稿)(第二稿)を寄稿している。この研究は「地学雑誌」第21年、第224号に最新地理資料(本年2月及び3月発行諸雑誌中、地理学に関係せる記事論説の概要を摘録する、猪間収三郎が担当)に紹介されている。

「花崗岩帯の変動に就て」西亀正夫、東洋学芸雑誌、140~142頁

通常地殻の変動を説くは水成岩に限れども、其下底に在る花崗岩が変動を受けずとする理由なく、水成岩と同様褶曲断裂等の作用を受け

## II 地理学に関する研究

たくべく花崗岩の現存状態を以て悉く噴出の結果と見る能はざるなり、之中国辺の状態に照すに地形と地質構造との間に下のような関係あり。

山脈軸の走向は褶曲を意味す（多くは東西）。

河流方向は断裂を意味す（多くは南北）。

島軸の方向に褶曲（東西）と断裂（南北）との二種あり震源帯の方向は断裂を意味す。

海岸線に山脈軸に平行せる低浜と直角なる断崖とあり。

研究中の豫報にて所術只だ大綱を提挙したるに止まれども中国及瀬戸内海の地貌に関し着眼点甚だ高し敬服

この紹介からも読みとれるように、新しい視点を持った論文であると言える。「豈独り花崗岩帯のみ變動を受けざる理由あらんや、花崗岩帯と成層岩帯との間に其褶曲及断裂の模様の甚だしき相異あるべしとは信ずる能はざるものにして」を前提として吾人は此見地に立ちて<sup>あまね</sup>沿く南日本の花崗岩地を踏査し以て研究を進めつゝあり、今日未だ其の全部の結果を発表する時期に達せずと雖ども左に主要なる2～3の事実を列举し、其の詳細を近き将来に期せんとす」と述べ、踏査研究を続け研究の完成を期して、前述紹介のような大綱をだしている。

第二稿においては、「……此愚論が二三先輩の注意を惹きたるは予の光榮とする所にしても而も未だ強き反駁を受けざるは寧ろ予の意外とする所なり、今夏休業を利用して瀬戸内海附近の各地を跋涉し研究の歩武を進むるに従て益々前論の根拠を固くすると共に更に新しき事項に想到するに至れり今左に之を略述せん」と緒言があり、(1)水成岩との関係、(2)花崗岩の節理裂隙及岩脈、(3)片麻岩類の構造、と本論が述べられ、「……此の見地に立ちて中国及瀬戸内海の地体構造を研究しつつあるが故に、近き将来において之を発表し得べきを信じ……」と結んでいる。

これからも中国及び瀬戸内海地方の地体構造の研究に焦点をあわせておられたことがわかる。この研究は大正14（1925）年12月の「地学雑誌」、

第37年, 第441号, p. 629~641, 論説「リヒトホーフェン男の長崎三角地域と平行山稜の密集群に就きて」において理学士・徳田貞一, が述べられている平行山陵の考え方に略似している。

明治45 (1912) 年, 「地質学雑誌」, 第19巻 (p. 290) に「安芸西條盆地の地形に就て」という小論の投稿がある。これは明治44 (1911) 年, 東京地質学雑誌, 第23年, 第275号・雑録に西村万寿 (当時広島高等師範学校教授) が「安芸国西條盆地に就いて」を書いたものを批判したものである。西条盆地は北部は一面平滑な単調な平原, 南部は高台状の小松原の間々に, 狭く深い樹枝状の谷が刻むという地貌の相違がある。この原因を吾妻子滝となって露出して居る所の花崗岩脈が原因と考えるが, 西村万寿は次の3つをあげている。

1. 北部西條町付近は河流小にして水量少きも, 南部に於ては多数の支流合して水量多きこと。
2. 北部は比較的早く陸地となりたるも, 南部は之に反して比較的遅く陸地となりたること。
3. 此の2個の原因によりて, 北部は侵蝕少き為めに単調なる平原をなし, 南部は流路深く刻まれて多数の樹枝谷を生ぜり。

これには俄に賛成できない。その反論を要約すると, 「第1は南北水量は多少は勿論あるが, 南部とても支流細流の水量は北部と同じであって, 南部の懸崖谷は支流においてよく発達している。一步譲って本支流共水量が相違していると假定していても地貌の相違は漸移的ではなくてはなるまい。それが吾妻子滝を境に変わって居るのは何と説明するか。第2の, 早く陸地となった為めに侵蝕が少いというのは逆ではないか。自分は吾妻子滝に露出する花崗岩脈が南北特殊の地貌を現出せしめた原因だと信ずる。」というものである。後に西村教授は「全く参ったよ」と言はれたとのことである。この反論も松本学校に勤務されていた時代の観察によると思われる。

明治45 (1912) 年2月には, 「地学雑誌」, 第24年, 第278号の雑報に「瀬

## II 地理学に関する研究

戸内海岸の隆起に就て」を投稿されている。これは、「地学雑誌」、第20年、第239号の「瀬戸内海岸の変動に就て」後の調査により発見した事実を述べたものであり、「(1)旧汀線の痕跡として、広島県下忠海町の海岸、愛媛県北条町、越智郡亀岡村・波止浜近傍にみられる、(2)沿海低原として、愛媛県越智・温泉群の北海岸に殆んど水平的な平原があり、これは隆起せるもの、(3)海岸段丘、前記二郡にみられる、(4)介殻層としては、越智郡今治町西方に介殻を含む第4紀層がある。(5)歴史事実及口碑伝説によるものとしては越智郡波止浜の西方部に至る地方が、昔時海峡たりしことは歴史上に其証跡あり、又海岸隆起、潮水引退に関する口碑伝説は北予の海岸到るところにある。」前勤務校伊予教員養成所のあった愛媛県北部を調査したことを伺わせる。

## 2. 聚落の研究と交通の研究

### (1) 聚落の研究

大正7(1918)年から大正8(1919)年にかけて、雑誌「歴史と地理」に「教授資料」として「聚落の研究」を7回にわたって投稿している。

西亀正夫が終稿(7)で述べているように「最初二三回で完結させる積りでほんの聚落研究の一端を略記する考で起したのであるが、栗野主幹(編輯兼発行人栗野秀穂)の激励もあり、読者諸君からの色々奨励のお言葉を受けるのでツイそれと筆を走らせ……系統を立てることも出来ず、思附次第に筆を進めたので極めて雑駁になったことをお詫びせねばならぬ」にあるように一端を書く予定が聚落の研究の系統だてにまで進んだものである。

この雑誌は「発行の趣意」からみられるように、この雑誌名は「教授資料 歴史と地理」であり、目的が「教育の実際に当りて必要な資料の提供を企て…」と強調されており、内容の中心におかれたのは「教授資料」であることがわかる。このことから、西亀正夫にとっては、地理教育の普

及改善を常に念頭おいたことから、この上ない発表誌であったといえよう。また「歴史と地理」誌としては、この上ない執筆者を得たといえよう。

「歴史と地理」への最初の投稿は、第1巻第6号（大正7《1917》年4月）に書かれた「郷土及伝説」に「播磨に於ける億計・弘計二王子の御遺跡」であり、次が第2巻第2号（大正7《1917》年8月）に「伝説」に「筑後の巨樹」がある。

「歴史と地理」の創刊されたのが大正6（1916）年11月であり、「聚落の研究」の第1稿は「歴史と地理」第2巻5号（大正7（1917）年11月）であるから、創刊まもなく投稿されたものである。創刊号の教授資料には、地理の寄稿家として田中秀作（旧制彦根高商教授）、下田禮佐（旧制横浜高商教授）、遠藤金英（旧学習院教授）などの名がみられる。教授資料も学的水準は高いと評価されよう。

第一稿の書き出しに「……聚落に就ては研究すべきことが甚だ多い。……西洋では已に住地学など称して、種々な研究が発行せられ、そこらに幾らかの原則というものを見出す迄に発達しかけて居るが、我国ではまだ研究の初歩にあるようで、何等纏ったものの発表せられたのを聞かない。無論西洋と日本とは地形氣候等の外界条件はもとより、人民の生活状態や思想感情が根本から異なって居るからあちらの研究をそのまま翻譯してこちらへ当てはめて行く譯にはいかぬ。日本の住地学は日本で建設せなければならぬ。」と聚落研究についての考えを述べている。

この住地学は「机の上では研究が出来ない……この研究の困難な点はそこにある」の研究の実地調査の必要性をあげてある。

この発表をしようとしたわけを、住地学に就いて十分な知識をもっていないし、まだ広く旅行していないが、「之によって聊か刺激を与へて一般の研究を促進しようと思うのである。」また、「……諸君の研究に一つのヒントを与へようとするに過ぎぬ。」と研究の促進とか研究のヒントになることを目的としている。しかし、同時に聚落地理学の系統化を意図したことは疑う余地がない。

## II 地理学に関する研究

この研究の配列は次のようである。

○<sup>セルツメント</sup>聚落の研究「歴史と地理」第2巻第5号（大正7《1917》年11月）。

聚落の位置に就いて

第1—谷に関係した聚落…谷頭，<sup>バリーフラット</sup>谷平地，谷口

第2—河に関係した聚落…河畔，合流点と分流点，河口，中州

第3—山に関係した聚落…山頂，山腹，山麓平地

第4—平地に散在する聚落…高原，台地

○聚落の研究（中）「歴史と地理」，第2巻第6号（大正7《1917》年12月）。

平地に存在する聚落…低原，盆地，扇状地，段丘上

海岸に発達する聚落…湾頭，湾岸，湾口，平岸，瀬戸，岬頭

潮沼に関係した聚落…湖頭，湖口，湖岸

交通に関係した聚落…峠，峠下，橋畔，渡津，交通終点，交通結節点

地表利用の状態から見た聚落の位置…中心点，分岐点，縁辺

文化に関係した集落…門前の集落，駅前の聚落，城下の集落，鉱業地の集落，風景地や保養地の聚落

○聚落の研究（三）「歴史と地理」，第3巻第1号（大正8《1918》年1月）。

聚落の形式について

都会と村落，都会とは何か

都会の形式…京都式・東京式・大連式，浮島式・ボカシ式，平面式・波状式・斜面式・段階式

村落の形式…散点村落，疎聚村落，密聚村落，（単線型・片側町，弧線状，十字型，T字型，複線型，階段型）

○聚落の研究（四）「歴史と地理」，第3巻第3号（大正8《1918》年3月）。

聚落の内容に就て

職業に就て…都会（分区式・雑居式），村落（農村・漁村・工村・商村…）

各住居の位置形状大小

家の向き



人口

○聚楽の研究（五）「歴史と地理」，第3巻第5号（大正8《1918》年5月）。

人口の性別・年齢別

聚落の生命に就いて

永久的聚落と一時的聚落…発展的なもの，衰退的なもの

瞬間的の聚落…週期的聚落

聚落発生条件

○聚落の研究（六）「歴史と地理」，第4巻第2号（大正8《1918》年8月）。

聚落の消滅…（天災・人災）

生活原料の減減，交通系統の変化

聚落の進化

聚落の分布について

円状排列律

連続律と間隔律

都会と村落の比例

○聚落の研究（七）「歴史と地理」，第4巻第4号（大正8《1918》年10月）。

聚落の名称に就て

最終稿には「茲に筆を擱くにあたって一応系統を立てゝ置かうと思ふ。

聚落の研究必ずしも是で書き盡きたわけでは無いが，また一つの学問として建設されて居ないのであるから，これ以上の事は今の私に出来兼ねる。」として，「聚落地理学の系統だて」を意図したことを述べている。

この教授資料は西亀正夫が第一稿にも書いているように，聚落についての研究について纏まったものがないなかで，聚落地理学の系統だてを計ったことは大きく評価してよい。聚落地理学を系統だてて発表した最初の人としてよいのではないかな。

山田誠は論文「小田内通敏と都市地理学」のなかで「1920年代に入ると，地理学関係の雑誌が相次いで刊行されたこともあって，都市地理学関係の文献は急増する。それらのうち早いものとして『歴史と地理』（1918年創

## II 地理学に関する研究

刊)に1919年から1921年において掲載された橋本辰彦の一連の論文をあげることができる。しかし、これらもヨーロッパ(多分ドイツ)の都市地理学関係の文献をまとめたもののようで、……」と橋本辰彦の論文が取りあげられているが、西亀正夫の「聚落の研究」も、明治～昭和初期の都市地理研究概観でとりあげられてよいものと思われる。

この聚落の研究を書くにあたっての草案が残っている。草案は第十一と番号が付いたノートを半裁した横10cm縦14cmの大きさで、「大正七年十月、西亀」という文字がみられる。草案では聚落の研究を書くにあたって稿を練った様子がうかがえる。聚落地理学については東京高師の大関久五郎教授の指導をうけたことがあった。

西亀正夫の著書・論文についてみると、集落に関する研究が昭和12(1937)年頃まで続いている。

聚落関係の論述は、集落についての九州および北日本の概観のような軽いものから、美保関町・厳島のような門前町、徳山・三原などの工業都市の実地調査による研究、居住地をフィールドとした広島市の集落としての研究に集約できよう。広島市の集落研究では第二次世界大戦前の広島市の姿を窺うことができる。

昭和3(1928)年8月、日本大学において行なわれた地理学講習会の講演草稿が、帝国書院の用箋11枚に書かれて残っている。その要旨は次のようなものである。

序論として聚落学(聚落地理学)とは何かを論じ、体系化した人々として、小川・大関・田中館・内田・小田内・西田などをあげてある。

I 形態学 A 外貌 B 水平形態 C 垂直形態

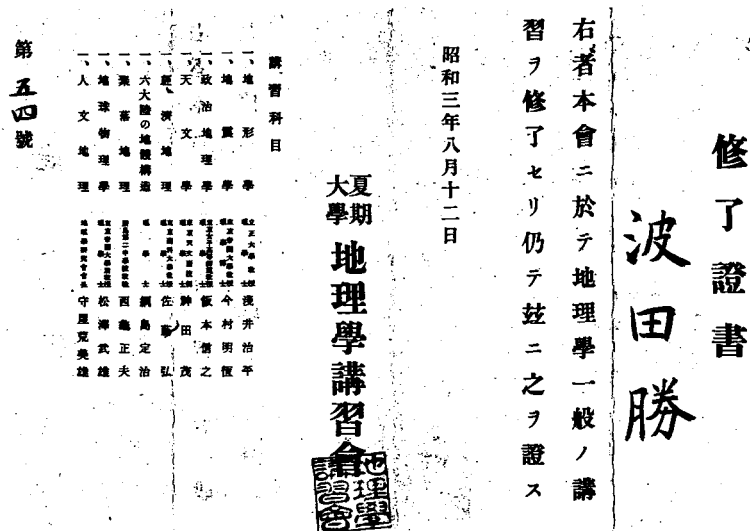
II 構造学 A 街路形態 B 街路様式 C 用途地域

III 生態学 A 生滅 B 成長 C 生命

IV 機能学 1 生産, 2 集配, 3 消費, 4 自給

V 分布学 A 位置 B 疎密

波田勝氏(当時小学校訓導)の修了書(図II-3)によると、講師とし



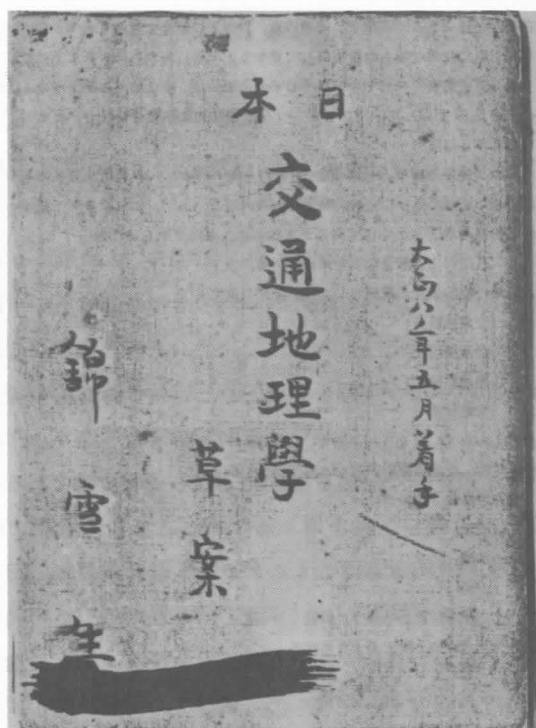
図Ⅱ-3 夏期大学地理学講習会修了証書

て、浅井治平（地形学）、飯本信之（政治地理学）、佐藤弘（経済地理学）、西亀正夫（聚落地理）、守屋荒美雄（人文地理）などの顔触れがみられ、もって西亀正夫の聚落地理についての自信のほどが窺える。

## (2) 交通の地的研究

雑誌「歴史と地理」に教授資料として、「交通の地的研究」というシリーズがある。

- (1) 第5巻第5号（大正9年5月）
- (2) 第6巻第1号（大正9年7月）
- (3) 第6巻第2号（大正9年8月）
- (4) 第7巻第2号（大正10年2月）
- (5) 第7巻第6号（大正10年6月）
- (6) 第8巻第5号（大正10年11月）
- (7) 第9巻第4号（大正11年4月）



図Ⅱ-4 草案帳の表紙

- (8) 第10巻第1号（大正11年6月）
- (9) 第10巻第5号（大正11年11月）
- (10) 第11巻第4号（大正12年4月）
- (11) 第13巻第1号（大正13年1月）

と11回に分ける投稿されている。この原稿を書くにあたっての草案が残っている。図Ⅱ-4のように、大正8（1919）年5月着手、日本交通地理学、錦雪生、とある。大正8年5月より準備し、交通地理学についてまとめようとしたものであることがわかる。錦雪はキンセツと読むのであろうが、ニシキに懸けてあるのだと思われる。

交通の地的研究(1)の緒言において、「交通と云ふことは人間の経済的活動中の最も重要なものの一つである。随って交通地理学は経済地理学中の位置主要部門たること云ふまでもない。但しこの交通地理学なるものは、まだ充分に発達して居ない。たゞほんの建設時代であると云つてもよからう。」と交通地理学も経済地理学の一主要部門であるとの認識にたっている。そして交通地理学は建設時代であるというのである。

普通の地理書では、「交通を運搬と通信との二つに大別し、運搬を陸路と水路に、通信を郵便・電信電話に別って、その各部に就いて記すと云ふ様な不自然な無理な分類法によって居り、又其鉄道とか航路とか云ふものに就ても、其大体の分布の状態を研究すると云った位のもので、地形気候地質産業との関係に就ては、何等原理原則を示すもの無く、その達しようとする努力さえも充分に認める事が出来兼ね様な状態である。かう云ふ事で交通地理学など云ふ名称を用ふことはあまりに無謀ではあるまいか。と云つても私如き浅学菲才のものが、而も参考書の無い田舎に埋もって居て何の研究も出来る筈はない。」「随って今私は決して交通地理学の体系を整へて新しい理論を見付け出そうなど云ふ様な、そんな途方もない野心なんか起さうとは毛頭考へて居らぬ。只従来の研究に慚らずして、聊か私見を以て交通なるものを解剖して見やうとするに外ならぬ。若し之に依って新しい研究家を多少でも刺激する事が出来れば、実に望外の幸とするものである。」と述べているが、交通地理学の体系化を意図したものであることは疑いない。

先の「聚落の研究」と同様に、「私の今度の研究も、只私の頭限りのもので甚だ価値の低いことをお断りしなければならぬが、これによって諸家の名論卓説各方面から出て来るかも知れぬ、私はそれを楽しみとする。」と、これに対する意見などを求めている。

日本における交通地理学研究の系譜については、有末武夫著『交通の地域的分析』(大明堂、昭和60年)の論及がある。これには「1925年以前のわが国においては、鉄道貨物の品目や輸送量、旅客輸送量については、道

## II 地理学に関する研究

路の輸送難易状況についての報告はあったが、それらを地理学的に体系化しようとする動きはほとんど見られなかった。しかしながら、1925年から1930年ころにかけて欧米とりわけドイツの交通地理学、とくに J. G. Kohl および K. Hassert によるそれが紹介され、それらに応じた邦語の交通地理学の題名が付された書物も著作された」として、「井上長太郎（1930）『交通地理学』明治図書,」「淡川康一（1933）『交通地理学原理』弘文堂書房」があげてある。「それらの紙面の大半は、鉄道を中心とする各種交通機関の世界における分布状況を記述し、それらと勾配や積雪などの自然環境との関係を考察するものであった。その記述はきわめて概括的であり、自然環境との関係の考察は素朴な他人相関論に基づくもので、ドイツ語の邦訳とさえ評されたが、わが国の交通地理学はこの時期に始まったといえるのである。」と論及されている。

西亀正夫の「交通の地的研究」は、前述したように日本の交通地理学の体系化を考えたものであるという点では、1920年代前半であり、日本の交通地理学体系化を意図した先駆者と呼んでよいであろう。内容は概括的で自然環境との関係を中心に述べられている点は、有末武夫の指摘通りである。

### 3. 人文地理学の体系化

西亀正夫の地理学研究で最も注目すべきは『人文地理学講義（上・下）』を執筆して人文地理学の体系化を意図したことである（図Ⅱ-5）。

#### (1) 「人文地理学講義」執筆のねらい

人文地理学講義の執筆は、自序に述べられているように人文地理学の体系化を考えたものである。

『人文地理学講義』上巻は、昭和4（1929）年1月15日、古今書院から発行し、下巻は、昭和5（1930）年9月15日、同じく古今書院より発行し



図Ⅱ-5 『人文地理学講義（上巻）・（下巻）』

たものである。

上巻の自序には、本書執筆のねらいが次のように書かれている。

「私が人文地理学の体系を整へて見たいと考へついたのは、もう七八年も前のことであつた（傍点……は筆者が追加、以下同じ）。併し当時の私には、まだ真の科学的人文地理学というものゝ定義も範疇もはっきりとわかつてゐなかつた。色々と内外各方面の文献をあさり、又随分広く旅行をして観察もし思索もしたが、結局何等得る処も無い気がした。けれどもそうする間に私の頭の中には、次第に或ものが培はれて行つたのであろう。漸く考が纏りかけたと思つたのが一昨年であつたが、意あつて筆及ばず、幾度が稿を改め、苦心3年の今日漸く、その前半を完成することが出来たのである。その間、我が国にも新しい翻譯や著述が続々と発表せられて、学界を益する処頗る大なるものがあつたが、私の企てた様な学の体系の整理といふことに筆を染めた学者はまた無い様である。これ私がおこがましくもこの書を公にしようと決心するに至つた所以である。浅学不才

## II 地理学に関する研究

名もなき田舎の老書生に、新しき人文地理学の建設が出来ようなどとは夢にも思わぬ。けれども、材料を集めるのに目標がなく、集ったものを整理するにも基準が無い今日の学界に対し、礎石を置く前の礎石のつもりでこの書を送り出すことが、決して無意味で無いことを信ずる。勿論まだ材料の不足、分類の不合理、考察の不徹底等杜撰の点が甚だ多いに違ひない。幸にして諸賢の示教を得て他日の完璧を期したいと思ふ。」と昭和御大禮大嘗祭の夜（すなわち昭和3（1928）年11月10日）に書かれている。

下巻の自序においては、次のように述べている。

「本書上巻を世に出してから已に一年有半、その間、多数先輩の激励と稱賛とに力づけられつつ、ひたすら筆を運んで、今漸く下巻を完成することが出来た。顧みると尚未だ意に充たぬ点が多いが、見聞狭く学足らずして茲に及んだのみであって、私としては許された限りの努力を拂った積りである。

近時地域の研究が次第に盛になりつつあるのは喜ばしいことである。併しその成果をそのまま集めて並べて見たところが、それは地誌学であって一般地理学ではない。これを一個の科学として建設せんがためには、先づこれを分類整理せねばならぬのであるが、如何に分類し如何に系統づけるべきかが問題となって来る。本書の目的は、そこに一つの基準を示さんとする試みに過ぎない。若し先輩の教へを垂れらるゝあつて、本書の完璧を期し得るならば、それは独り私の幸のみに止まらないであらう。昭和5（1930）年8月三篠川のデルタに立って著者誌」とある。

これらの自序から、第1に人文地理学の体系化は大正10（1920）年代、福岡県立浮羽高等女学校時代から考えていたが、考えが纏ったのが昭和の初めであり、3カ年かけて苦心して前半をまとめ、昭和4（1929）年に出版したこと。第2に今までこのような学の体系化した学者がいないので先駆性があること、第3に地誌学と一般地理学の違いを述べ、あくまでも人文地理学の体系化の一つの基準を示さんとしたこと、第4に自分の著作を十分に活用してのまとめであること、がわかる。西亀正夫の地理学パイプ



ルと考えてよいと思う。

## (2) 『人文地理学講義』の内容・構成

上巻は、自序 2 ページ、目次16ページ、挿絵目次 1 ページ、本文471ページ、合計菊判500ページ、定価 3 円40銭。

下巻は、自序 2 ページ、目次18ページ、挿絵目次 2 ページ、本文524ページ、参考文献 4 ページ、合計菊判550ページ、定価 3 円60銭。

上・下巻で菊判1,050ページの大作である。

この人文地理学講義が古今書院から出版するにいたった経緯は、西亀正夫から出版依頼をしたようで、初版本は700～1,000部で、再版はされなかったようである。

人文地理学講義の内容構成をみるため目次をかかげる。

### 人文地理学講義 上巻 目次

第一篇 序論	第五章 健康
第一章 地理学の本質	第六章 精力
第二章 人文地理学の分野	第七章 性格
第三章 自然と人類との関係の概念	第三篇 人口地理学
第四章 地理的景観の個性と通性	第一章 序説
第五章 地理的区域	第二章 人口の構成
第六章 人文現象の特質	第三章 人口の密度
第七章 人文的事実の分類	第四章 人口の分布
第八章 統計図表と人文地図	第五章 人口の増減
第九章 人文地理学の研究法	第六章 人口の移動
第二篇 人類地理学	第四篇 生活地理学
第一章 序説	第一章 序説
第二章 人類の出現	第二章 占居
第三章 人類の分化	第三章 飲食物
第四章 体質	第四章 衣服及び道具

## II 地理学に関する研究

第五章 熱と光	第二章 交通線
第五篇 文通地理学	第三章 交通具
第一章 序説	第四章 交通の諸相

### 人文地理学講義 下巻 目次

第六篇 聚落地理学	第三章 商業の様式
第一章 序説	第四章 商業中心地
第二章 聚落の位置	第五章 国際貿易
第三章 聚落の形態	第九篇 政治地理学
第四章 聚落の構造	第一章 序説
第五章 聚落の組織	第二章 政治的位置
第六章 聚落の生態	第三章 政治的境界
第七章 聚落の機能	第四章 国家の組織
第八章 聚落の分布	第五章 国家の生態
第四篇 生産地理学	第六章 政治
第一章 序説	第七章 争闘
第二章 生産総論	第十篇 文化地理学
第三章 蒐集生産	第一章 序説
第四章 栽培生産	第二章 文化概観
第五章 牧養生産	第三章 教化
第六章 加工生産	第四章 言語及び文字
第八篇 商業地理学	第五章 社会
第一章 序説	主要参考文献
第二章 商業の素因	

上巻は序論・人類地理学・人口地理学・生活地理学・交通地理学の5篇, 下巻も聚落地理学・生産地理学・商業地理学・政治地理学・文化地理学の5篇からなっている。

第一篇序論においては、「地理学の意義なるものは今日まで明瞭にされ

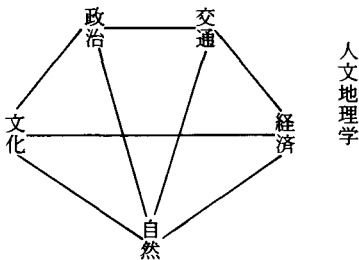
ていない。その対象や範囲が他の諸科学の様に明確になっていない。或は『地球を研究する学問なり』と云ひ、或は『地球を人類の住所として其の自然及び人文の状態を研究する学問』だとも或は『自然現象と人間生活との関係』を研究するものだと云ひ、又或学者は『人類の生態を論ずる科学』だと云って居る (p. 1) と昭和初年の地理学の動態を述べている。この状態をふまえて「元来学問の範囲など云ふものは、人間が知識を整理する上の便宜から定めたものであるから、……時代によって異なるは云うまでもない。……(p. 1)」と地理学の対象・範囲を流動性あるものととらえている。

地理学の発達をふまえて、「自然地理学と人文地理学の二元的なものになって来ている。」地理学を二元的なものにすることには同意できないとして、「最近著しく抬頭した佛国の地理学者ヴィダル・ド・ラ・ブラーシュやブリュン等によって地理学の本質が極めて明瞭になった様に思はれる。」としてフランス学派の立場に立ち、「地理学の対象は単なる土地そのものではなくて、土地の上に起る現象でなくてはならない。」として、「地球表面において生起するあらゆる現象が悉く地理学の対象なのである。」として、対象を地球表面のあらゆる現象としている。

「地理学の対象は地域における諸現象の総合、即ち<sup>●●●</sup>地的<sup>●●●</sup>渾一<sup>●●●</sup>そのものである。その中には非常に多種類の現象を含む。……随ってこれを研究するにあたっては一応これを分析しなければならない。分析した上で各要素間の相互関係を調べなくてはならない。」とも述べてある。

人文地理学の分野については、「地理学の対象たる<sup>●●●</sup>地的<sup>●●●</sup>渾一<sup>●●●</sup>の中には多数の自然現象を含むと同時に又多様の人文現象を含んで居る。土地に関すること、水に関すること、空気に関すること等があると同時に、動植物の培養に関すること、物資の移動に関すること、精神的結合に関すること等の現象がある。これ等が相互に關聯し結合し、連帶し、共存し、適応し、衝突しつつ存在する。その中の人文現象を主題とするものが人文地理学であるのだから、人文地理学に於て研究すべきことは、第一に人文現象相互

## II 地理学に関する研究



図II-6 人文地理学の現象間の関係

人文地理学

の関係、第二に人文現象と自然現象との関係でなくてはならない。」として図II-6が示されている。

「故に人文地理学とは『人類と自然との関係の学問』だと考へ、人類相互の関係は自然との関係の予備的知識だと云って居る人もある。それは少しく偏狭に失するけれども当らずと雖も遠からざる程

度の云ひ方である。そこで吾人は更に章を更めて自然と人類との関係に就て一言しなければならぬ。」として、人文地理学とは「人類と自然との関係の学問」だとの立場で本書は著述されている。

人文地理の分野の分類を考えるには、「何と云っても人文地理学は地的渾一の景觀を対象とし、人類を主題としてこれを解剖しようとするものであるから、先ず、人類の存在及びその活動の状態というものを適当に分類し、それを中心として研究して行かねばならぬと思ふ。」として、人文的事実の分類を静的方面と動的方面とに分けて研究する。静的方面（人類の存在）は量と質の両面から研究する必要がある、動的研究（人類の生活）は物質的活動と精神的活動に分けられ、さらに物質的活動は1次的活動と2次的活動へ、精神的活動は对人的活動と对神的活動に分けることによって人文的事実を分類した。この基準によって表II-2のような型で人文地理学の分野を考えた。

このような発想は、大正4（1915）年から5（1916）年にかけて使用された記録帳「NOTE BOOK」の中に人文地理学11.6案がある。「人間活動ノ地方色ヨリソノ活動ト地トノ関係ヲ帰納ス」と人文地理学を定義し、人類の状態を静的存在と動的活動にわけ、存在を質—人種、量—人口、位置—住地、活動を経済的(物)、政治的(人)、文化的(?), 生存的(自)などとの記載がある。

表Ⅱ-2 人文的事実と人文地理学の分野

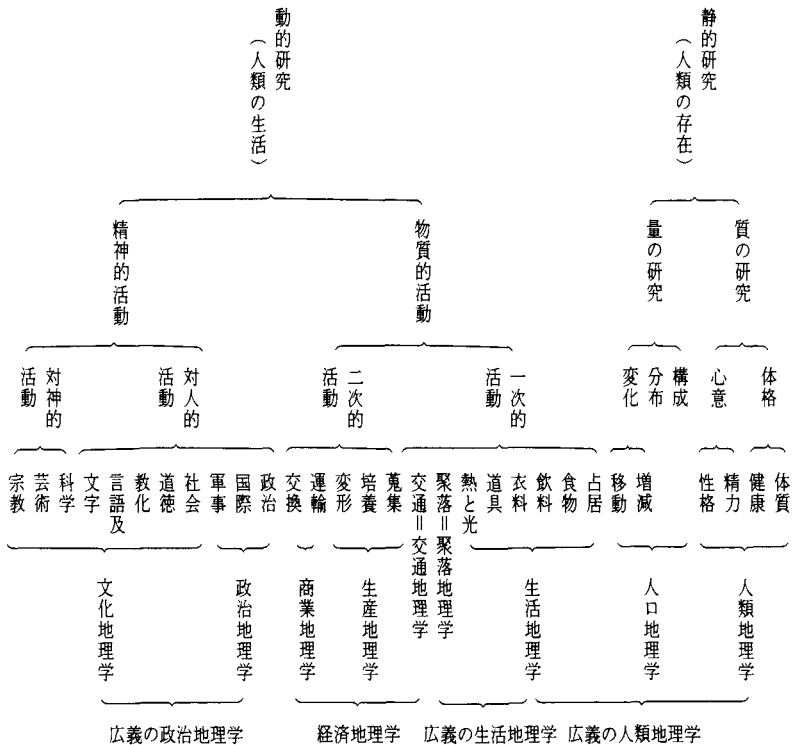


表 1 人文的事実と人文地理学の分野

『人文地理学講義』における人文地理学の分類を、現在の人文地理学の分野と比較してみると以下のようなことがわかる。

まず、生活地理学なる分類は独特の分類と云ってよからう。居住の外に飲食・衣服・光熱などを論じたので、この語でまとめたと思われる。第二編の人類地理学は現在の人類学や疾病地理学の内容を含んでいるといつてよい。生産地理学は経済地理学の一分科と位置づけ、商業地理学・交通地理学と対立させてある。生産方法の分類から蒐集業・培養業・加工業に3分類し、現在の農業・水産・林業・工業地理の内容を述べてある。

本書が出版された当時の人文地理関係の研究書と比較して特筆すべき

## II 地理学に関する研究

は、文化地理学という分野が取上げられていることである。

西亀正夫の文化地理学は、現在考えられている文化地理学より広い教化・芸術・道徳などの内容を含んでいる。これは昭和9（1934）年に『文化地理学の諸問題』（古今書院）に発展する。

### (3) 『人文地理学講義』の評価

この『人文地理学講義（上・下）』についての出版時における評価を2～3の雑誌や専門書からとりあげてみたい。

第1に、地球学団の機関誌「地球」においては「地球学団」の代表者である藤田元春（第三高等学校教授）が、『人文地理講義（上巻）』について「地球」第11巻第3号（昭和4（1929）年3月号）で紹介している。

この書評をあげると下記のようなのであるが、西亀正夫の特徴がよく表現され、また本書のねらいであった体系の整理をねらったことが果されていることを認めて、高い評価をくだしている。ハンチントンの『人文地理学講話』に比べても「本書の内容が広く蒐集され説明されてある」とまで述べ、牧口常三郎の『人生地理』から最近の「地理学評論」に到るまで、ほぼ文献を網羅されている深さを強調されている。

「著者は広島第2中学校の校長である。予は著者と面識がないが、古く『歴史と地理』や『地球』誌上での誌友である。篤学の人でいろいろ人文地理に関した論文を書かれるので記憶を逸しない人である。昨年末に近刊としての広告が出た時から刮目して之を見んことを欲したところ、この1月15日いかにも芽出度い日に、本書が生れた。同君の独力苦学の半生に対して篤い敬意を表し、併せて本書の出現を祝福せずには居ない。本書は菊判471頁、序論と人類地理学、人口地理学、生活地理学、交通地理学の四篇を収めてある。挿絵も41図、印刷も鮮明である。生活地理という語は聞く丈けで生硬な感がある。けれども居住の外に飲食・衣服・光熱等を論じたから、致し方がなかったであろう。ハンチントンの人文地理学講話などに比べて本書の内容がいかにも広く蒐集され説明されてあることを知りう

ると同時に、あまりに広きにすぎるといふ恨がないではない。しかし、今日まで我等が手にした多くの人文地理学書、もしくは論説から、要を集め粹を抜いて、ここまで簡明に纏めた著者の努力は多としなければならぬ。古い人生地理学から、最近の地理学評論に至るまで、凡そこの方面の文献は、殆んど網羅されてゐる。中には「アアかうしたこともいつか見たな」と、追懐するやうな零細なことが記されて居るので誠にうれしく懐かしい気がする。単に零細なことばかりではない、必要な文字も集まってゐることは勿論である。強て難をいふではないが、人類地理学の中にある「大和民族」の一章を例にとれば明かなやうに、結局多くの学説が簡単に紹介されてゐるに過ぎない程度であるのを恨みとする。しかし著者には別に人文地理学に対する体系があり抱負がある。読者はさうした同君の態度から、多くの学ぶべきものを得るであらうことを信ずる。妄言多罪（藤田）。」

同じく雑誌「地球」第14巻第5巻（昭和6《1931》年5月号）には、下巻について上巻と同じく藤田元春の新著紹介がある。

「古今書院はやたらに地理書を出すので、幾分評判がよくないやうであるが、本書はさうした著述の中で出色のものである。著書は山陽広島で学究の君子である。さきに上巻を出して已に一年有半、忽ちにして菊判520頁の本書を完成した精力敬意を表せざるを得ない。本書は、聚落地理学・生産地理学・商業地理学・文化地理学の五篇を収めて、著者がいかに学問を分類し聚蒐するに鋭敏であるかを実證した。しかしこうした五篇そのいづれを見ても一つ一つで500頁以上の大著述になりうる可能性の多いものである。たとへ著者の手許にその種本があったとしても、この5つをこの一冊に纏め上げて、それぞれの日本に関係する部分に迄、少なからぬ説明と注意を拂ったことは、（それは種本にはない）何といつても著者の努力によるものとせなくてはならぬ。著者は、この5篇のうちで特に聚落の一章を面白く読んだ。勿論、その細部に於て筆者の説述を引用された光栄に欲したことを喜んでいうのではない。又実に予の言ったことはやや違つて引用されたことに不平があるといふのではないが、とにかく本書は聚落を

## II 地理学に関する研究

論じて体系を整調にし、叙述を慎んでとにかく一通りは書くという風であって、聚落の位置、形態、組織、構造、生態、機能、分布に及び、原始聚落から村となり、町となり、大都市に発展する跡が明瞭に総合的に編述されてゐる、近頃この方面の著述として世に出たものの中で、本書の聚落論のごときは慥かに出色のものであろう。筆者も聚落の発展に関して説述したい多くの希望がある。さうした自分の智識からみて、本書の論ずる所がすべて正しいとは思はないけれども初学の人にかうした良著をすゝめうる機会を得たことを賀せざるを得ない、予は本書をみてつくづく孜々学にいそむ人の学のいかに深いかを学んだ、敢て提燈を持って江湖に紹介したい（藤田）。」

下巻の書評においては、「古今書院はやたらに地理書を出すので幾分評判がよくないが、本書は出色のものである」との評価をされ、聚落地理学・生産地理学・商業地理学・文化地理学の5つ1冊に纏め上げ、それぞれの日本に関係する部分にまで、少からぬ説明と注意を拂ったこと（それに種本はない）、何といつても著者の努力よるものと評価せねばならない、このうち藤田元春の専門である聚落地理の章は出色のものと評価されている。

聚集地理学については、前述のように大正7（1918）年から大正8（1919）年にかけて、学界誌「歴史と地理」に集落の研究の連載されたものを発展させたものと思われる。

雑誌「地理教育」第8巻6号（昭和4（1929）4月中興館）104ページに、『人文地理学講義』上巻、西亀正夫著の新著紹介がある。

「本書は上下二巻で完成されるものなるが、本巻に於ては、その前半の5篇より成立して居る。第一篇序論の部においては人文地理学の特質と研究法を述べて居る。第2篇人類地理学では……、一般人類学の方面を講じて居る。第3篇人口地理学では……。第4篇生活地理学では人類占居の当初より衣食住の各方面の様式について、第5篇は交通地理学に及ぶ。人口地理・生活地理の2篇は、他書にはないのが本書では独立せしめて一篇と



して居る。

人文地理学の書は今まで多く出版されて居るが、斯うした<sup>●●●●</sup>地方研究家によって発表されたのは恐らく之が最初である。固すぎる所なく材料を蒐集した事は多とすべきである。慾を云へば今一步進んで環境との関係をより多く取入れて、例を我が国より引用されればほんとうに『日本の人文地理書』という感を深くする事であらう。」

この中では、地方の研究家によって発表されたのは最初のものであるなどの評価がみられる。

「地理教育」(昭和6《1931》年2月1日号)には、人文地理講義下巻について、次のように紹介がある。

「上巻が出てより一年半、終に立派に下巻が完成された。然もより以上見事に人文地理学を纏められた事は嬉しい事である。本書は5篇より成る。第6篇は聚落地理学8章よりなり、豊富なる観察より微細に論じて新味をみせて居る。第7編は生産地理学、第8編商業地理学、生産地理学は全く地人相関的より述べて居り、従来の生産の産額分布を主とするものは全く趣を異にし、且つ商業地理学を独立して一篇とせるは経済地理学の統括を意味するものと窺はせる。第9篇は政治地理学、国家組織・生態・統括・争闘の種々相にまで及ぶ、第10篇は文化地理学、人文地理学の最後のしめくくり。文化景観・教化・言語・社会相でつづいている。528頁何れを見ても澁澁たる所があり、過去の形式にとらわれず如何にして人文地理学の本質を表はさんか努力している点がみえる。

上下巻を通じて1,000頁の上梓に敬意を表したい。尚ほ念の爲にテクニクの牽引でもあれば餘計に便利と思ふ。」

下巻が出版されてからのほうが高い評価を得ているようで、過去の形式にとらわれず如何にして人文地理学の本質を表わすか努力されている点が窺えるとされている。

昭和12(1937)年に地理区をめぐる争闘を展開する香川幹一は著書、『文検地理科短期準備受験法』(東京大明堂、昭和6《1931》年5月3日

## II 地理学に関する研究

初版、昭和13《1938》年11月1日第4版、p. 44）によると、「西亀正夫氏の人文地理学講義上下二巻はある種類に偏せず、氏独自の研究物も挿入され、汎く参考書を読破されたところで、真面目にかかれたもので、燦然たる薔薇の花の美はしよりも、谷間に咲く白百合の香がある。」と文検受験用参考書の中の一つとして紹介している。谷間に咲く白百合という表現で特色を示してある。

長谷川与三治著<sup>(1)</sup>『地理教育新論』（同文書院、昭和9《1934》年1月）では、第四章地理学の分析の中で、「人類地理学は、人文地理学に属する一学科として独立すべきものであるが、未だ十分な体系を構成しない。長友西亀氏は、その名著人文地理学講義中に、人類地理学を説く、人種の出現・人種の分化・体質・健康・精力・性格に就き、地理学的立場から論述されている。」(p. 44~45)「交通地理学」に於いて研究さるべき対象としてはかなり他方面であるが、西亀氏は前記著書において交通線としての道路・鉄道・水路・航空路等、交通具及交通の諸相と題して論述されている」(p. 47)「なほ更に記すべきは、戦争地理学の地位である。西亀氏は政治地理学の争闘の項に叙説されてゐる」(p. 48)「文化地理学の内容に就いてはまだ確定していないと見るのは妥当と思う。……然るに西亀氏は人文地理学講義に、文化地理学の項を設けられ、文化地理学の対象を、对人的活動中の社会・道徳・教化・言語及び文字、对精神的活動の科学・宗教・芸術等に採られている。是等の諸見解は必竟、文化てふ意義の解釈による差異で、その良否は俄に断定し難いと思惟する。」(p. 49) 以上のように引用され論じられている。

『人文地理学講義、上下』の著述にあたっての参考文献は下巻の末尾に参考文献があげてあり、これより窺うことができる。

子息西亀達夫さんのお話によっても、外国雑誌を数種とられていたとのことであった。収集された書籍は防空壕にいれられ、原爆後に水浸しになり、現在みることは出来ない。

#### (4) ま と め

- (1) 『人文地理学講義（上・下）』は、地方の研究者である篤学者西亀正夫によって、人文地理学体系化を意図し達成されたものである。西亀正夫の人文地理学の集大成であり、日本において人文地理学を体系化した最初の著作と云ってよいであろう。
- (2) この著作にあたっては、明治中頃からの地理的関係の図書・雑誌・文献・資料のほとんどが蒐集して論じられている。反面、中身が多すぎて論議が浅薄になった部分もみられる。
- (3) 人文地理学の分野を人類の状態（在住・活動）から分類して、人類地理学、人口地理学、生活地理学、交通地理学、聚落地理学、生産地理学、商業地理学、政治地理学、文化地理学の9分野としてある。現在の分科の基準である取扱う事象の系統による分類とは異なるが、当時としては進んだ着想であったと評価できよう。特に文化地理学なる一分野を大きく採り上げたことは注目し価値がある。
- (4) この著書は、地理教育者や地方の研究者などからは注目されたが、多くの大学アカデミズムに属した学者からは無視された。このことは当時の地理学界における傾向であって、地方の研究家として一匹狼の立場をたもつた著者の個性にもよるのではないと思われる。

#### 〈注〉

- (1) 広島高等師範学校教授。大正6（1917）年9月～昭和7（1932）年3月まで広島高等師範学校附属中学校の教諭であり、西亀正夫とも親交があった。

### 4. 文化地理学の体系化

#### (1) 『文化地理学の諸問題』の出版

『文化地理学の諸問題』は昭和9（1934）年4月30日、古今書院より発行された「四六判」本文208頁の単行本である（図Ⅱ-7）。

## II 地理学に関する研究

「文化地理学」については、前述した昭和5（1930）年9月、古今書院より出版された『人文地理学講義（下）』の終編に「文化地理学」という一篇をもうけて纏めている。さらに「広島地学同好会」の例会において、『文化地理の諸問題』という発表を7回行なっている。この発表が『文化地理学の諸問題』の単行本の動機になった。

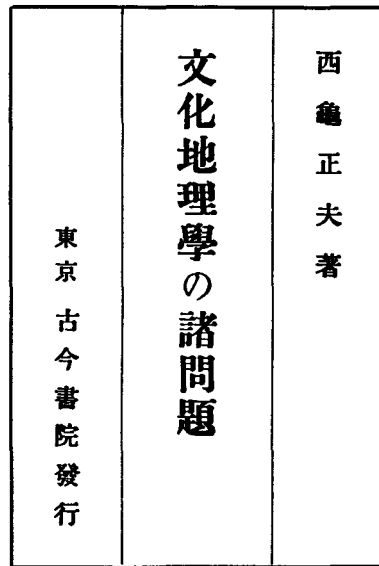
この発表は、著者『人文地理学講義（下）』の第10篇文化地理学（p. 447～524）をもとにして発表したものであった。

この西亀正夫氏の「文化地理学の諸問題」の発表について、S.

W生（和田重之氏のイニシャル）による感想が、「広島地学同好会報」第4巻第2号（昭和8〔1933〕年7月号）p. 67～68 に述べられている。この中に「文化地理学の諸問題」を出版したらとの勧められている。

この例会発表をもとにして和田重之助教授の勧めなどによって「人文地理学の諸問題」を執筆することになった。この出版を喜んで「広島地学同好会報」第5巻第1号、p. 29～30 に、和田重之助教授によって「解題愉快的報告（S.W.）」が書かれている。

『文化地理学の諸問題』が出版されることになった経過は本書の序の中にもみることができる。「本書は昨年中広島地学同好会に於て、数回に渡って講演した時の草稿を補訂したもので、……広島高師の和田教授が<sup>（ママ）</sup>懇懇せられたのが動機であったことをここに特記して敬意を表したいと思う。」とある。



図II-7 『文化地理学の諸問題』の扉

表Ⅱ-3 『人文地理学講義（第10篇文化地理学）』と『文化地理学の諸問題』との目次比較

人文地理学講義(下巻)文化地理学篇	文化地理学の諸問題
第1章 序説	序説
第2章 文化概説	第1章 文化概観
第1節 発生及び変化	第1節 文化の発生
第2節 移動及び分布	第2節 文化の発達
第3章 教化	第3節 文化の伝播
第1節 学芸及び教育	第4節 文化の分布
第2節 道徳	第2章 教化
第3節 宗教	第1節 学問
第4章 言語及び文字	第2節 教育
第1節 言語	第3章 芸術
第2節 方言	第1節 芸術の発生
第3節 身振と合図	第2節 芸術の要素
第4節 文字	第3節 芸術の様式
第5章 社会	第4章 道徳
第1節 社会組織	第1節 道徳の様相
第2節 社会制度	第2節 犯罪の分布
(菊判 57頁)	第5章 宗教
	第1節 発生と伝播
	第2節 信仰の対象
	第3節 来世観
	第4節 宗教的態度
	第5節 宗教と芸術
	第6節 宗教と民族
	第6章 言語
	第1節 言語の発達
	第2節 言語の種類
	第3節 方言
	第7章 文字
	第8章 慣習
	第1節 社会組織
	第2節 社会制度
	第3節 風俗
	(四六判 208頁)

## Ⅱ 地理学に関する研究

### (2) 『文化地理学の諸問題』の内容と構成

『文化地理学の諸問題』は、四六判、中扇2頁、序2頁、目次6頁、本文208頁、奥付1頁、クロース製上製の表紙、函入、定価1円20銭の小冊子であった。

「序」において「『文化地理学』といふ名称は極めて新しい。昭和4(1929)年に発表した拙著『人文地理講義』に於て用ひたのが或は最初であるかも知れぬ」と述べ、わが国において先駆的役割をはたしたという認識があったことを示している。

文化地理学的方面の研究は「フリードリッヒ<sup>(iii)</sup>などが言語・宗教・社会・性・法律・芸術及科学等を地理学の対象として取扱っている」世界にはこの方面の研究がある。ただ「研究は幼稚であって、勿論体系も整っていない。経済地理学や政治地理学に比べて非常な遜色がある。到る處に問題がころがっているが一向に手がついていない。そこで本書はこうした多くの問題を集めて見たのである。」とあるように、文化地理学の体系を整えることと、文化地理学でとりあげる問題を集めるところに本書の目的があったといえよう。

『文化地理学の諸問題』については前述したように『人文地理学講義(下)』の第10篇をもとにしたもので、両著書を比較してみると(表Ⅱ-3)のようであり、両者の項目だてはほぼ同じである。

「第10篇文化地理学」の第1章序説において、「文化の意義」について述べている。「文化とは何ぞや、こう聞かれて明瞭に答へ得る人は少い。蓋し文化という語は色々な意味に用ひられてゐるからである。人類学者はこれに定義を下して『文化とは人類の生活様式 (Life Mode) である』と云った。そう云へば人類の生活活動全体が文化であって、その中には物質的方面と精神的方面とを含み、その範囲は広汎であり輪廓は複雑を極める。そこでウィスラー (C. Wissler) は文化の範囲を明瞭にするために次の綱目を挙げてゐる。

1. 言語文字
2. 衣食住・道具及び職業

3. 芸術                      4. 神話及び科学的知識
5. 宗教的行事    6. 家族及び社会組織
7. 財産・貨幣及び貿易    8. 政治及び法律
9. 戦争

これは本書（人文地理学講義 上巻）第一篇で論じた人文の動的現象と殆ど内容を一つにするものである（p. 45）。故に、この意味に於ける文化を対象とした地理学は、人文地理学全内容の過半を占めることとなり、経済地理学も悉く包含することとなるから、学の体系を整へる上から文化という語の意義を今少しく狭い範囲に限定しなければならない。」と文化を説明してある。

上述したようにウィスラー (Wissler) の文化綱目 (Culture Scheme) によったものであるが、これは西村真次「文化移動論」より借用したのではないかと思われる。<sup>(2)</sup>

『人文地理学講義（下巻）』の文化地理学では、文化地理学の対象としては「吾人は、人類生活の状態の中に主として物質的方面を対象として已に生活地理学・交通地理学・聚落地理学・生産地理学・商業地理学等を講じ、更に精神的方面について政治地理学的一篇を設けたから、残る處は对人的活動中の社会・道德・教化・言語及び文字、対神的活動の科学・宗教・芸術等を残すのみとなった。故にこれ等を総括して文化地理学の対象とせんとするものである。」（p. 478）と文化地理学の対象をしばってある。

『文化地理学の諸問題』では、前述したウィスラーの文化綱目を示し「経済・政治・交通等に属さない他の部分を一括して、これを対象とする地理学に文化地理学と名づけたわけである。（以下文化という語をこの狭義の意味に用いる）」とし、文化地理学の対象を明確にしてある（p. 6）。

『人文地理学講義（下巻）』ではさらに文化地理学の存在価値を「凡そ人類は地球上の各地に集団をなして夫々に異なる様式の生活を営んでいる。それは主としてその他の環境の影響であるらしい。何となれば、環境の相似た地方の住民は概して相似た文化を持ってゐるし、その住民が移動

## Ⅱ 地理学に関する研究

して異なる環境の地に移れば、その文化も変化する場合が多いからである。即ち文化は決して人種に固有なものではない。もとより人種の影響が絶無であるとは云へないが、それは比較的薄弱であり又永続しない場合が多い。故に文化の様相とその環境との関係を論ずることは極めて重要な事柄であって、そこに文化地理学存在の価値があると思ふ。」(p. 478) として自然環境との関係で文化現象を論じようとしている。

『文化地理学の諸問題』では「文化地理学の着眼点」という項で「人類の精神的活動の一面たる言語とか科学とかいう様なものは……時代性というものと地域性というものを持っている。而して時代による変化の順序や経路も、各地必ずしも一樣でなくてやはり地方地方でそれぞれ特徴をもっている様である。然らば即ちこれ等文化の地域性というものを明らかにすることは、決して無用の仕事ではあるまい。」と文化の地域性を明らかにすることが研究の目的であると述べている。

さらに「文化の地域性というものが若しも人間の自由意志によってのみ生じるものであったならば、それは地理学ではなくて心理学か何かの様な別の学問になるかもしれぬ。併し私の考えるところでは文化もやはり自然環境・人文環境・人種の性格・文化段階及び自由意志の5つから成り立っていると思ふ。果して然らばこの中から自由意志を除いた他のの関係といふものを明らかにするといふことは、立派な地理学の仕事であるに相違あるまい。」(p. 7) として、文化を、自然環境、人文環境、人種の性格、文化の段階の4つによって地域性を明確にするとして、地理学の一部であると論述している。

これより西亀正夫の「文化地理学」の考えがほぼ明確にされている。

「文化地理学」の開拓者であり、完成者といわれるC. O. サファアーは「狭い意味で文化をとらえ、人類の文化活動の痕を示す遺物・遺跡、さらにそればかりでなく、地表・地物の状態から、それらがその当時の文化とどのようにかかわっていたか、過去から現在に至るすべての時間を通じて明確にしようという研究である」としており、西亀正夫の文化地理学もこ



れに近いものであったと云えよう。

木内信蔵は『文化地理学』（1970，朝倉書店）の中で「文化地理学は，地理学的方法による文化研究の科学である。」と規定している。

『文化地理学の諸問題』の目次をあげると表Ⅱ－3のようである。

### (3) 『文化地理学の諸問題』への評価

『文化地理学の諸問題』が刊行された当時の評価はどうであったろうか。

雑誌「地球」（地球学団），Vol 21-6 昭和9（1934）年 p.74の新著紹介では，藤田（藤田元春）という著名では次のように評している。

「人文地理学講義，農業地理，地理教育の諸問題を出して其精力絶倫を示めされた西亀氏は今亦この快著を江湖に提供された。序説の他に文化概観，教化，芸術，道德，宗教，言語，文字，慣習という八章に亘って氏の見解が示されている。まず古代文化伝播の交通路を明かにし，やがてその落ついた地域性を明らかにせんことにつとめた。しかし日本の国民道德を『全く環境によって培はれたもの』と説明する点に於てはあまりに地理的要素を重じすぎているようにも考えられる。問題は広範であるのに，論ずる所は小冊子である。自から説て詳ならざるを得ないことは著者の恨とする所であることを信じ併せてこうした方面の最初の緞入れをされた努力に敬意を表する。」

また，雑誌「地理教育」，Vol. 20-6 昭和9（1934）年・p 119－120の新著紹介欄では，本書の内容を簡単に説明・要約する記述がされた後で，次のような評価が付されている。

「……何れも漠然たる概論的なものである。内容はどの部分も地理的の見方をなし，或は地理を加味して居る。が是等はやはり人文地理学に包含されて然るべきもので，特に文化地理学として取立てて言う程の事もないように思われる。」（無署名）

「地学雑誌」，第46集第546号（昭和9年8月）p. 400に新著紹介がある。

「内容は八章に分ち，第一章では文化の発生・発達・伝播及び分布を論

## II 地理学に関する研究

じ、第二章以下は著者の文化地理学と考える内容を教化・芸術・道徳・宗教・言語・文字及び慣習の七つに分ち、此等が凡て地域的に相違する事実を掲げ、其のうち教化は更に学問と教育に、道徳は更に道徳と犯罪に、慣習は更に社会組織・社会制度・風俗に分って記述してある。而して此等の諸文化の地域的相違を生ぜしめた原因を考察した。併し解答を与へたといふよりも寧ろ問題を提供した所が多い。文化地理学の内容乃至本質に関して必ずしも著者の説が一般学者間の通説ではないが、邦文で文化地理学なるものを一通り知るには便利な書である。文章は氏一流を平易さで書かれ、極めて楽に読破出来る特色がある。四六判、208頁、1円20銭、昭和9年4月、古今書院発行」（無署名）

まず共通した評価としては、中俣均も述べているように、<sup>(3)</sup>「解答を与えたというよりは寧ろ問題を提起した」とみられる点であり、文化地理学という名称はこの当時人々の耳目を引く目新しいもので「こうした方面の最初の緞入れをされた」との評言は高い評価と言ってよい。

しかし「地理的要素を重じすぎる」という批判は環境との関係で考察するという当時の思想からやむを得ないものではなかったかと思われる。

戦後における評価について論及してみたい。

1990年前後に『文化地理学』という題名の単行本が2冊刊行された。

- ① 大島襄二・浮田典良・佐々木高明編者：文化地理学，古今書院，本文389頁，1989年11月20日，定価6,695円，
- ② 千葉徳爾著『文化地理学入門——文化研究の遠近法』大明堂，本文141頁，1990年3月29日，定価1900円

大島・浮田・佐々木編著『文化地理学』の「はしがき」（編集代表 大島襄二）において、「日本でこれまで真正面から『文化地理学』というタイトルで刊行された図書の数はきわめて少ない。辻村太郎著『文化地理学』（1942年）や木内信蔵編『文化地理学』（1970年）など、数えあげてもようやく5指を屈するだけで……」（p. 1）とし、注で西亀正夫（1934）『文化地理学の諸問題』（古今書院）をあげてある。

「第一章 文化地理学の系譜、第一節 文化地理学学説史（久武哲也）」において、『文化地理学』の用語は1920年代主としてドイツやアメリカの影響のもとに日本でも次第に受容されていく。文化地理学と題する著作は、日本では『西亀正夫文化地理学の諸問題』（1934年）が最初のものというが、一般の関心を引くのは辻村太郎『文化地理学』出版以降のことであろう」と述べられている。

さらに「終章 文化地理学の展望」のなかの「日本の文化地理学（大島襄二）」において、「日本における文化地理学の歩みは大まかに、20年刻みで区分することができる。その第1期は半世紀前の1940年代、辻村太郎の『文化地理学』（岩波全書）の公刊（1942年）を一つの時代の始まりとする。それ以前にも牧口常三郎（1909年）、辻村太郎（1926年）西亀正夫（1934年）などの紹介・著作の中に文化地理学の名が散見する……」（p. 368）ととりあげ、「日本における文化地理学」以前に西亀氏の著作は位置づけていると言ってよい。

「千葉徳爾：日本における文化地理的研究の動向，駿台史学，50（1980）p. 274」に、千葉徳爾は「まず日本における文化地理学的研究の発展をスケッチしておこう。日本の地理学において『文化地理学』の名を冠した著作の最初のものは、西亀正夫の書物であったようだが、論者は未だ読んだことがなく、その内容を論じ得ない。」と述べている。

千葉徳爾著『文化地理学入門』（1990、大明堂）において、「当時の日本の地理学研究者でこの分野に手をつけたのは、その翌年に出た『文化地理学の諸問題』の著者西亀正夫がはじめてではなかろうか。本書は研究書ではなく、いわば研究課題目録の解説ともいうべきもので、今後研究すべき対象を列記説明したにすぎない。これは地理学が研究の一方法であるとハツホーンが規定する以前の議論であるから止むを得ないが、そこに掲げられた問題には確かに文化地理学として研究すべき好題目が認められる。」（p. 22）と西亀正夫の文化地理学を位置づけている。さらに「参考」のなかで、「目次を掲げておく。第1章 文化概観，第2章 教化——これは

## II 地理学に関する研究

注目すべき着眼で、学問の発達の地域性を扱っている……第3章……」(p. 25～26) として、教化を文化地理学の中にとりいれたことに着目している。

前述千葉徳爾著『文化地理学入門』第9章「学問の地理的研究」,(p. 128～129) において、日本で最初の文化地理学書『文化地理学の諸問題』を引用して次のように述べてある。

「学問は文化であろうか。われわれが『学問』と呼ぶものは、衣食住や信仰、習慣、制度などとは異なるが、これも人間だけが研究している独特の知識体系である。その限り文化の一部といっても差支えはない。そうであるなら、文化の地理的研究の一部として、学問の地理的研究があってもよいのではないか。」

「その後の日本文化地理学の書物でも、また欧米の若者たちでも、学問の地理的研究にふれたり、論じたりしたものはないようである。」と西亀の「学問の地理学研究」の先駆性と独自性をあげている。

さらに、西亀は「学問の内容ではなく、その発達の早いか遅いかという差異をとりあげ、乾燥地では空気が透明で天体観測が容易であるから天文学が進歩したが、日本のように湿潤で雲の多い地域では天体観測が困難で、その進歩は遅れたという例をあげてある。また、政治が混乱し教育施設や制度が不備な地域でも学問の進歩は制約されるという。しかしながら、多くの異文化が共存し相互に刺激しあう社会では、学問の進歩も促進される」として、ヨーロッパという地域をその例にあげた。また、ドイツの氷河研究が発達し、日本で地震学が進歩したという例も示して、環境が学問の発達とかかわりがあると論じている。」と説明してある。

「しかしながら……そのような点で、実は学問の種別と自然環境と発達関係は、簡単に説明できるものではない。」として、デービスの侵食輪廻と、吉川虎雄の浸潤変動帯の侵食輪廻という2つの理論の生まれた背景を説明して、「それぞれの研究者の調査フィールドに応じた基礎に立つ理論が、いくつも立つことは当然のことである。学問の文化地理的研究が可能

であろうと指摘した西亀正夫の考えは誤っていなかったと考える。」と評価している。

多くの場合、『文化地理学の諸問題』によって西亀の文化地理学が論じられているが、『人文地理講義下巻』第10篇の「文化地理学」を取りあげて論及するのがより適当であろう。

1991年に『日本における文化地理学の展開』という報告書が、日本地理学会の文化地理学研究グループ（代表者：早稲田大学 宮口侗廸教授）の研究活動の成果としてまとめられた。

「日本における文化地理学の展開」（研究代表：久武哲也，平成2（1990）年度福武学術文化振興財団研究助成研究報告書，1991. 3）において，西亀正夫の「文化地理学」が次のように位置づけられている。

「1930年代において，文化地理学という用語は一般の読者や学校教育におけるポピラーな話題を提供する「風俗」レベルでの興味と対応していたようである。」（p. 32）「しかし，その中でも西亀正夫による『文化地理学』の主張は，こうした地理学全般が『景觀地理学』などのドイツ文化地理学の理論的枠組にある面で拘束されている中であって，比較的自由に，当時の地理学から等閑視されていた教育や宗教，言語や文学・方言さらに，社会制度などの面を取りあげ，ユニークな方向を出している。すでに彼は『人文地理学講義（下巻）』（西亀，1930）の第10章で「文化地理学」という章を設け，1. 序説，2. 文化概説，3. 教化，4. 言語及文字，5. 社会の5つの項に分けてその内容を提示している，「文化地理学」の中で，とくに文化概説を説けたのは，西亀が最初であろう。すでに西村眞次『文化人類学』（1924）や，同じく西村の『文化移動論』（1925）の中で検討されたC. ウィスラーの『人類と文化』（1923）の『文化』の定義を西亀は採用している。その基本的骨子は拡大されて，西亀の『文化地理学の諸問題』（古今書院，1934）にまとめられた。」

「西亀のこうした文化地理学の考え方は，ある面で「文化要素」主義とでもいえるもので，一般にいわゆる非物質文化に限定しようとする。『人

## II 地理学に関する研究

文地理学講義（下巻）の「文化地理学」の章でとりあげられた「教化」「言語及文字」「社会」の項目は『文化地理の諸問題』では「宗教」「言語」「芸術」「道徳」「慣習」として項目がたてられる。引用はラッセルの Volkerkunde の英訳（History of Man）や C. S. Burne の Hand book of Folklore（1914）など、数多くの民族学、言語学、人類学の成果が取り込まれ、また日本の事例も引用されながらも、いまひとつその焦点に欠けている。しかし、全体として『文化地理学』が辻村のいうような『地誌学』や『地域論』（Chorologie）の支柱であるという考えとは基本的に対立する『通論』としての立場を主張するものであった。」（p. 33）

「文化地理学を一般地理学（通論）として人類学（エスノロジー）や政治地理学との対比の中で位置づけようとする発想は具体的内容は異なれ、牧口常三郎の『人生地理学』や、栗原寅治郎の『大日本国勢地理』（1924）、井上長太郎の『人生と地理』（1925）にもみられる。西亀にとっても教育的レベルでの実践的課題としての『文化地理学』の導入であったように思われる。それは、牧口が「開化地理学」（Kulturgeographie）の中で精神的開花に関する現象を研究するもの」と規定した具体的内容に西亀のこれらの項目はきわめて近いからである。西亀については最近、中俣や三上によってその生涯や教育者としての側面から、また著作の内容の面から具体的に検討されている（三上、1987、1988、中俣、1988）が、位置づけの難しい著作である。」（p. 33～34）

以上、戦前・戦後にわたる『文化地理学の諸問題』の紹介・論及についてまとめてきたが、西亀正夫の「文化地理学」について以下のように評価できるのではないだろうか。

- ① 西亀正夫は、日本において「文化地理学」を一般地理の中に位置づけ体系化した最初の人と言ってよいと思う。これは『人文地理学講義（下巻）』においてである。
- ② 文化地理学の対象分野は「ウィスラーによる文化綱目」によって設定し、現在はあまり地理学プロパーの対象になっていない分野、例へば道

徳・教化・慣習などを地理学の対象としている。

- ③ 『人文地理学の諸問題』は『人文地理学講義（下巻）』のなかの「文化地理学」をより詳細にし平易にしたものであり、基本的には「人文地理学講義」の考え方を踏襲している。
- ④ 戦前には西亀正夫の「文化地理学」は殆んど注目されなかったが、戦後は大島襄二、千葉徳爾などによって再評価されている。戦前は大学出身でないという点で無視されたのではないか。例へば辻村太郎「文化地理学」には一言も取り上げられていない。

〈注〉

- (1) Ernst Friendrich は Einführung in die Wirtscyaftsgeographie (1908), Wirtscyaftsgeographie Vol. 1, 2 (1926) などがある経済地理学者である。
- (2) Wissler, C.: Man and Cuture, 1923, Geoge, G. Harrap, p. 74. 西村真次：文化移動論 (1926), エルノス, p. 279~282.
- (3) 中俣 均：西亀正夫と「文化地理学の諸問題」, 島根大学法文学部地域社会教室論集, pp. 85~93 (昭和63年11月)。

〈参考文献〉

- 1. 大島襄二・浮田典良・佐々木高明編著：文化地理学, 古今書院, 1989.
- 2. 千葉徳爾著：文化地理入門—文化研究の遠近法—, 大明堂発行, 1990.
- 3. 木内信蔵編：文化地理学, 朝倉地理学講座, 第8巻, 朝倉書店, 1970.
- 4. 辻村太郎：文化地理学 (岩波全書), 岩波書店, 1942.
- 5. 大島襄二：文化地理学序説, 理想社, 1976.
- 6. 中俣 均：西亀正夫と「文化地理学の諸問題」, 島根大学法文学部地域社会教室論集, No. 4, 1988.
- 7. 大島襄二：文化地理学のゆくえ。
- 8. 研究代表 久武哲也：日本における文化地理学の展開, 平成2年度福武学術文化振興財団研究助成研究成果報告書, 1991.3.

## 5. 農業地理学の体系化

西亀正夫著『農業地理学』は、昭和6（1931）年5月28日、古今書院よ

此の廣告に依り注文の節は「地理教育」を見るに御附記を乞ふ

西 龜 正 夫 著 (新刊)

# 農業地理學

菊大判本文三八〇頁  
挿圖精緻組込刷版七五個  
クロース装製兩入  
定價 參圓貳拾錢  
送料(書留) 廿七錢

一、あらゆる人類に衣食住の材料と工業の原料とを供給する農業は、實に凡ての産業中最も基礎的であり、最も重要なものである。一、土地に立脚し氣候に支配せられることの大きいこと、農業の右に出づるものは無い、それ故に農業地理學は最も豊富な内容をもつ。一、今日世界の農業が如何に自然に支配せられ、如何に環境に順應してゐるかを明かにすることは、やがて、將來の農業を如何に發展せしむべきかの資料となるものである。一、農を以て國本とした日本、而して今や農業に於て行き詰つてゐる日本として、農業地理學の研究は特に切實な必要を感ずる。そしてその研究の成果を我が農業に應用實施することは、農村救済、否國家救済の上から焦眉の急を要する最も重要なことである。一、この意味に於て農業と環境との關係の理論と實際とを纏めた本書を、地理學の研究、地理の教育にあたる人々は勿論、農業實際家、經世家、政治家、一般に國を愛する人士の坐右に呈したいと思ふ (著者)

山崎直方論文集刊行會編 [全卷完成]

## 山崎直方論文集

菊大判上製兩入  
定(七)五圓五拾錢  
價(下)六圓五拾錢  
送料各二十七錢

〔上巻目次〕 刊行の辭 凡例 第一部 火山に関する研究 第二部 地質・地形に関する研究 第三部 水河に関する研究 索引  
〔下巻目次〕 第四部 地震及び地塊運動に関する研究 第五部 考古學及び人類學に関する研究 第六部 人文地理に関する研究 第七部 地誌に関する研究 第八部 地理教育に関する研究 索引 著作目錄 略年譜 山崎博士と日本の地理學(山村太郎(終))

發行所 東京 市 神 田 區 駿 河 三 五 三 西 三 三 町 四 七 番 香 港 拾 〇 三 院 書 今 古

図II-8 農業地理学の出版広告 (地理教育第14卷第3号)



り発行された。菊判、はしがき2頁、目次9頁、挿図目次2頁、本文367頁、主要参考文献4頁、索引7頁、計390頁を越す大著である。

雑誌「地理教育」第14巻第3号、昭和6（1931）年6月号に、図Ⅱ－8のような広告がでている。山崎直方論文集と並べてあるのは興味深い。

本書執筆の目的には、世界恐慌の影響をうけた日本農業の救済ということも背景にあったのではないか。「農業と環境との関係の理論と実際とを纏めた」というのが本書であり、「地理学の研究、地理の教育にあたる人々は勿論、農業実家・経世家・一般に国を愛する人々の座右に呈したい」と広い分野の人々をも対象にしていることがわかる。

本書は、緒論・本論・特論によって構成されている。

緒論は農業とは何かにはじまり、農業の起源・変遷・特質を述べ、農業地理学の使命で、結ばれている。この末尾に、本書の構成について述べている。農業地理学については「農業と称する人間活動の一事象を捉えて、自然が人間を制約し人間が自然に順応する相互関係の渾一的景観を研究する学であるから……」と述べているが、当時の地理学界の思潮をうけて述べたものである。現在のように農業地理学の対象は「農業地域」であり、「農業地域を対象とし、その地域構造と地域性を明らかにし、地表の空間的秩序を究明する」科学であると定義する立場とは異なる。すなわち、ラ・ブラスシュ (P. Vidal de la Blache) の地的統一・相互関係を明らかにする立場を立脚して述べているのではないと思われる。

「本書は本論に於いて先づ農業の要素を明らかにし、農業と環境との関係を見、農業の様式を説き、転じて農業が人間生活に及ぼす作用を論じ、各論に於ては一面世界主要諸国の農業を略説し、他面主要農産物を主題として、これが世界に於ける分布及び需給の大勢を述べようと思ふ。」と本書の内容構成を述べている。すなわち、本論は系統地理学にあたり、特論は農業地誌、商品地理学の内容になっており、農業現象を網羅している。いままでの経済地理学の中の一分子としての「農業地理学」をこのように纏めたものとしては最初のものといってよい。

## II 地理学に関する研究

図II-8の広告に、著者が述べられている部分は本書の「はしがき」に当る部分であり、本書を著述した目的にあたる。

また、佐藤弘著『政治経済地理学』、富田芳郎著『経済地理学原論』の内容構成と比較しても、本書農業地理学が整然と体系化されており、はしがきには書かれていないが、農業地理学の体系化を考えたことは明らかである。農業地理学を体系化した著述として最初のものと言ってよい。

農業地理学の先駆者であることを示すものとしては、昭和8(1933)年10月発行の伊藤兆司著『農業地理学』(古今書院)に、次のような叙(記)述がある。「併しながら、斯学(農業地理学)の概念構成に関して寡聞未だ我が学界に定説あるを知らぬ。文献として吾人の参照すべきは僅に最近公にされた農業地理学なる一著書のみである。されば右の著者西亀正夫氏は此の点に関する先鞭を著けたものと言わねばならぬ。而して氏は右書中斯学の性質を次の如く示している。『……………』と。乃ち氏は現今多くの経済地理学者——その多くは地理学者たる——が普通把握するところの交替作用及び景観概念に立脚して、農業地理学を基礎づけんとする如くである。(p. 2~3)」

雑誌「地球」第16巻第1号に藤田元春氏の新著紹介がある。

「健筆の西亀君は矢継早に本書を世に問われた、自然の人文に影響すること農業に如くものはない、農は古来国の本だといったが、東洋ことに漢民族の文化は農業によってさかえ、支那の歴史はさうした農業文化の南進ということと終始してゐる程に農業と歴史とは一致する。本書は農業の要素、環境様式及び農村を論じてあるが、農業と文化という一章に於てはまだ十分語りつくされたとはいへぬ。菊判367頁にさうした理論と世界主要各国の農業とをのべたものであるから、各章自から綱要になって、細説する違がなかったのである。けれどもその世界農業地理は簡にして要を得てゐる。良い参考書であることと信じて大方にすすめる。(藤田)」

雑誌「地理教育」第15巻第2号(昭和6年11月号)に新著紹介がある。

「経済地理学の一部門として農業地理は最も枢要なる位置を占めて居る

事は言ふまでもない。而も農業地理に於てはその要素として土地・水・気候を度外視して全く論ずる事は出来ない。本書にては緒論にて農業のデフィニションをなし、本論 第一章 農業の要素（4節に分ちて土地・水・労力を）、第二章 農業の環境（4節に分ちて地形・気候・人為環境）にて前記の要素を述べて居る。次に第三章 農業様式は4節に分ち階梯様式の解説を試みて居る。第四章 農業と人文は3節に分ちて人文関係を述べて居る。

特論は第一章 主要各国の農業（主要各国を14節に分けて居る）。第二章 主要農産物（3節に分ち食料品・嗜好品・衣料原料品とす）に大別す。全部で索引を合して379頁。

以上ざっと見渡した所農業地理学としての形式は備っているが、全般よりして少々簡単過ぎる嫌がある。殊に本論においては各章共今少し突込んで十分なる地人関係を究めて欲しかった。土地・水・気候の三要素は誠にそうである。又特論に於ても只一般的、又は地誌的の解説よりも本論よりの推理せる点をもっとあげて欲しかった。曩に人文地理学講義を出し、十分なる識見を示された著者は、本書に於てのみ只その片鱗をみて全斑を窮ふ事は出来ないが形式は兎もかく、全体として少々物足りなさを感じる。」

以上2雑誌の紹介からも読みとれるように、体系は完備しているが頁数の関係もあり綱要を述べられたものであったと言えよう。しかし、本著述が地方の研究家である西亀正夫によって農業地理学体系化されたことは十二分に評価できよう。

### Ⅲ 地理教育に関する研究

#### 1. 地理教育に関する論考

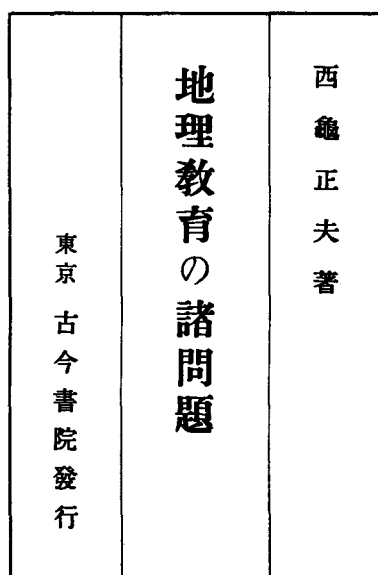
地理教育に関する著述として第1にあげなければならないのは、昭和8（1933）年に出版した『地理教育の諸問題』である。その後は、日本の情勢の変化つれて、昭和10（1935）年の『非常時局と地理教育』、昭和16（1941）年の『皇国中心地理教授』へと変化していった。

##### (1) 『地理教育の諸問題』

『地理教育の諸問題』は、古今書院より昭和8（1933）年3月に発行された四六判140頁の小書である（図Ⅲ-1）。

本書の例言には、次のようである。

1. 本書は、昭和7（1932）年12月、松山市で実施された愛媛県郷土地理研究会主催の講習会での講演草稿を、整理補正したものである。
2. 地理学の進歩が著しく、普通教育における地理科も革命的な気運がみなぎっている。この中でできるだけ穏健中正な意見を述べたものである。



図Ⅲ-1 「地理教育の諸問題」の扉  
(1/2に縮小)

戦前における地理学・地理教育に関する研究

表Ⅲ—1 目 次

回顧と反省	一	現代的知識	三	困難なる點	六
地理教育思潮の變遷	一	讀圖力	四	一般方式	六
講演時代	一	個有名詞の記憶	四	試案	七
實習時代	二	商品の鑑識力	六	項目式による取扱	七
理法時代	四	教材の方面	六	総合的なれ	七
地理區時代	五	郷土地理	五	項目の順序	七
從來の缺陷	九	直觀教材として	五	特徴中心主義	九
羅列主義	九	郷土教育と郷土地理	五	模式教材	九
公式主義	三	愛郷心と郷土誌	五	類型則	一〇
掛圖萬能主義	六	郷土史の價值	六	系統案を作れ	一〇
當面の問題	九	眞の愛郷心	六	地圖中心主義	一〇
高すぎる要求	九	郷土を見る目	六	地圖に親む心	一〇
的はずれの教授	二	地方誌教材	六	教科地圖の不備	一〇
公開授業の通弊	二	地理區の問題	六	讀圖の指導	一一
時間が足らぬ	二	景觀區分	六	描圖	一一
道具が多過ぎる	二	區分の單位	七	製圖	一一
驚くべき準備	二	區界及び漸移地帯	七	翻譯	一二
後が續かぬ	三	分析よりも綜合	七	實習について	一二
價値的方面	三	通論教材	七	實習の要領	一二
生活指導と地理科	三	根本的な問題	七	實習の事項	一二
生活とは何ぞや	三	自然地理教材	七	踏査と調査	一二
地理學の本質	三	人文地理教材	八	郷土調査の系統	一二
地理科の使命	三	教法的方面	八	自學自習	一二
常識としての地理的知識	三	發見的取扱	八	目標	一二
地理學と地理科	三	發見の興味	八	自習の資料	一二
		發見の順序	八	自學輔導の要領	一二
		地理區による取扱	八	考察法の指導	一二

### III 地理教育に関する研究

3. 科学的地理学の本質を透徹し、これに立脚した教授法として書いたもので、旧来の一般教育学のみから割りだした教授法ではない。
4. 本書の中で、生活指導の問題、郷土地理の問題、および景観地理区の問題に力をそそいで書いた。

以上の例言によると、講習会の講演をもとに、穏健中正な地理学観に立ち、地理学の立場からの教授法を述べ、生活指導の問題、郷土地理問題および景観地理区に重点をおいて書いたものであることがわかる。

本書の内容構成を目次でみると表Ⅲ－１のようである。これは大きく４つに分かれている。「回顧と反省」（本文の24%）、「価値的方面」（12%）、「教材的方面」（24%）、「教法的方面」（40%）である。すなわち「地理教育の発展と問題点」、「地理教育の目的」、「地理教材論」、「地理教授法」という構成からなっている。「地理教授法」に最も多くの頁数をさき、西亀正夫の教授法の集大成である。詳細は次の「地理教授法への論及」で述べる。

地理教授は「明治時代の講演式教授→大正の初め（1912年）頃から実習式教授（グラフ教授）→大正10（1921）年ごろから地理的理法教授→昭和にはいって地理区教授へと進歩してきた」と纏めている（西亀，1933）。

従来地理教授は次のような欠陥を持っている。第1に教材過多症に陥っておりむやみにたくさんの教材をならべる羅列主義という大欠陥を持っている。この対策としては教科書中の教材を淘汰精選して授くべきであり、固有名詞を極力減じて、具体化を充分にし、内容を充実しなければならない。

第2にともかくも理法で纏め、公式化しなければ承知できぬという風潮が一部に流行している。環境と人文との関係は、ただ「かくあるであろう」という蓋然性、「かくあり得る」という可能性、「かくあり勝ちだ」という傾向性に止まっている。「必ずかくある」という必然性は無い。複雑な面倒な事件を単なる公式で片付けようとするからいけないのである。公式主義の授業は断然排撃しなければならない。

第3は、教室の前面にも、背面にも掛図をかけ並べて、掛図萬能主義ともいう状態をみかけるが、地図を離れての教授はないが掛図のみをいうのではない。むしろ児童・生徒の地図をうまく利用するならば、掛図なんかはほとんど不用に近いものである。中等学校においては殊にそうである。

第4に、当面の地理教授の問題としては、教師の学殖はあくまで豊富であるべきだが、教えることがらに当の児童の心理発達の程度を考慮せねばならず、高度の要求をする結果におちいついていないか。自学主義の教授法をとる人にも高度の自学を要求するのを見かけるが、今日の様な教科書で自学ということは頭から問題にならないし、参考書を与えると云っても材料過多の受験準備書しかないので、とうてい自学の材料とはならない。こんな状況の下にダルトンなんかもっての外である。

第5は、今日の地理科には適当な参考書がない。歴史や理科には子供にわかるように面白く書いたものが山ほどあるが、地理にはほとんど絶無と言ってよい。稀にあって地理を知らない人の書いた無責任極まるもので養蚕の説明に、火山灰でなくては桑は出来ないように書いてあったりするので、とても子供に読ませる気にはなれない。この状況を憂いて『少年少女世界地理文庫』12冊、『趣味の地理・学習旅行文庫』10冊を公にした。これは面白いことと、決して害になるような誤謬のないことを確信している。

第6に、地理区による教授は最も進歩した試みとして新進の研究者によって多く試みられて来た。併しながら、中には「地理区による教授」ということをとり違えて「地理区の教授」と合点して**的はずれの教授**をやっている人が無いでもない。また実習についてもあまり偏すると地理本来の目的から遠ざかってしまう。例えば非常に精密な地図を描かせたり、非常に立派な模型地図を作らせたりするのは、そのために費やす数十時間は単に指先の練習にすぎないので、頭の中には何物も残らないと指導法についての批判をしている。

まさに、現在の地理教育（社会科教育）における教授上の問題点と共通

### III 地理教育に関する研究

点が多く、今後も解決に努力を続けて行かなければなるまい。

本書についての新著紹介が雑誌「教育」第1巻第3号、昭和8（1933）年6月号（昭和8年6月1日岩波書店発行、p. 147～148 ページ）にみられることは注目してよからう。

富士徳次郎著『地理教育原論』、西亀正夫著『地理教育の諸問題』

「編集部より送付されたる2書、最近発行の地理教育書としての選定であると思われるが、教育書の2つの傾向を表わしている所が面白い。原論は菊判520頁の大冊、地理学の本質より説起して最後に170余頁に渉る参考書目の解説を付して堂々の陣を張れば、諸問題は四六判140頁、この中に地理教育の歴史、目的、教材、教授法をあっさりと纏めて居られる。

富士氏は、東京女高師教授の肩書きを有せられるゝ学者、西亀氏は経験と情熱に富む実家と見受けられるが（傍点は筆者が付けた）、前者の「地理教育の発達は地理学の本質を明にして初めて達成さるゝ」として「地理教育の原理を地理学の本質に求めん」とせらるるに対し、後者は「一般教育学から割出した教授法でなく、科学的地理学の本質に透徹しこれに立脚した教授法」を書かうとせられるのであって出発点に於て全く一致せられている。この事は恐らく従来の教授法論の弱点を突くものであろう。しかし、果してこの一本槍が虎を仕止めるものであろうか。

西亀氏の著は、或る講習会の講演草稿であるといはれている。そこには十年一日の如くこの問題の為に精進せられたる情熱とそれに加はる多年の経験がにじみ出ている。我ら末輩はその経験の前に頭が下らざるを得ない。著者自ら穩健中正を自称せらるだけあって、その意見たるや聊か歯がゆい程穩健である。その最も有益なるは回顧と反省篇であろうか。若輩の知らんと欲するはかくの如きものである。そこには体系もなく、標準もない。それでいいのである。老大家の苦心の跡を知らしてもらへばそれが有難いのである。この滋味は後の各篇ににじんでいる。作業的な方法には消極的過ぎると思われるが、その御注意も一々意味がわかる。ただ余り御注意すぎて、地理区は兎もかく、景觀 *Landschaft* の如き術語に説明のないのは



困る。恐らくこの書に最も益せらるゝであろう初学者はわからないで終わってしまうであろう。

しかし、結局、この西亀氏の著者は我らの材料である。富士氏にもせよ、西亀氏にもせよ、果して我らはこれらの書に頼って地理教育の本質がつかめようか。或はこれによって明日の、向う一年間の教壇が益せられたろうか。専門学者の論理も老大家の経験も参考になったが、未だ物の役には立たぬ。そこに教育学徒の立場がのこされている児童の研究、地理科の活用、吾人の期待と精進は役處である。(古川原)」

以上からも窺えるように、本書は西亀正夫の明治の後半から地理教育の実践をふまえて、昭和初年代までの地理教育の変遷、目的、教材論、教授法について、平易に述べてあり、地理教育にかかわる人および新しく地理教育にかかわる人にとっては最適の著作であったと言えよう。

## (2) 『非常時局と地理教育』

昭和10(1935)年2月に、古今書院から『非常時局と地理教育』の出版がある。本書は四六判、序1頁、目次3頁、本文150頁、奥付1頁からなる。

序にあるように、「今やわが国は非常時局に直面している。」との認識のもとに「殊にわれ等地理教育に従事するものはよく世界の大勢を凝視し、活きた教育を行って国民精神の奮起を促し、以って局面打開の重大な役割の一つを分擔せねばならぬ」との使命感に立った著作である。

非常時の何ものかを国民に明確に認識させる必要があり、その対策としては「農村の更生・貿易の振興・国防の充実・国民外交の伸張等」は「地理教育の徹底によって企及し得べきこと甚だ多い。」と、地理教育の立場から地理教育者としての意見をのべている。

生徒児童に対して「国家意識を熾烈にし、国際情勢とわが国力を正しく認識せしめ、その生活を指導して自力更生、以って国力の培養に資せしめんこと」を目下の最も急務とするところとしている。昭和初年の日本の政

### Ⅲ 地理教育に関する研究

治・経済・社会の情勢をふまえての論及であり、教育実家に対して多少の暗示を与えればと著者は期待している。

内容構成は、非常時とは何ぞや、最近の国際関係、聯盟脱退前後、軍縮と国防、不景気と赤字財政、世界貿易戦、人口問題、国家的観念の養成、経済教育と国力の培養、わが民族の使命と地理教育、という章立てである。

「欧州を距る東一萬里、北米を距る西五千里、世界一の未開大陸を両手に抱き、世界一の太平洋に深く両脚を延した日本、この恵まれた位置こそは我等の最大の宝である。土地は狭くても地力は貧弱でも、与えられた位置の良好は何物にも換え難い。ここに自覚してわれ等の真使命をさと、以て建国の大精神を永劫に守って行くことは、苟も地理を学んだものの夢寢にも忘れてならないことであり、又地理を教育するものの根本的指導精神でなくてはならない。非常時局に対する策は結局この一点に帰すべきである。」と結んである。本書は、皇国史観に立った日本の歴史を肯定した上で述べられていることは時勢上致し方ないとしても、日本の位置で発展を論じたのは内村鑑三著「地理学考」にある地理学の天職を想起させる。

#### (3) 『皇国中心地理教授』

『皇国中心地理教授』は、昭和16(1941)年1月15日、<sup>かじたに</sup> 梶谷書院から出版され、四六判、序1頁、目次3頁、本文300頁、奥付1頁からなり、定価2円20銭である。

第2次世界大戦突入を目前にして本格的執筆の最後となった。前著の「非常時局と地理教育」からさらに進んだ皇国地理観に立った著述となり。小学校から国民学校に変わったことも意識して書いてある。

本書の序において「今や世界はその歴史に未だ曾って無い大転回をなしつつある。」とすでにヨーロッパにおいて戦争がはじまっている時勢をうけて、このなかで「指南の舟を漕ぎつつあるものは皇国日本である。」と日本の立場を示してある。

「肇国以来の神意を体し、不動の国策に邁進せんためには、不拔の国家

態勢を確立し国家の総力をあげて戦ひぬかねばならない。」と日中戦争下にあったことを示し、「この時にあたって次代の国民を養成する任にあるものが、何時まで古い殻の中に閉ち籠って居られやうか。」と新しい考えに立つ覚悟を述べている。

「国家の使命を自覚させ、愛国の情熱を培はんとするには、世界地理は根本から書き直さなければならぬ。」と日本の使命を自覚させ愛国心を培うには世界の地理を書きかえなければならない。「茲に皇国中心の地理教授を提唱する所以である。」と皇国中心の地理教授を提唱し、本書を執筆した目的としている。

本書の構成は、序説、郷土地理、国土地理、東亜地理、世界地理、国勢地理からなっている。

本書の巻末にある広告文に、「地理教育界の老宿として自他共に許す西亀氏が、皇国日本の今後の地理教育は斯くあるべし、とその革新的意図を披瀝し、而も懇切なる具体的説明を以て後進の爲すべき道を示唆した真に得難き一書である。」とあり、本書の特色をよく表わしている。

## 2. 地理教授法への論及

### (1) 西亀正夫の地理教授

地理教授法については、明治末期から多くの論及がある。そのうち主要なものを取りあげて考察する。

「愛媛教育」第314号、(大正2《1913》年7月)に寄稿した「地理教授法私見」において、「地理は理解的な学科であるとして、教科書中心の問答主義教授法」を提唱している。

{	教科書中の教材	{	一読して意味のわかるもの(問答)
		{	意味のわかり難いものは(解説)
{	教科書外の教材	{	教科書中の事柄を理解させるために必要な事項(説話)
		{	興味を添える事項(説話)

### Ⅲ 地理教育に関する研究

西大寺高等女学校時代に、「岡山県教育会誌」第174号、第115号第119号（大正2（1913）年）に書いた「地理教授の三大欠陥」の中で、西亀正夫は教授法について次のように述べている。

「自分は常に先づ生徒に地図を描かせる、そして教科書にある丈けのことを図上について調べさせ之を各自の地図に記入させる、若し教科書の読方が難かしい時には第一に読方を教へてからかかる、こうして生徒をして自ら学ぶ様に仕向ける、すると教科書中には説明せねばわからぬ様な事柄がある、例へば朝鮮には『各戸に温突（オンドル）の設備ありて云々』『内地の旅行には轎に乗り云々』『気候は大陸の影響を受けて』などの類である、こう云ふ事は成るべく生徒の質問するのを待つて居る、気がつかないで質問せなければこちらから問をかけて注意を与える、そして説明もすれば講演もする又或事柄は特に大切だと思へば板書して注意を促がし筆記せしめて記憶を確かにする。又或場合には生徒がどの位まで自ら調べ得たかと言う事を検する為に問答式も用いる。併し又教科書中に書いてあって生徒自身が知り得たと思はれる教材については問答もせぬが説明もせぬ場合がある、こうして教授して行けば生徒は可成り忙しいが教師は至って閑散である、時には自分で参考書でも開いて見て居る暇も無いことは無い、そして教材は随分進む、生徒には自学の習慣がつく、其の記憶は確實になると云う様な色々な利益がある、こう云ふ方法が改良の方法だと自分は信じている」として、自分の授業の進め方を示してある。さらに「現今の一般の教授法がどうも教師のみ多く働いて生徒が楽過ぎる。随て教授の効果の甚だ薄いのを深く遺憾に思ふのである。」として教師主導の授業を反省し、指導法の改善を提唱している。

中等学校の地理教授法の革新が必要であるとの論述は、教育雑誌「教育実験界」第40巻第4号、（大正8（1919）年4月号）に「大革新を要する中等学校の地理教授法」として載っている。

書き出しは、小学校と中等学校との教授法の比較からはじまる。「中等学校の教師に云わせると、どうも小学校の教授は駄目だと云ふ。併し小学

教師の言を聞けば、中学校には教授法の研究が更に無いと批難する。抑もどちらに理窟があるであろうか。」と疑問をなげかけ、「公平な目から見れば恐らくどちらの言にも一理はある。」「教授の方法という点から中等学校はどうしても小学校に及ばぬ。けれども教材の研究だけは慥かに中等学校の方が一歩進んでいる。」と評価している。

「小学校の方面では教授の方法という事は極めて精細に研究されて居る。兎も角も如何なる方法が最も適切であるかと云ふことは殆ど議論の余地が無くなっている。」「此上は只教材の研究に努力すればよいとも云へる程度に進んで居る。」「實際多くの小学教師はそういう考へで随分と修養には骨折って折る様である。」と小学校の教授法を高く評価している。

これに対して、中等学校の方は「教授の方法なるものはテンデ研究されておらぬと云ってよい。如何なる方法をとるべきかと云うことが問題として残されて居る。巧拙どころの騒ぎでは無い。まだ方法が案出されて居らぬのである。」と現状が把握してある。

教授法について工夫研究する人があるかというところこぶる心細い。その理由は「中等教員の大多数が教授の方法ナンテいらぬものだ。ただ教師が深く知つてさへ居れば方法などは全く無用だと考へて居るのだから驚き入る。」「それかと云って学力の修得に大に努力するというのでもない。」など、中等教員の考え方と実状を述べている。

数年前、ある文部省の視学官が中等学校の地理教授を視察して出した報告書にあまりにヒドイ事が書いてあったが、決して偽りでないことがわかり、「どうしても地理教授法の大革新を要すると考へて、見たまま思のままを率直に述べて同僚に訴えたい。」と論述の目的を述べ、具体的に次のような点をあげてある。

第1に、地図を基本においた地理教授でなければならないが、「生徒にただの一回も地図を描かせず、時には生徒自身地図を開いて見ることも無い様な教授がある。又地図を描せると云えば宿題とし透写させる位のこと、臨写や暗写はやって居ないのが多い、まして地図の基本觀念を養

### Ⅲ 地理教育に関する研究

ふとか、地図と実地との連絡をとるとか、測量製図の原理を教えるとか云ふ様なことは全く考えていない様である。」と地図中心の教授を主張している。西亀正夫の地理教授の第1は地図中心におかれていた。

第2に、標本室の整備利用が不十分であるということである。標本室は相当の金をかけて多数のものが蒐集されているが、「排列は一向工夫されて居らぬ。……教科書に出て居ると居ないと、地方の状況上必要程度の大小、そんなことは全く無頓着で、第一其日の教授にどれ丈けの標本が必要で其中のどれ丈けが備へ付けてあるかを知らない教師さへもいる。よしや二三の標本を教室へ持って出るにしても、教壇の上から一寸見せて置いて、アトはそのまま授業後にでも見て置けと云って戸棚へ入れたり教室の隅へ置いたりする位なこと、観察の要点がどこやら、鑑識の方法がどうやら、そんな事は全く顧みない。それで生徒は瓶の形や箱の色をただだけでスグ忘れて仕舞って、授業後に更に詳しく手にとって見ようなどと云ふものは殆ど一人も無い。」というわけで、実物利用の教授が必要なことを述べている。

第3は、地理教授に実習を取り入れなければならないという主張である。「趣味を養う上にも記憶を確かにする上にも、創作とか発見とかの能力を養う上にも実習は最も必要であり有効とせられている。けれども、砂模型を作らせたり、測図をやらせたり、統計表を作らせたり、調査研究させたり、乃至は各種の観測測定などをやらせて居る教師は殆どいない。……」と実習中心の教授を強調している。

第4は、郷土地理による教授の不徹底であることである。郷土地理は地理の基本概念を養ふに必要なばかりでなく、また地理科の応用練習という方面からも極めて必要である。「中等学校の教師は、それは尋常五年生でやる仕事だとのみ考へている人が多い。随って遠い欧米や南極の地理は教へても、自分の郷土を知らぬと云う生徒ばかり出来る。……地理の野外実習など云ふことは全く思ひ及んでも居ないらしい。……」

第5は、自学自習による地理教授である。「地理の如き学科は智的に偏

して居るから、教科書と地図さえあれば或程度迄は生徒自身の学習ができる。然るに多くの地理教授は講演式である。読解式である。教科書の不完全ということもあるが、アレでは夏向は眠いのも無理はない。」と述べ、地理教授の講演式や読解式からの脱皮が必要なことを述べられている。

第6は、時事問題を地理教授に取り入れることである。「日常の出来事の地理的条件を誤りなく迅速に思ひ浮べしめることは地理教授の目的の主要な一面である。」と捉えて、「西園寺氏がマルセーユに上陸したとか……という事件が発生すれば、スグに其マルセーユの位置や方角や距離や気候や其他の地的条件が思い浮ばなければ地理を学んだ効果はない。」「であるからかかる時事問題は地理教授には見逃すべからざる好機会である。けれども之に就て何等の研究をした人のあるのを聞かぬ。」と時事問題を教授にとり入れる重要性を指摘している。

その他、「参考書や辞書の使用に關すること、優等生の取扱や劣等生の救済法など」が革新を要する事項であるが、何一つとして考察されていない。

「一体何学科に限らず、教授の方法は慥かに中等学校は一世紀ほど後れて居る。真に方法なるものが不必要であるならば兎も角、そうでない以上之は決して中等学校の名譽でないと思ふ。」と述べて、是非とも大革新を必要とするのだと中等学校における教授法の研究を強く主張している。

## (2) 地理教授法の変遷

戦前の地理教授法の変遷を、大正8（1919）年に書いた浮羽高等女学校『我が校の地理教育』、昭和2（1927）年に出版した『具体化せる小学校地理教材と教授法』シリーズ、昭和8（1932）年に出版した『地理教育の諸問題』を資料として考察する。

『我が校の地理教育』においては、地理教授法の根本として、次の5つにまとめている（p. 4～5）。

「①地図基本主義……地図の觀念を最も適確深刻に徹底せしめ、凡ての地

### Ⅲ 地理教育に関する研究

的智識を此觀念の上に築かんとす。

②実習本位主義……成るべく多く実習を課し、以て確實なる智識を得しめんことを期す。

③郷土中心主義……郷土の知識を基本として世界を授け、其得たる知識を更に郷土に適用応用せしめ其實行を企画せしめて根柢ある愛國心を養はんとす。

④自学自修主義……他人に依頼することなく自ら知識を得るの習慣を養ひ、卒業の後も日新的地的知識をよく自ら攝取するを得しめんとす。

⑤個性尊重主義……本校の生徒は優劣の差甚しく個性の相違著しきを以て、成るべく一斉教授を避け劣等生の救済と優秀生の教育とに特に力を注がんとす。」

一般教授の方法としては次のような3段階による手順が以下のように示している (p. 21~22。)

「イ 豫習……先づ教科書を読みて其意義を了解せしめ、之をノートの上に表記せしむ、然る後其読解したることを地図に対照せしめ、ノートの地図に記入せしめて以て時間的觀念と空間的觀念に翻訳せしむ。

地勢の如き教材に於ては地図を読むことを先にし、描図の練習をなしたる上之を教科書の文章によって確認せしめ、然る後其要点を表記せしむるの順序をとる事あり。

優等生には補充問題を与へて深く研究せしめ、或は自ら問題を発見せしめ参考書を与へて之が解決を指導す。

ロ 精習……豫習したる事項を発表せしめて其觀念を確實にし、問題を与へて一層深究せしめ、又は教師より具体化的補説を行ひ写真類の觀察標本類の鑑識其他各種の実習を課して益々智識を確實ならしむ。

ハ 復習……単に前時の教材とか其日の教材に関係あるものとか云ふ如き狹義に解せず。広く各般の教材に亘りて復習す。即ち或は時事問題に関連し、或は偶発事項を捉へ、時として実習と混じ又精習豫習の中間に於て行ふことあり、而して常に地図を中心として行ふこと勿論なりとす。」



一般の教授方法においては、予習段階は、教科書も使用するが地図を基本において空間観念を把握させており、個性尊重の配慮がうかがえる。精習段階では、教師の指導性を強調するとともに実習によって知識を確かなものにする配慮がしてあり、復習段階においては、教材を発展させて多角的な学習法をとることを考えている。

次に教材一単位についての教授をする場合の3段階を以下のように述べている。(p. 23~24)。

「① 初の段 (凡5分乃至10分)

基本数量の復習

時事問題偶発事項等に関連する復習

其日の教材に特に関係ある事項の復習

一般既習事項の復習及図上実習

② 中の段 (凡二十分乃至三十分)

其日の教材 (前時に予習せるもの) の事項発表

教科書以外の事項の研究発表

教材の具体化的補説

一斉の各種の実習

特に問題を与へて考察せしむこと

③ 終の段 (凡十分乃至二十分)

次の教材の豫習

此間に分団して各団毎に標本鑑識・写真観察・模型実習等を行ふ。

優等生に対して特に問題を与へ又は問題を発見せしめての研究を指導い劣等生の輔導を行ふ。」

ここで注目することは「教材単位」なる術語が使用されていることである。教材単位とは「その教授段階の適用せられる一つの纏った事項を教授方法の単位、或は教材の単位」としている。「教材の一単位は之を2時間に亘りて取扱ふ。即ち前時に於て予習せしものを次の時間に精習せしむるが如し。之れ記憶を確実ならしむるに適すと云ふ心理学的根據と、予習作

### Ⅲ 地理教育に関する研究

業には遅速不同多くして一斉に切り上ぐることは能はざるが故に之に対して個別取扱の余地を存すといふ教授上の便宜によるものなり。故に一時間の教授作業は大要左の教順による」と説明している。一時間の教授の順序は戦後の指導順序である導入・展開・終結に対比できる。

『具体化せる小学地理教材と教授法』の巻末には教授法に関する私見が添えてある。これは「福岡県において視学教員として小学校の地理教授を見て廻って、教材の研究の不徹底なことゝ、教授法が技巧に走る傾向があつて、児童に底力を与えることに不充分であることに気付いた。そこで、已に多くの人に云い盡されたことのみであるが、要点のみを書いて、新に教育に従事せんとする方に参考になる」(p. 191~195) と思って書いたものである。要点は以下の通りである。

「①地図中心主義……教科書を中心として、それに附属する附図を用いるという考えを根本から打破して地図が本体であつて教科書はその附属物というように考へさせたい。「小学地理附図」といふ名称からしていけない。地図を読むこと、地図を描くこと、この二つが教授の中心でなくてはならぬ。従つて地図とノートが最も大切な学習用具である。

②推究的創造的学習……説明—理解—記憶というような教授の形式は二昔も前のこと、今ごろは疑問—研究—発表といふような順序でやるようになった。すべてが推究的であり、又児童の頭から言へば創造的でなくてはならぬ。与えられた問題又は自ら作つた疑問に発して、自ら研究しようという動機を起こし、材料を蒐集し、これを整理して自分の力相應の解決を求める。それを発表させて他の児童と討議研究せしめ、教師の補助によって正しい解決に進み、更に一層高い疑問に導くというふうの教授法でなくてはならぬ。

他から命ぜられなくとも、殊更教師から興味の喚起なんかしなくとも、児童自ら研究しようとする心が不断に起こるようにしなくてはならぬ。

③実験実習……内に訴えての学習は効果が多くて永続的である。百の説明よりも一つの実験のほうが効果がある。実地に見聞し、実際に体験した

知識は、確実であって底力がある。読図も一つの実習である。描図ももとよりよく、測量もよい、統計も自ら種を取り集計し、製表してこそ効果が多い。

④郷土中心主義……郷土は世界地理の縮図である。先づ郷土から確実に出発しないと、あらゆる地理教材が架空のものとなり易い。必ず比較の対象を郷土に求め、終始一貫郷土に立脚して行かねばならぬ。郷土は地理学の練習場である。あらゆる地理学の理法はことごとく郷土に適用することができる。又そうしなければならぬ。そうしてこそ始めて郷土地理が生きてくる。あらゆる場合に郷土に帰着し、こゝに郷土に対する正しき批判を得るに至って、真の愛郷心なるものは生れ、真の愛国心なるものは培われるのである。郷土から出発するものはあっても郷土に帰着することを忘れるものが多い。

⑤能力陶冶主義……多くの教材を羅列し、むやみにこれを詰め込んだとて結局生きた字引きにすぎない。ことに変動の甚しい教材である今日の知識が明日の役に立たぬこともあり得る。ここにおいてか所謂地的能力の陶冶を高調せねばならなくなる。いかに事実が変化しても直ちにこれを知り得る能力、いかなる新事実に対面しても、正確に判断し、適切に順応して行く能力、それが地理教育の狙い所でなくてはならぬ。極端に言へば教材はすべて方便である。材料である。手段である。能力陶冶の目標を忘れて方便にのみ堕してはならぬ。

⑥模式的教材……ここに於いてか模式的の教材に主力を注ぐ必要が起こる。すべての教材について真に徹底させることは時間が許さぬから、せめては模式的の教材に主力を注ぎほんとうに心ゆくばかり徹底させることを考える。そうすれば、他の類似教材はあまり力を入れなくてもよい。ある頁には数時間、ある時間には数頁、その教材をいかに都合し塩梅して行くかと言うところに、教授者の手腕も要すれば又興味も湧くわけである。模式的教材としては一案が提示してある。』(表Ⅲ-2)

これはフェアグリーブ (J. Fairgrieve) の提唱したサンプルスタディに

### Ⅲ 地理教育に関する研究

表Ⅲ－２ 模式教材案（尋６用）

都 市	交 通	産 業	政治	住 民	気 候	地 勢	要 項
放井射形街	河城運橋築陸 交通都市河	商工鑛水 業業業産	牧地氣候と農業 畜業業	國 境	永漁カ季 久民ラフ節 的移ト的移 移動ト動	多無少氣 雨雨雨 地地地温	海龍 水灌交 山 岸 力漚通 河河河
札幌市		原料と工業	人爲國境				樺北海 道
	式仁川の 築港開門	定期市	臺灣の農業			通海岸線と交	朝鮮 臺灣
大連市	網日本の鐵道	海流と水産				利用 日本の河の	日關東 本總説 州
北 京 ルシ ンガ ボ ー		撫順炭坑			草凍 原の 生活	揚子江	ア ジ ヤ 洲
ハン ブル グ	開閉橋 ロンドンの				サハラ沙漠	スイスの山 水美 ナイル川	ア フリ カ
	パナマ運河	大農法				ナイヤガラ	北 ア メ リ カ
		リオストラ リヤの牧羊		移民 ブラジルの	密林 アマゾンの		大南 ア メ リ カ 洲

あたると言つてよい。

『地理教育の諸問題』においては、教授法として次の7点をあげている。

(1) 発見的取扱……「生徒・児童の発見欲の心理を利用する発見的取扱いは、面白くもあり且つ効果が大きい。発見の順序としては次のようである。

(p. 88)。

- |             |       |
|-------------|-------|
| ① 存在の発見——認識 | 読図・読文 |
| ② 特質の発見——比較 |       |
| ③ 関係の発見——考察 | 暗示・指導 |
| ④ 利用の発見——反省 |       |

(2) 地理区による取扱……「項目式で記述してある教科書を用いて、地理区による教授を試みようとするのは困難である。適当なプリントを与えるか、または単に地図によって教授を進めなくてはならない。小学校では、最初に地図を開かせ教授する地理区の範囲を知らせる。範囲がきまったら区域内の読図を徹底させる。これを補足する様な適当な掛図があれば提示して、出来るだけその<sup>●●</sup>景観を明らかにするにつとめる。その間に標本を示したり、絵はがきを示したり、又教科書中の挿絵なども取扱ふ。

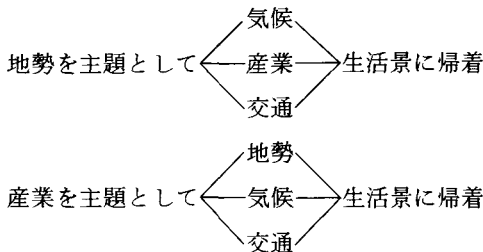
教科書の本文に出ていることは児童が発見し得れば発見させるもよく、頁數位は指示してもよく、又文章がむずかしくて解釈が困難と思はれることがあったら、教師の方から指示してその文章の意義を明らかにする。」

かうしてその地の景観を把握せしめると同時に、絶えず既習の他地方及び郷土との比較を試みてその地の特徴を明らかにし、且これを郷土に応用するという様に仕向けてゐる。

(3)項目式による取扱……項目式取扱については次のように説明している。

「現行の教科書によってそのままの順序に教授して行くとすれば、常に<sup>●●</sup>総合的にやって行くことを忘れてはならない。地勢は地勢、産業は産業といふ様に、分析にばかり流れては各要素の相関といふことは等閑になり勝ちであり、渾一的な調和景観をつかませることは徹底出来ない。

実は教科書もその点には充分注意して書かれてゐる。地人渾一の生活景というものを色々の視角から眺めるということにしなければならない(p. 96)。すなわち



のように主題となるものは色々変つても、目ざす目標は常にその地の<sup>●●</sup>総合

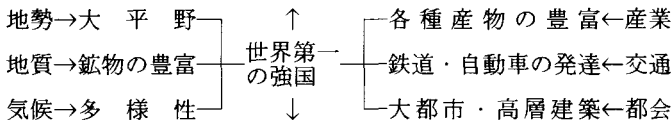
### Ⅲ 地理教育に関する研究

的調和景觀即ち生活景なのである。主題とする項目は、各地域には夫々その地域の特性があるから特性に即した取扱いをしようとするならば一定すべきではなく、郷土との関係、児童・生徒の既有知識との関係からも若干の考慮を払ふ必要がある様に思ふ。

項目の順序はどう取扱うにしてもその地域の景観の特徴を捉へて、これを中心に教授を進めるということが必要である。凡ての要素を生活景に帰一すると云っても、その生活景の特質・中心といふものが定まらないでは結局纏りのつかない雑駁な知識となって、印象も浅く忘れ易いものとなり終るであらう (p. 99)。

中等学校でアメリカ合衆国を教材とする場合には、この国があらゆる点に於て世界一を誇る強国であるといふ事実を中心として、その由来原因、その結果として諸現象等を次のように統合すると面白い (p. 101)。

#### 国際的横暴性



#### 実利金権主義

(4) 模式教材による教授……「地域現象には多くの類型といふものがある。これを類型則という。模式的材料を徹底的にやれば、他はあっさりと簡単に片付けて置いてよい。理科において模式的なものをもって来て教へる様に仕組まれてゐる。……夫々最も適当した代表的なものによって一般原理を授けるやうになってゐる。学科の性質が必ずしも同一ではないが、地理科に於ても大体これと同じ様な仕組にしたらよいと思ふ。このためには代表的教材を定める必要がある。」

(5) 地図中心主義……「世界各地を実物で見せるわけには行かないから、その代りに地図があるので、児童各々が自分の地図を真にわがものにするならば、それが最も進んだ教授法である云つてよい (p. 108)。

現行の教科地図は不完全不十分なものである。したがって読図のみによ

って教授を進めやうと思へば、勢ひ特殊の掛図を必要とするが、それも売品となつてゐる適当なものが無いから悉く教師が作成する外は無い (p. 110)。

読図力の養成といふことは地理教育に於ける最も重要な仕事の一つである。充分に力を得しめやうと思へば、どうしても反覆練習が必要である。或程度までは地図の暗記といふことも必要である。常識としても人口十萬以上の都会位はその位置を暗記せしめることが小学校で要求して至当と思ふ。地名さがし遊戯、図上旅行競争、図上すごろく、目をつむって指先で図形を辿る遊戯など工夫すると色々おもしろい (p. 111)。

読図といふことを真に徹底させることができれば地図の翻訳といふことができるはずである。翻訳とは地図を文章に、若くは文章を地図に訳すことである。地図の翻訳ができなければ読図が徹底したとは云はれまい。」

(6) 実習による教授……「実習といふことが必ずしも地理教授の大部分を占むべきではないが、ただし色々な理由から実習の必要であることは否めない。ただあまりに実習を重んじ過ぎて児童に過重な負擔を課したり、又地理科の目的からあまりかけ離れて、全くの手工教授の様になったりしてはならぬ。地理的知識を確実に豊富にし、地理的趣味を養ひ地理的眼光を修練するといふことに、真に效果的であることを第一の必要條件とする。

実習事項は澤山あり、なかでも踏査と調査は重要なものの一つで、その効果も多く期待される所である (p. 124)。

郷土調査は児童の程度に應じて系統立てゝ置かねばならぬ。ただ思い付きに時々行つたのでは効果が少ない (p. 128)。」として尋4から高等科までの間に一通り材料を配列した表がつけられている。

(7) 自学自習による教授……「自学自習といふことは凡ての教科で叫ばれたことであり、一時は学校教育の凡てが自学自習でなくては夜も明けないほど強調された。地理科にあつてもただ教壇上から叱咤して児童生徒をして途方に暮れしめた時代もある (p. 132)。

自学自習は『地理的能力の養成』を目標としてゐる。『地理的能力』と

### Ⅲ 地理教育に関する研究

は、『地理的事象を正しく認識し、且つこれに対して妥当な判断を下し得る能力』ということである。言いかえると『地的景観を理解する眼識』である。『児童をして自らの力によって、誰からも援助や忠言を受けることなく、独力でよく世界を見得るところの眼識を養っておくことが、彼等の将来のために最善の策であると云はねばならない。而してかかる眼識の養成は自学自習によるのが最も賢明な方法である。

自学自習には適当な資料を豊富に与へねばならないが、教科書と附図だけでやれというのはあまりに無理な要求である。わが国の教科書は一体に難解で無意味で、成るべく自習に都合のわるい様に出来ているといつてよい。小学校・中学校の教科書とも、極めて巧妙なる文章で簡潔に要点のみが書いてある。骨組だけで肉もなければ血も通ってない。挿絵があってもろくろく説明がしてあるでなし、術語なんかも書き放しであるから調べようがない。面白くてたまらぬ様な教科書は出来ないものか。」

「外国の教科書には中々面白い記述法によったものが多い。一例をあげると Fairgrieve, J. and Young, E.: Human Geography The World, や, Carpenter's New Geographical Reader などがある。地理大系や地理風俗大系などには夥しい写真がある。これも子供に読める様な文章で面白く解説してあったらと思ふ。旅行記の様なものも児童にわかる様に書いたものだったら非常によい。拙著『少年少女世界地理文庫』12冊、『趣味の地理学習旅行文庫』10冊の如きはこの目的で書いたものである。」

「自学教授の要領としては、まず景観をつかませること、ありのままの状態を正しく認識させることを主眼とし、あらゆる材料を適当に整理塩梅して与へねばならない。景観を把握せしめた上はこれに考察を加えなければならぬ。それには2つの考へ方がある。1つは或人文現象を捉えてそれは『何故』かと考へることであり、1つは或環境に着眼して『そのため何かが』あるかを考へさせるのである。前者は結果から原因へ遡るのであり、後者は原因から結果に及んで行くのである (p. 136~137)。自学によって児童に発見せしめようとする場合には、後者のような結果研究の問題



表Ⅲ－３ 西亀正夫の教授法の変遷

大正 8 (1919) 年 我が校の地理教育 (教授法の根本主義)	昭和 2 (1927) 年 具体化せる小学地理教材と教授法 (地理科教授法私見)	昭和 8 (1933) 年 地理教育の諸問題 (教法的方面)
地図基本主義	地図中心主義	発見的取扱
実習本位主義	推究的創造的学習	地理区による取扱 (景觀区)
郷土中心主義	実験実習	項目式による取扱 (総合的調和景觀)
自学自習主義	郷土中心主義	模式教材による教授
個性尊重主義	能力陶冶主義	地図中心主義
	模式的教材	実習による教授
		自学自習による教授
		郷土中心教授

を与へるやうにしなければならない。前者の場合は児童の考へつた原因なるものには誤りと思はれる様なことがあつてもこれを軽々しく否定することは危険である。」

以上西亀正夫の主要著作によつて、地理教授に関する考えをの変化を考察した。大正 8 (1919) 年、昭和 2 (1927) 年、昭和 8 (1933) 年の著作によつて、地理教授の変遷をまとめると表Ⅲ－3 のようになる。

大正中期 (1919) ごろにおける地理教授は、地図を基本においた教授、実習を強調した教授、郷土を重視した教授、自学自習により自ら学ぶ能力を育てる教授、個性を考慮した教授であつた。

昭和初め (1927) ごろになると、疑問－研究－発表という、問題解決学習に近い教授法が加わり、模式的教材による教授すなわち戦後いわれてゐるサンプルスタディとか範例学習に近い学習法を取り入れている。

### III 地理教育に関する研究

約5年後の1933年には、推究的創造的学習を發展させた発見学習がみられる。認識→比較→考察→反省という学習の過程をとるものであるが、ブルナーの提唱した結論を教えるのではなく結論にいたる過程をたどらせるのがポイントであり、生徒の失敗や試行錯誤を許容し、これを克服することによって、真の発見の喜びを享受することをねらった発見学習に近いものである。

つぎに地理区による教授ということが、地理学の思想の發展を背景として登場してくる。「地理区を定めて、それによって教授を進めたい」ということは、大正10（1921）年に全国中等学校地理歴史教員協議会において決議されたが、まだ地理区という考えが充分に行きわたっておらず、たいして反響がなかった。それが、昭和のはじめ田中啓爾による「日本の地理区」などの論文などが契機となり、昭和7（1932）年の全国中等学校地理歴史教員協議会においては、地理区による教科書の出現を要望するところまできていた。

地理区による教授とは、地理区の<sup>●●</sup>景観を把握せめる、郷土および他地方との比較により特色を明らかにし、さらに郷土への応用という、認識→比較→応用という過程が考慮されている。

さらに、項目式による取扱いというのは地勢・産業・交通などの項目を総合的に取扱って、地人渾一の生活景（総合的調和景）をつかませるところにあるとしており、景観地理の学風を反映している。

以上より西亀正夫の地理教授についての考え方は、次のようにまとめることができよう。

地誌的内容の教授にあたっては、①地理区を設定する、地理区は自然人文すべてを総合し、あらゆる地的要素の渾一した調和景観による、すなわち景観区であることがのぞましい。②この地理区について項目を総合的に取扱い、生活景をだすようにする。とくに地域の景観の特徴をとらえて、この項目を中心に教授を進める。③模式的な地域・材料を選んで掘りさげた指導をする。そのためには模式的教材の類型化と系統化を行っておく必

要がある。④一つの単位については、存在の事実の発見から出発して、比較研究により他の地域と相違した特色なるものを見出させ、興味をもたせ原因を探究しようという気を起こさせる。さらに事実と事実がいかに相関係してそのために他の地域と異なる特異性が形成されているかを考察させる。この際には教師が暗示や示唆を与え、指導誘掖<sup>ゆうえき</sup>して行かなければならない。この得た知識を以て自己の生活を反省させる。

さらに地理科の価値を、「地理学が人類生態学であるような考えが生まれるに致ったことから、この論にたてば地理学は人間の生活を研究する学問であるから、地理学を教科として授けることは、生活指導の上に最も重大なる意義を有することになる」として地理科が生活指導に大きな役割を持つものと位置づけ、次のように理論づけている。「教科としての地理科は、先ず自己の環境を正しく認識せしめ、これに対する順応の様式を反省させ、翻って世界各地に於けるあらゆる種類の環境と、これに順応して如何なる生活様式が生み出されているかを明らかにし、これを参考資料として自己の環境と生活とを見直さしめ、そこに順応様式の改善を企図せしめねばならぬ。」(p. 40)として、家の地理、郷土地理、日本地理、世界地理、国勢地理の関係を次のようにまとめている。

- |       |   |                                     |
|-------|---|-------------------------------------|
| 認識の過程 | { | 1. 自己の環境及び生活様式の認識（基礎的郷土地理）          |
|       |   | 2. 他郷に於ける環境と生活様式の認識<br>（日本地理及び世界地理） |
|       |   | 3. 自己の環境と生活の再認識（応用的郷土地理）            |
| 指導の体系 | { | 1. 個人としての生活指導（家の地理＝家憲）              |
|       |   | 2. 郷土人としての生活指導（郷土地理＝郷土是）            |
|       |   | 3. 国民としての生活指導（国勢地理＝国是）              |

そして「生活指導は地理科の全生命であると云ってよい様に思ふ」(p. 40)と結び、地理教育が生活指導に大きな役割をはたすことによって教育なかでも重要なものと位置づけている。この考えは昭和10（1935～45）年代の一教育思潮を反映したものであった。

### Ⅲ 地理教育に関する研究

## 3. 教材としての地誌および辞典

### (1) 地誌に関する著述と研究

地誌に関する著述や報告も多く、主要なものを年代順にみると下記のようになる。

- ① 広島県地理，広島広文館（昭和7年1月25日）
- ② 満州国中心支那地理，厚生閣（昭和7年7月18日）
- ③ 景観区分世界経済地誌北米篇，東京共立社（昭和7年7月20日）
- ④ 広島県郷土景観地誌，広島第二中学校地理教室（昭和9年2月1日）
- ⑤ 世界生活景観地誌(1)～(16)，「広島地学同好会報」（地学）への発表（昭和10年4月から～昭和18年1月まで）
- ⑥ 広島郷土地誌（ガリ版），広島第二中学校地理教室（昭和11年）
- ⑦ 広島郷土地誌，広島地学同好会（昭和13年）
- ⑧ 友邦満州国（未刊），（昭和15年4月脱稿，昭和16年2月9日校了）
- ⑨ 広島県地誌，東京恒春閣（昭和17年4月5日，昭和18年6月10日改版）

これらを大きく3分類すると，第1は広島県に関する地誌であり，①，④，⑥，⑦，⑨，第2は満州国に関するもの（②，⑧），第3は景観を重視したもの（③，⑤）である。

この外に浮羽高等女学校のあった吉井町について，未刊の「郷土誌稿」がある。

### (i) 広島県に関する地誌

#### ① 『広島県地理』

広島県教育会編『広島県地理』が昭和7（1932）年1月25日に広文館（広島市堀川町）から，本文74頁，定価17銭で刊行されている。広島県教育会編となっているが，執筆は西亀正夫であることは残された書籍のなかに訂正原本が存在することから断言できる。

『広島県地理』の「編纂の趣旨」に、「本書は、次代の日本を背負って立つべき重責ある小国民に、正しく郷土を理會せしめんとして編纂したものである。故にその記述は極めて平易淡々たる中にも、自然環境と民族生活との微妙なる交替作用を織り込み、地人相関の地域的特殊性を逃さぬ様に努力した積りである。」とあり、本書の大きな目的が読みとれる。

「取扱上の注意」において、本書の位置づけを、「狭い意味の郷土地理と日本地理の中間に立って両者の連絡を円滑にすることを第一目標に、日

表Ⅲ－４ 「広島県地理」と「広島県郷土景観地誌」との内容構成

広島県地理 (広文館蔵版) 昭和7年1月25日	広島県郷土景観地誌 (広島第二中学校地理教室) 昭和9年2月1日
目 次	目 次
一 広島県 附地理のしらべ方	総 説
二 各地方の地理	一 線状景観
1 区分け	二 凸凹景観
2 広島湾岸地方	三 開拓景観
3 芸北山地	四 居住景観
4 三次盆地	まとめ
5 備北山地	一 位置
6 中部高台	二 地勢
7 備南低地	三 気候
8 芸備沿海地方	四 産業
9 芸予海峡諸島	五 交通
10 広島湾内諸島	六 住民
三 広島県総説	各 説
1 土地の形	一 広島湾岸地方
2 気候	二 芸北山地
3 産業	三 三次盆地
4 交通	四 備北山地
5 住民	五 中部高台
(附録) 各郡の地理	六 備南低地
16郡について記述	七 芸備沿海地方
	八 芸予海峡諸島
	九 広島湾内諸島

### Ⅲ 地理教育に関する研究

本地理・外国地理を学習した後の補習用とすることを第二目標とした。」として広島県内地理を地理教育の中での位置づけている。

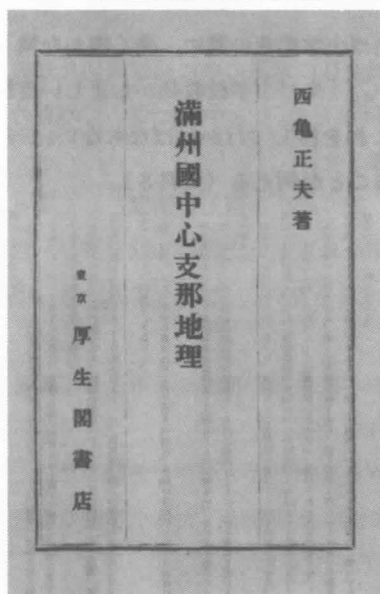
取扱いの順序としては、小学校において使用する場合と補習学校・青年訓練所等の教科書として使用する場合とに分けてある。平易に書き、振り仮名をつけ、尋常第4・5学年の児童で読めるようにしてある。本書の内容構成を他書との比較でみると表Ⅲ-4のとおりである。

最初の章は「広島県<sup>つけだし</sup>附 地理のしらべ方」になっており、地理を調べるには、地図を使用しなければならない。方位、縮尺のあること、面積、人口、気候、産業、交通の概要をあげてある。

第二章で「各地方の地理」として9つに地域区分し、各地方について説明している。

#### (ii) 満州国に関する地誌

#### ② 『満州国中心支那地理』



図Ⅲ-2 「満州国中心支那地理」の扉  
(菊判)

厚生閣書店より昭和7(1932)年7月18日に発行された、定価3円40銭、本文352頁菊判の大著である(図Ⅲ-2)。

この著書は、下のような構成になっている。

中扉	1頁
自序	3頁
目次	13頁
挿絵図版目次	2頁
本文	352頁
広告	3頁

自序によると、「将来の日本は満蒙を忘れ支那を度外視して進むことは出来ない。わが生命線はア

表Ⅲ－５ 「満州中心支那地理」の目次とページ数

諸論 支那とは何ぞや 3 p	中篇 中国 56 p
前篇 満洲国 274 p	第1章 国情概観
第1章 建国事情	第2章 自然地理
第2章 日本との関係	第3章 人類地理
第3章 国情概説	第4章 地人相関景
第4章 地勢及び地体構造	後篇 辺境及外領 12 p
第5章 気候	第1章 外蒙古
第6章 住民	第2章 新疆及び青海
第7章 生活及び風習	第3章 西藏
第8章 資源	第4章 外領
第9章 商工業	附録 3 p
第10章 交通	満洲旅行の栞
第11章 政治外交	地図 4 p
第12章 景観区分	
第13章 都邑及名勝	

ジア大陸の一角にある……」など、昭和6（1931）年の満州事変、満洲国の建国の動き、日本の政治・社会の情勢をふまえての執筆であることは明らかである。

「満蒙問題・支那問題は、普ねく国民全体の常識の中に明瞭適切な知識となり対策となって織り込まれなくてはならぬ。」と中国についての真の理解をしないと真の日本の発展が望めぬこと。

このためには「先づ小学児童の頭に、強く確かな精しい知識として養って行かねばならない。」「先づ小学校教師から正しい支那の知識を養ひ、然る後第二の国民にこれに移して行かねばならない。」という認識に立って書いたものであることが窺える。

「凡例」に、1「本書は主として小中学校教師の教授参考用として編纂したものである。」とあり、対象を明確にしている。

2「正しい学術的根拠に立って詐らざる真相を伝へんことを期した。」

3「各章節の始めに要説として太字で記した部分は、大体小学校の教科書としてよい程度の内容を盛った。」として工夫してある。

4「写真を大きくして、教壇の周囲に児童を集めて見せることを考えた。」

本文の内容構成でみると表Ⅲ－５のようである。ページ数からわかるよ

### Ⅲ 地理教育に関する研究

#### 資料Ⅲ—1 「満州中心支那地理」の内容

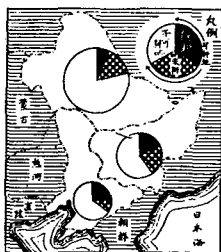
##### 第八章 資源

##### 第一節 農耕資源

要説 廣い平野には漢人の移住以來農業が大に開けて來た。土地がよく肥えてゐるので肥料もあまり施す必要が無いほどであり、氣候が大陸的であるから北部と南部と異なる高温を利用して耕作することが出来る。實に現在に於ける住民の主要は農業で、而も可耕地面積の約半分が耕されてゐるに過ぎないから、將來も亦最も有望なものは農業である。

農産物の中主位を占めるものは大豆で、これに次ぐものは小麦・高粱・玉蜀黍・粟等であり、近年は米及び甜菜の産も少くない。大豆は實に滿洲第一の富源で、滿洲は大豆の國とまで稱せられる。その大部はそのまゝ輸出せられるが、搾つて豆粕及び豆粕を製造することも盛である。小麦は北方を主産地とし、これを原料とする製粉業は夙にハルビンに起り、その他の各地にも盛行はれてゐる。

高粱と粟と玉蜀黍とは住民の主食物であり、又製酒の原料にも供せられる。米は主として朝鮮族によつて栽培し始められたが、今では漢族もこれに従事するものが少くない。その他尙煙草・麻なども栽培されるし、果樹の如きも頗る有望で日本人の經營に最も適したものと考へられてゐる。



耕地 可耕地の全面積が何程あるかは正確にわからないが、大體の見解によると三十二萬七千方軒で、その中現に耕作されてゐるものが十四萬八千方軒、未墾地が尙十七萬九千方軒も残つてゐるのである。これをわが國に比較して見ると、内地全體の田畑面積は約五萬八千方軒に過ぎないから、滿洲の未墾地のみでもわが全耕地の三倍以上となるわけである。勿論氣候良好で一年に二毛作三毛作の出

うに滿州国を中心に置いて書いてある。(資料Ⅲ—1)。

多くの地図・挿絵が挿入されており、その数は108枚である。平均3頁に一図の割合で入れてある。

文部省が小学地理書に一大改訂を加えた際に「世界の大勢と日本」なる新項目を加えて「我生命線滿州国」に関する事項を加えることを要求した。この要求を満たすための書籍である。キワモノ的滿州案内を一蹴し苦心調査の教授参考書である。

#### (Ⅳ) 景観を重視した地誌

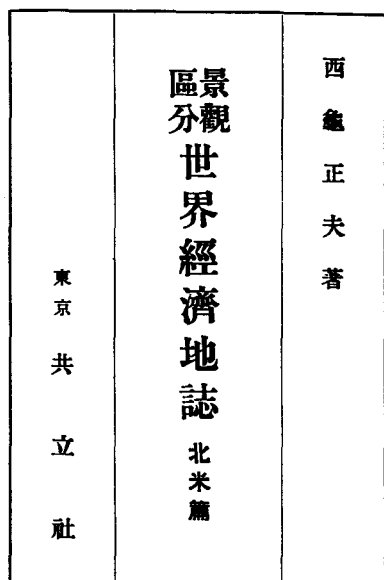
##### ③ 『景観区分世界經濟地誌 北米篇』

前述『滿州国中心支那地理』とほぼ同じ時期に、昭和7(1932)年7月20日、東京共立社より『景観区分世界經濟地誌—北米篇』菊判286頁、定価2円70銭の大著が出版されている(図Ⅲ—3参照)。

「凡例」に示してあるように

1. 文検受験者及び一般地理教育者を対象にして書かれたものである。





図Ⅲ－3 「景観区分世界経済地誌 北米篇」の扉（菊判）

2. 現在の地理学は人文現象の研究に重点が移り、とくに経済現象が研究対象になってきた。このことを考慮して執筆したものである。
3. 本書は「大陸の総論として位置・地形・地質・気候・植物などの環境から、経済段階及び経済形態の地域的分布を明らかにし、更に各国をその経済景観区に分ち、各地域に就いて環境と経済状態とを詳述した。書名に景観区分と冠したのはそのためである。」とあるように、経済景観区に分けて環境と経済状態を詳述したものである。

その他に「地図と挿絵を多くし、大きく鮮明にした。地図には本文にある地名のみをいれて検索しやすくした。主要な術語は巻末に註釈を加へた」などの工夫をしている。

この著作について「他の大陸についても執筆する予定であった。」が出版されていない。

この著書の内容構成をみるため、目次をみると表Ⅲ－6のようである。

各国については経済景観区に分け、さらに環境、蒐集経済、培養経済（または農耕経済）、加工経済、商工都市に分けて記述してある。

記述の事例として「第二章アメリカ合衆国、第四節北部中央地方、農耕経済」をあげると資料Ⅲ－2のようである。

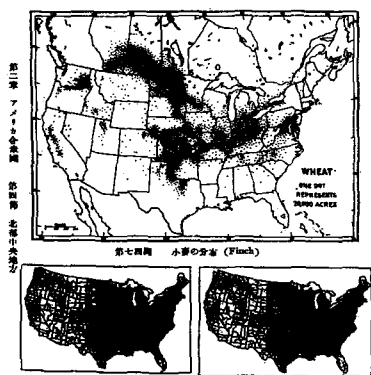
この地域が合衆国第一の農耕地帯であることを位置づけ、つぎに発達の原因として4つの要因を述べ、農作物の種類で4帯に分け、春麦帯、牧草

### III 地理教育に関する研究

表Ⅲ-6 目 次

前編 総 論	第六節 大西洋及メキシコ湾岸地方
第一章 土地	第七節 大平原
第二章 気候	第八節 ロッキー山脈
第三章 自然植物景	第九節 コロンビア高原
第四章 住民	第十節 コロラド高原
第五章 経済の段階及び形態	第十一節 大盆地地方
後編 各 論	第十二節 太平洋岸地方
第一論 カナダ・アラスカ地方(節略)	第十三節 運輸
第二章 アメリカ合衆国	第十四節 貿易
第一節 ニューイングランド	第三章 メキシコ
第二節 中央アパラチャ地方	(節略)
第三節 南アパラチャ地方	第四章 中央アメリカ・西インド地方
第四節 北部中央地方	(節略)
第五節 オザーク高地	

資料Ⅲ-2 「アメリカ合衆国第四節北部中央地方」の著述



この地方の小麦の産額は全額の約五分の三を占めてゐる。而して北ゴコタ、南ゴコタ、ミネソタ等の湖底平原に属する部分は、土壌が最も肥沃で主要なる産物

間に属する。而して冬は冬眠の状態となり、歳によつては穀物のために凍つて凍害から保護されるが、冬の寒さが強いと凶作となり、毎年十分の一内外は害になつて播き直すが常である。

農産物 本地域は合衆国第一の養蠶地帯で、殊に國民の食料及び家畜の飼料として重要な各種穀物の大供給地である。而してその養蠶の原因として幾よべき、一、地帯が低平で肥沃なる一帯の大平原であるが、大仕掛けの機械を用ひて大農法を行ふに何等の妨げがないこと、二、気候は一般に養蠶に適してゐる。北部は冬の寒さが稍厚しいけれども、無葉が大平原で夏の温度が高く、井るから、全域に小麦の生産をしない所がなく、南部は玉蜀黍の生育に適する。三、地味は一般に肥えてゐるから、極めて粗放的な養蠶を行ふに、従つて大規模にやから一人當りの收穫高が大で極めて有利に懸念することが出来るのである。而して、四、五大湖及びミシシッポ河の水運も亦大なる影響を及ぼしてゐる。

本地域は農作物の種類から見ると西帯に分れる。即ち北西部のゴタ方面は養蠶で、北東部のワイヌコンシン・ミシガン方面は牧草で、中部のアイオワ・イリノイヌ・インディアナ方面は玉蜀黍で、南部のミズーリ方面は玉蜀黍及び冬春混合地帯である。

小麦の大半は播種して夏に收穫する春播きで、冬の温度が零下七度の等温線以北に作られる。それは夏が暑くて雨の少ない地方であつて、殊に成熟期に雨が少いと穀粒に胚乳が多くなる。冬播きはこの春播きと播種との中間にあつて一帯は玉蜀黍と混合し、大體北緯四十一度線と三十二度との

帯、玉蜀黍帯、玉蜀黍及び冬麦混合帯として記述している。小麦の分布図が入れてあるが、Finch によるとあるから、参考文献にもあげてある Whitbeck and Finch: Economic Geography によったものであることが窺える。

挿絵図版も114図が挿入され、3頁に一図の割で入れてある。

④ 「世界生活景觀地誌」

表Ⅲ-7 「世界生活景觀地誌」の構成

巻 号	内 容	巻 号	内 容
(1) 第6巻第1号 P 8～13(5頁) (昭和10年4月)	一 赤道地方 地域 気候 植物景 動物及び人類 不利益な条件 住民の職業と環境 生活様相と環境 他の世界への貢献	(4) 第7巻第3号 P 89～91(3頁) (昭和11年10月)	気候 植物景 動物の生活 1 地中海型(つづき) 人類 衣食住 産業
(2) 第6巻第2号 P 84～88(4頁) (昭和10年8月)	二 熱帯地方 地域 気候 熱帯森林・信風叢林・被覆森林 自然植物 動物の生活 人類 産業 サバンナ・カンボス・リャノス 自然植物 動物の生活 人類	(5) 第7巻第4号 P 138～141(4頁) (昭和12年1月)	三 亜熱帯地方(つづき) 2 支那型 地域 気候 植物 人類
(3) 第6巻第3号 P 130～133(4頁) (昭和11年1月)	二 熱帯地方(つづき) 熱帯信風帯 自然生物 農牧業 衣食住 半乾燥草原帯 位置及び生物 農牧業 人類	(6) 第8巻第1号 P 17～20(4頁) (昭和12年4月)	2 支那型 南東合衆国、ウルグアイ、 アルゼンチン、ナタール、 南クィーンズランド、 ニューサウスウェールズ 3 大陸内部型 地域 気候 植物 動物 人類 食物 衣服及住居
(4) 第6巻第4号 P 174～176(3頁) (昭和11年3月)	熱帯地方に於ける白人 生活 職業 三 亜熱帯地方 地域 1 地中海型 地域	(7) 第8巻第3号 P 107～109(3頁) (昭和12年11月)	3 大陸内部型(つづき) 衣服及住居(つづき) 其他の職業 農業 工業 世界への影響
		(8) 第9巻第3号 P 96～98(3頁) (昭和13年11月)	四 冷帯地方 地域 気候 植物景 動物生活

### Ⅲ 地理教育に関する研究

巻 号	内 容	巻 号	内 容
(9) 第9巻第4号 P144～148(5頁) (昭和14年2月)	大陸沿岸部に於ける人類の一般活動 四 冷帯地方(つづき) 大陸沿岸部に於ける人 類の一般活動(つづき) 衣食住 要約 1 大陸西岸型 地域 気候 植物景 人類の活動	(14) 第12巻第2号 P38～40(3頁) (昭和16年9月)	五 沙漠地方 1 熱帯沙漠 地域 気候 植物 動物 人類の生活 占居
(10) 第10巻第1号 P12～14(3頁) 昭和15年5月	1 大陸西岸型(つづき) 人類の活動(つづき) 2 大陸東岸型 地域 気候 自然及び栽培食物景	(15) 第13巻第1号 P11～13(3頁) (昭和17年5月)	1 熱帯沙漠(つづき) 人類の生活 衣食住 白人の生活 2 温帯沙漠 地域 気候 植物及動物 人類
(11) 第10巻第4号 P224～227(4頁) (昭和15年2月)	2 大陸東岸型(つづき) 人類の活動	六 寒帯地方 1 タイガ(北方森林地帯) 地域 気候 植物 動物の生活	
(12) 第11巻第2号 P49～51(3頁) (昭和15年8月)	四 冷帯地方(つづき) 3 内陸長夏型 地域 気候 植物 人類の活動	(16) 第14巻第1号 P37～41(5頁) (昭和18年1月)	六 寒帯地方(つづき) 1 タイガ(つづき) 人類の活動 2 ツンドラ 位置 気候 植物 動物 人類の生活 漁猟生活(エスキモー族) 狩猟生活(ラップ族) (未完)
(13) 第11巻第4号 P121～122(2頁) (昭和16年3月)	四 冷帯地方(つづき) 4 内陸短夏型 地域 気候 植物 人類の活動		

「広島地学同好会報」第6巻第1号(昭和10《1935》年4月)から第14巻第1号(昭和18《1943》年1月)にかけて「世界生活景観地誌」(1)～(16)の連載がある(表Ⅲ－7)。

気候帯によって区分して、生活景観地誌を記述したものである。したがって気候帯は、赤道地方、熱帯地方、亜熱帯地方、冷帯地方、沙漠地方、寒帯地方に分け、さらに地域、気候、植物景、動物の生活、人類の生活景観、即ち衣食住、職業などについて述べている。高原・水面についても述べ

る予定であったが、休巻で書かれていない。

1回の執筆ページは3～5頁であるが、16回にわたるので、1頁(33字×33行=1155字)で61頁になる。ちょっとした単行本になりうるところから、単行本にすることを意識して書いたものと思われる。

## (2) 『最新物産辞典』

『最新物産辞典』(三六判約300頁)が、守屋荒美雄、小松崎三枝・西亀正夫共著によって、帝国書院から大正14(1925)年2月に発行されている。

帝国書院の創立者である守屋荒美雄とは、深いかかわりがあった。守屋氏の辞典の序によると、「予は真に著者名を汚したのみで、自らの努力は寔に少ない。……」とあり、西亀正夫(地理)・小松崎三枝(博物)の2人が実際の著者であることが窺える。

自序によると「数年前から本書の編纂を志、材料の蒐集に努力し……幾度か稿を改めて漸く成案を得、正に印刷の終了せんとしたときに昨年の大震災に遭ひ、組版も原稿も大半を焼いて仕舞った。そこで更に又稿を起し災後一年余にして漸く復興完成することを得たものである。……」とあり、関東大震災の影響を受けて出版が遅れたことが述べられている。

地理・博物・商品学の学習にあたって適当な物産辞典の無いことは、多くの人に不便であることから作ろうとされたものである。

紙数300余頁の中に、地理科、博物科の教材に出ている各種の物産を簡明に説明したものであって多数の絵画が挿入してある。小学校中学校の教材辞典、自学自習用の辞典として活用できる物産辞典としては時機を得た出版といえよう。

この辞典の準備のための資料収集と思われるものは、野帳「新式ポケット日記」の中に大正12(1923)年代後半などに見られる。

## (3) 『日本地理教材辞典』

『日本地理教材辞典』を昭和13(1938)年9月13日、厚生閣より、発行

### Ⅲ 地理教育に関する研究

した。四六判、序1頁、凡例2頁、本文393頁、難訓畫引・索引17頁、分類索引36頁、奥付1頁からなる大著である。定価は3円20銭であった。

本書は序に「地理に関する辞典の世に行はるゝもの必ずしも1・2に止らない。併し地名・物産名・術語その他の地理的用語全般に亘って収録されたものは少なく、殊にこれを教育的見地から解説したものは未だにこれを見ない。」とあり、本書の特色が窺える。

さらに「本書は小中学校教師諸君のために、教材としての日本地理の知識を提供することを目的としたもので、併せて学生・生徒のためにもよき参考書たらんことを期した。」とあり、対象者や目的が窺える。

「着手後3年となり」とあるところから3年の努力のたまものであることがわかる。

すなわち本書は、日本地理について地名・物産名・術語など地理的用語全般にわたって教育的見地から解説してあり、小中学校教師に教材として日本地理の知識を提供しようとした労作である。凡例において次のような特徴があげられている。

語彙は国定小学地理書及び数種の中等学校地理書に出ているものを採録し、範囲は日本のほか満州国をも包含した。

解説は教授上に必要な程度を目標とし、主要項目には教材観を述べ、模式的教材や主要教材については詳細に説明した。

文章は中等学校生徒にも理解できる程度に平易簡明を旨とした。語辞は発音仮名遣いによる50音順に排列した。発音が同じでも漢字の異なるものは別項とした。同語で別個の事項となる時は①②で区別した。人口は昭和10年の国勢調査による。符号による説明がなされている。

本文は、アイ（藍）から始めてワン（湾）で終わっている。本文の一例を示すと資料Ⅲ－3のようである。本書の地理教材辞典である特徴を示す模式教材や主要教材には教材観が付けてある。資料Ⅲ－3の事例でみると、チュウゴクサンミャク《中国山脈》は模式教材であることが示され、教材観を付けてある。また主要教材であるチュウゴクチホウ《中国地方》では

**チュウオウカコウキウ(中央火口丘)**

複式火山にあつて舊火口の中に二次的に出来た火山。フクシカザン

**チュウオウニッポン(中央日本)**

近畿地方を中心として東は關東、西は九州に至るまでの間をいふ。或は關東・中部兩地方のみを指すこともある。

**チュウオウホンセン(中央本線)**

東京・名古屋間四二軒、本州の中央部を縦走するが、東京・名古屋間の交通線としては、東海道線があるので、本線は却つて南北兩岸を運ぶ横断線たるの機能を有し、列車は名古屋・新潟間、東京・長野間等を運轉し、東京・名古屋間の直通列車は無い。途中の山脈を避けて縦谷を通過するために、W字形に屈曲してゐる。

**チュウキョウコウキウウチタイ(中京工業地帯)**

名古屋市中心として北は岐阜から南は濱松、西は四日市に至る地域は、わが國四大工業地帯の一と稱せられる。主な工業は紡織・飛行機・時計・車輛・陶磁器・麥粉等で、中でも毛織物業は全國第一位であり、綿織物・メリヤス・車輛等に於ても屈指で、全工業額は大體北九州と大差ない。

かく工業の發達したのは濃尾の大平野を控へて交通が至便であり、勞力が極めて得易いためであつて、もとは四日市港を門戸としてゐたが後に名古屋港を築いて大に便利になつた石炭は多く九州炭をとり寄せ、水力は矢作川・木曾川等のものを利用してゐる。

**チュウケイボウエキ(仲繼貿易)**

甲國から輸入して直ちに乙國へ輸出

すること、即ち取つぎの貿易、わが國はこの種の貿易高が少いが、關東州は滿洲と内地及び諸外國との間の仲繼貿易を生命としてゐる。

**チュウコウチン(中江鎮)**

朝鮮北境鴨綠江の上流に位し、日本一の寒地、附近は木材の産が多く、筏流しの起點である。●三

**チュウゴク(中國)**

京都から見て近國と遠國との中間の國の意、今は岡山縣以西を中國地方といふが、場合によつては兵庫縣をも加へる。地形に中國山脈、鐵道に中國鐵道。

**チュウゴクサンミヤク(中國山脈)**

模範教材

高原狀の山脈として、開拓もよく進み、古くから多數の人類を包容し來つた山脈で、

模式教材一覽									
山	山脈	高峻…飛驒山脈・臺灣	山脈	高原狀…阿武隈山脈・中國山脈	岳…高峻…新高山・槍岳	火山	火山脈…富士火山脈・那須火山脈	火	山…單式…富士山 複式…阿蘇山・箱根山
高	原…飛驒高原・蓋馬高臺	野…關東平野・濃尾平野	地…近江盆地・甲府盆地	河	川…利根川・鴨綠江 急流…球磨川	湖	沼…山地湖…十和田湖 平地湖…霞浦	半	島…房總半島・伊豆半島 東京灣・有明海
鐵道	道…東海道線	工業地帶	〔京濱工業地帶・阪神工業地帶〕	港	港…開門式…三池	綜合都市	市…東京・大阪	工業都市	市…八幡・興南
軍港	町…橫須賀	軍都	市…廣島	舊蹟市	市…奈良	遊覽都市	市…日光	保養都市	市…別府
門前町	町…琴平	鎮山町	町…日立	交通都市	市…下關	漁港	港…銚子	方形街	街…札幌
放射街	街…大連	城廓市	市…京城						

教材觀のあとに「地理区」ものせている。地理区による教材を考慮していると言えよう。最後には「要約」が付けてある。

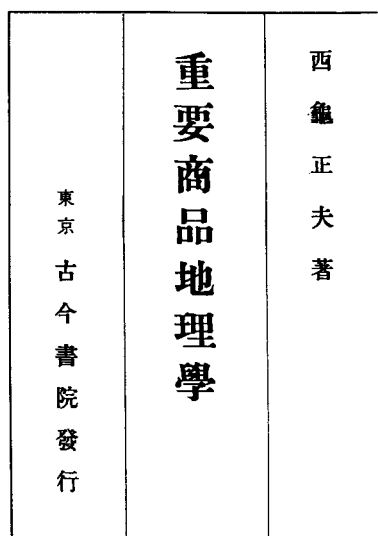
末尾には模式教材一覽が付けてある（資料Ⅲ—4）。

付録として付けた「難訓畫引索引」についてみると、一画の乙密台（オツミツダイ）からはじまり、二十三畫以上の鬱陵島（ウツリョウトウ）で終っている。分類索引は、術語、国名、行政区画、旧区画、地方別、地域に分けて付けてある。

#### (4)『重要商品地理学』

『重要商品地理学』は昭和14（1939）年6月22日、古今書院より発行さ





図Ⅲ－４ 「重要商品地理学」の扉

れている。菊判、序2項、目次10頁、本文440頁、本邦鉱業生産力拡充表1頁、索引13頁、計468頁定価3円80銭の大著である。(図Ⅲ－4)

本書は、序に「中等学校に於ける商品学科の教授内容は地理科の側から見れば不満の点があり、地理科に於ける物産の取扱は、勿論商品学科の方から見れば問題にならない。併し、両者は関連する所が密接であり、別々に取扱って居ればその間に多くの重複もあるわけであるから、何とかこれを統一したらという議論は久しいもので

あるが、中々名案も浮かばないし、実行されている学校も少ない。それは地理科の教師に商品学的知識の豊富を望むことが困難であり、同様に商品学の教師に地理学的知識の豊富を望むことも無理があるからである。参考書の類を見ても、商品学の方には取扱っている商品の数も少なく、且つその地理的分布とか環境との関係などということは、殆ど問題にして居ないし、地理学者のものした物産地理などの類には、種類は広汎に互っていても商品学的な記載に欠け、且又地理的意義の薄い工産物が頗る簡略になっている。」と述べてあることからわかるように、商業学校で教えている商品学科と地理学科との商品についての取扱いに問題がある。「この缺陷を補うことが極めて大切であると考えて、本書を計画した。」と本書を執筆した理由を述べている。さらに「即ち商品学と物産地理とを合一して、重要商品については商品学的内容を盛ると同時にその生産消費の地理的意義を明らかにし、一方普通の地理教科書に出るほどの物産名は悉く網羅して、

### Ⅲ 地理教育に関する研究

これに商品学的の解説を加へ、地理科の教師にも商品学科の教師にも共によき伴侶となる様にと志したのである。」と商品学と物産地理の両方に利用できることを念頭において、どちらかという地理教授に利用の中心をおいていることがわかる。

材料は世界を見渡すと同時に日本に最も重きを置いたが、日中戦争のはじまっている状況から統計は戦争前のものである、と戦争の影響を述べている。

本書の特色としては「従来のこの種の書物よりも多方面の商品を取り扱って、その歴史的、科学的、技術的、経済的及び地理的知識の概要を述べた点に於て多少の特殊性をもっているつもりである。」としている。

内容構成は、諸論にはじまって、第一篇食料品類、第二篇衣料品類、第三篇燃料及電気、第四篇機械・器具・消耗品類と五篇の構成からなる。

## 4. 郷土地理教育とのかかわり

### (1) 郷土地理教育への論考

郷土地理教育については、大正6（1917）年からの浮羽高等女学校時代に種々述べている。

郷土地理（郷土誌）を地理教授の予備となるものであり、且つ応用と位置づけて、「地理教授において郷土誌となるものが使用されている。これは地理觀念を養うといふ考へからであるが、その實際教授をみると、まず自己の町村の戸数とか人口とか、あるひは物産の額とか云ふ様なものを列挙して筆記させる。それから付近の川の長さとか山の高さとか云ふものを教へるのは余程進歩したものである。あるひは、注意深い教師が遠足などの際に山の名や川の名を指示する位のもの、山へ登るにしても地図と対照しながら谷や峰の地形と等高線の形を比較して、地図の成り立ちといふものを飲み込ませるなどといふ事は毛頭無い様である。

このような机の上での郷土誌なるもので、小学校なら4年の終りか5年

の始めに何週間か行われる。中等学校では更に一步進めて、距離とか方位とか面積とか経緯度といふやうなことが、一年生の最初の幾時間か費やされて仕舞ふ。このやうな形において与へられた基本觀念では未見の地、未踏の域に対する正当で的確な知識が授けられないであらう。

教授の予備としての郷土誌も必要であるが更に教授の応用としての郷土誌が忘れられて居るのではあるまいか、郷土から出発して全国に及び全世界に及ぶのはよいけれども、更に郷土に帰って来るということが無い。行ったぎりで帰らぬから私は之を『御浄土参り式の教授』だと云ふ。私どもの実際の教授では常に郷土に歸着することに留意する。

極端に云へば、殆んど毎時間の教授に於て郷土から出発して郷土に歸着する。さうして全学年の地理教授を通じて先ず郷土に帰着し郷土に應用せしめることを主眼として居る。『教へた地理的智識の應用練習として生徒兒童をして自ら郷土を調査研究させる』ことに郷土調査の意味を持たせる。

もう一つ愛国心の養成に郷土調査が必要かつ有効なものである。地理科の主要なる目的の一つである愛国心の養成にあることからして、我が国の美点と共に欠点、長所と共に短所をも授けなければならないし、そして更に進んでその短所を補ひ欠点を救済する方案を考へ出さなければならないが、いままでの地理教授ではそこ迄押しつめて行なつたものを見たことが無い。

この場合、全国に実行できるやうな方案は大実業家となり、大政治家となり、大学者とならないと考へられない。兒童の経験や生徒の限界では、狭い身近かな郷土を調査させてそこから改善に着手せしめやうとするのである。」と主張している。

「郷土調査を実施すると、種々郷土の短所や欠点を見出すことが出来る。それを改善することは極めて手近かなことで、中には兒童であっても直ちに実行できることさへある。かくして先づ兒童・生徒に「着手の箇所」を示す。そこに眞の愛郷心が生れ、そこに眞の愛郷心が根ざす。自己の町村に就いて改善・發展を劃策することに慣れさせて置けば、他日、それは一

### III 地理教育に関する研究

郡一県、或は日本全体へと発展が期待できる。」以上のように説明している。

さらに教授上の参考にするため、浮羽高等女学校のあった吉井町を中心に書いた「郷土誌稿」がある。大正七(1918)年四月に着手して大正九(1920)年十一月終了とあり、約2年半の歳月をかけて、福岡県立浮羽高等女学校の野紙に毛筆(後半はペン)で39枚にわたって片假名で書かれている。「郷土誌稿」の目次は表Ⅲ-8のような構成になっている。

編纂の目的の項に、「……簡単に云フト、地理教授ハ郷土ノ知識ヲ基礎トシココヲ出発トセナケレバナラスト同時ニ、得タル知識ハ郷土ニ適用シ應用シテ郷土ヲ教授ノ帰着点トセナケレバナラス。此意味ニ於テ郷土ノ地的現象ヲ記述シテ教授上ノ資シヨウトスルノガ本稿編纂ノ目的デアル。」と述べられていることから窺える。

次に郷土誌の記述の範囲については「……知的事実ノ種類ニヨッテ或ハ広く或ハ狭ク或ハ行政区劃ニヨリ或ハ之ヲ無視スルト云フ風極メテ自由ナモノトスルコトニシタノデアル。モトヨリ其中心点ヲ我学校ニ置クコトハ

表Ⅲ-8 目 次

郷土誌稿 目次	第二節 財政
緒言	第三節 交通
一 編纂ノ目的	第三章 文化
二 記述ノ範囲	第一節 教育
第一編 地理	第二節 宗教
第一章 地形及地質	第三節 教化修養
第一節 山勢	第四章 歴史
第二節 水系	第一節 名義
第三節 地質	第二節 沿革
第二章 気候	1 石器時代
第一節 気温	2 神話時代
第二節 雨量	3 王朝時代
第三節 風、天気	4 武家時代
第三章 動植物	5 明治時代
及地震	第三節 史跡附名
第二編 人文地理	勝偉人
第一章 住民	1 史跡及伝説地
第一節 戸口	2 古墳
第二節 人情風俗	3 城址
第三節 聚落	4 神社
第四節 政治	5 寺院
第二章 経済	6 名勝
第一節 産業	7 偉人

云フ迄モ無イ。」として、かなり自由に郷土の範囲を考えて記述してある。

「窓ヲ開ケテ南ヲ望ムト、……」という書き出しは、浮羽高等女学校の教授用にかかれた郷土誌であることがうかがえる。

## (2) 『郷土地理の調べ方と実例』

『郷土地理の調べ方と実例』は、厚生閣書店より昭和7（1932）年1月に発行した四六判、例言2頁、目次7頁、本文245ページからなり、定価1円80銭、地理教授者用の著書である。

例言よりみるに次のようなことがわかる。

1. 昭和6（1931）年8月に広島市で開催された、広島教員養成所主催の講習会における講習の草稿を整理補足したもので、比較的平易で実用性を意図したものである。
2. 昨今、郷土教育に関する書籍雑誌の刊行が多いのでいささか蛇足のきらいもあるが、議論の時代を過ぎて実行の期に入っているので、高遠な議論より着手の箇所を示した。
3. 郷土教育はまず郷土を知ることから始まる。郷土を知るとは郷土の生活を調査研究することであり、何かをいかに調べるか、本書は実にその着手の箇所を指示することを目的とした。本書によって郷土の調べは直ちに着手することができる。
4. 調査ができた上で真にその郷土に即した教育の方案は生まれよう。否、調べることでそれ自身が極めて有効な郷土教育の一部である。
5. これによって、真の郷土教育が徹底し、真摯な郷土愛護の精神が培われることを念願する。

本書の内容構成をみると表Ⅲ－9の目次のようである。

この著述についての次のような新著紹介がある。

郷土教育聯盟編、「郷土科学」第17号、（刀江書院、昭和7（1932）年3月1日発行）に紹介と批評が載っている。「西亀正夫著『郷土地理の調べ方と実際』を讀みて」において、次のように記されている。

### III 地理教育に関する研究

表III-9

#### 郷土地理の調べ方と實例 目次

郷土地理とは何ぞや	一
郷土の意義と範圍	一
教科としての郷土地理	八
地理學と郷土地理	二〇
郷土教育と郷土地理	二三
村を見る目	二七
郷土の見方	三〇
見る人の態度	三〇
見る人の素養	三五
家の地理研究	三〇
家の地理學	三〇
家の立地研究	三三
ある家(實例)	三三
家の構造	三六
ある家の構造(實例)	三六
家の環境	三九
郷土の立地研究	三三
地形と位置	三三
水の制約	三三
地面の利用	三六
交通線	三八
ある村の立地研究(實例)	三八
聚落の形態	三八
村の姿	三八
町の形	三八
幹と枝	三八
垂直の形	三九

ある町の垂直形態(實例)	三九
史的研究	三九
郷土史の着眼點	三九
何をどう調べるか	三九
ある村の歴史(實例)	三八
人口	三八
人口の總數	三八
人口の構成	三八
人口の變動	三八
密度と飽和	三八
ある村の人口(實例)	三八
環境	三〇七
微地形	三〇七
微地質	三〇七
微氣候	三〇七
早朝の氣温分布(實例)	三〇七
開拓景	三〇七
生産地域	三〇七
不生産的占有	三〇七
都市の開拓景(實例)	三〇七
破壊の利用	三〇七
經濟形態	三〇七
職業構成	三〇七
生産力	三〇七
主要物産	三〇七
特産物の研究(實例)	三〇七
農業	三〇七
新開地の一軒家(實例)	三〇七
櫻島の農業形態(實例)	三〇七
工業	三〇七
工場的位置選定について(實例)	三〇七
漁業	三〇七
商業	三〇七
木炭商(實例)	三〇七
生活態樣	三〇七
衣食住	三〇七
水と燃料	三〇七
道具	三〇七
風俗習慣	三〇七
社會組織	三〇七
文化	三〇七
子供の生活	三〇七
衛生	三〇七
或漁村の衛生狀態(實例)	三〇七
交通景	三〇七
生活程度	三〇七
資産	三〇七
土地所有關係圖(實例)	三〇七
収入	三〇七
生活費	三〇七
生活程度と貧乏線	三〇七
ある農村の生活程度(實例)	三〇七
公共經濟	三〇七
地圖について	三〇七
地形圖	三〇七
重ね地圖	三〇七
兒童の描圖	三〇七
兒童に課する郷土地理調査案	三〇七

「郷土教育とは、先ず郷土を知ることから始まる。郷土を知るとは郷土の生活を調査研究し向上進歩させることを意味する。此處から眞の郷土に即した教育の方案も生まれて来るであらうし、又調べる事それ自身が極めて有効なる郷土教育の一部なのである。

此れらの原則に従って西亀氏著『郷土地理の調べ方と実際』を見る時は、理論的研究を已に脱し、愈々実行の期に入った今日に於いて、其の着手の箇所、調べ方の方法を、實際的指導を主眼とする平易な文章で述べて居る点等実に好適の手引書と云はざるを得ない。内容は次の様な主要項目に分かれて居る。(項目略)

此の種の書物には他に『郷土調査帳』及び『郷土調査必携』(以上、郷土教育聯盟編、刀江書院刊)、『郷土地理野帖』(古今書院刊)等があるが、前述の書物は先ず郷土教育實際指導書としては最も具体的で親切なものと推称したい書である。」

これからも窺えるように其の着手の箇所、調べ方の方法について、實際的指導を主眼として平易な文章で述べており、好適な手引書である。と評価されている。

この『郷土地理の調べ方と実例』の著述は、郷土教育運動が最も盛り上った昭和初期であり、昭和4(1929)年の世界恐慌の影響を受けた日本経済の衰退、とくに農村の窮乏と疲弊の打開策の一環として、文部省が郷土に対する理解、愛情、その開発や生活改善への意欲・関心などを養うという観点から郷土教育の振興をはかった時期と一致している。

## 5. 小学校地理教育への貢献

### (1) 『具体化せる小学地理教材と教授法』シリーズ

#### ㊦ 構成と目的

地理教育、特に小学校の地理教育における貢献としては、厚生閣書店から出版した『具体化せる小学地理教材と教授法』シリーズをあげることが

### Ⅲ 地理教育に関する研究



図Ⅲ-5 「具体化せる小学地理教材と教授法」の扉（菊版を縮小）

できる（図Ⅲ-5）。

このシリーズは、昭和2（1927）年の初版から、昭和4（1929）年からの修正版（改訂版）、昭和8（1933）年からの再訂版、昭和13（1938）年の三訂版（尋5年用のみ）と版を重ねている。現在まで収集し目を通すことができたのは、次の5点であり、これらによって考究した。

- (1) 尋5三訂版，昭和13年9月発行，161ページ，定価2.30円
- (2) 尋6修正版（改訂版），昭和5年6月発行，206ページ，定価2.10円
- (3) 高1高2版，昭和3年2月発

行，高1 121ページ，高2 86ページ，私見12ページ，計219ページ，定価2.60円

- (4) 高1修正版（改訂版），昭和8年7月，162ページ，定価1.80円
- (5) 高2修正版（改訂版），昭和9年6月，115ページ，定価1.60円

各々の目次をあげると表Ⅲ-10のようである。各版の目次は，小学地理教材の解説の部は国定教科書である『小学地理書』『高等小学地理書』の目次とページは同じであることは言うまでもない。附録の部である教授法については，改定するたびに変更しており，地理教授法の進歩にともない，西亀正夫の地理教授法への考えの変化を窺うことができる。

これらの初版本（昭和2年版）の緒言によって，これらの著述の目的をみると次のようである。

地理科の内容は多方面で日々変動する。したがって小学校教師の教材研



戦前における地理学・地理教育に関する研究

表Ⅲ-10 「具体化せる小学地理教材と教授法」の各版の目次

<p>尋 5 三 訂 版 (昭和13年9月発行)</p> <p>緒言</p> <p>第1 大日本帝国</p> <p>第2 関東地方</p> <p>第3 奥羽地方</p> <p>第4 中部地方</p> <p>第5 近畿地方</p> <p>第6 中国地方</p> <p>第7 四国地方</p> <p>第8 九州地方</p> <p>附録</p> <p>地理教授法約説</p> <p>修正地理書の解剖</p> <p>尋常小学地理附図について</p>	<p>第10 教育・神社・宗教</p> <p>第11 産業 (1)</p> <p>第12 産業 (2)</p> <p>第13 交通</p> <p>第14 都会</p> <p>教授法の部</p> <p>地理学の本質</p> <p>地理教室の目的</p> <p>教科書の批判</p> <p>地方誌の取扱</p> <p>一般誌の取扱</p>
<p>尋 6 改 訂 版 (昭和5年6月発行)</p> <p>緒言</p> <p>第1 北海道地方</p> <p>第2 樺太地方</p> <p>第3 台湾地方</p> <p>第4 朝鮮地方</p> <p>第5 関東州</p> <p>第6 我が南洋委任統治地</p> <p>第7 日本の総説</p> <p>第8 アジア州</p> <p>第9 ヨーロッパ州</p> <p>第10 アフリカ州</p> <p>第11 北アメリカ州</p> <p>第12 南アメリカ州</p> <p>第13 大洋洲</p> <p>第14 世界と日本</p> <p>地球の表面</p> <p>附録</p> <p>小学校地理科教授法私見</p> <p>修正地理書巻二批判</p>	<p>高 1 改 訂 版 (昭和8年7月発行)</p> <p>第1 アジア州</p> <p>第2 ヨーロッパ州</p> <p>第3 アフリカ州</p> <p>第4 北アメリカ州</p> <p>第5 南アメリカ州</p> <p>第6 大洋洲</p> <p>小学地理教授法要説</p> <p>生活指導と地理科</p> <p>地理的常識</p> <p>言葉の教授</p> <p>高一地理教材の特質</p> <p>地理区による指導</p> <p>世界地理と郷土地理</p> <p>地図中心主義</p> <p>自学自習</p> <p>改訂地理書批判</p>
<p>高 1・高 2 用 (昭和3年2月発行)</p> <p>緒言</p> <p>高1の部</p> <p>第1 亜細亞洲</p> <p>第2 大洋洲</p> <p>第3 欧羅巴洲</p> <p>第4 阿弗利加洲</p> <p>第5 北亞米利加洲</p> <p>第6 南亞米利加洲</p> <p>高2の部</p> <p>第1 地球</p> <p>第2 地球の表面</p> <p>第3 陸地</p> <p>第4 海岸</p> <p>第5 大気</p> <p>第6 生物の分布</p> <p>第7 人類</p> <p>第8 国家</p> <p>第9 政治</p>	<p>高 2 改 訂 版 (昭和9年6月発行)</p> <p>緒言</p> <p>第1 地球の表面</p> <p>第2 陸地</p> <p>第3 海洋</p> <p>第4 大気</p> <p>第5 生物の分布</p> <p>第6 人類</p> <p>第7 国家</p> <p>第8 政治</p> <p>第9 教育・神社・宗教</p> <p>第10 聚落</p> <p>第11 産業</p> <p>第12 交通</p> <p>第13 世界は於ける我が国の地位</p> <p>小学地理教授法要説</p> <p>生活指導と地理科</p> <p>地理的常識</p> <p>言葉の教授</p> <p>地図中心主義</p> <p>自学自習</p> <p>高2地理教材の特質</p> <p>郷土地理との関関</p> <p>郷土の調査要領</p> <p>改訂地理書批判</p>

【位置】

北海道は本州の北方にあつて、緯度四十一度半の附近以北にある。この位置の結果として、

一、氣候が割合に寒い。米が多く出来ない。

二、文化が後れた。住民が少い。開拓の餘地が多い。

三、水産物が多い。(水産業は熱い處に發達し難いから)

但し北海道や樺太を『寒くて凍けぬ土地』と思はしめぬ様注意を要する。たゞ冬が少し長いだけである。

【南西部の半島】

北海道は地勢上胴體部と半島部とその中間とに分ける。

一、胴體部Ⅱ菱形といふよりも寧ろ不正五角形。

二、半島部Ⅱ四つの枝を有する極めて複雑な形である。

三、兩者の中間Ⅱ石狩平野、本道第一の生産地域。

【蝦夷山脈】

二列の山脈で、更にそれが南部と北部とに分れて居るので合計四つの山脈となつてゐる。

北見山脈 日高山脈

天鹽山脈 夕張山脈

北海道地方 區域地勢

尋常小學地理書卷二より

尋常小學地理書卷二

第一 北海道地方

一 區域

北海道地方とは北海道本島、その近海の島々及び千島列島をいふ。この地方を管轄する北海道廳は札幌にある。

二 地勢

北海道本島は南西部の半島を除くと、大體菱形になつてゐる。

菱形の部分は蝦夷山脈が南北に連なり千島火山脈が

北見・日高の二山脈が脊梁となり、天鹽・夕張の二山脈は比較的低くて前山の形をなし、兩者の中間に上川盆地があり、又天鹽川や空知川が縦谷を作つてゐる。

【千島火山脈】

カムチャツカ半島の火山脈に續くもので、千島列島を経て北海道本島の中央部に達してゐる。火山の總數三十餘、その中十四は活火山である。但し千島列島全部が火山島ではなく、一つの海底山脈の上に噴出したものである。

究は随分重荷である。そこで教授書とすれば、教科書の欄外に書きこむ程度でよい。このような視点から、1. 教科書の本文を縮刷して入れる、2. 主要教材の補説、児童の質問しそうなこと、挿絵の解釈、新しい統計書の誤謬などを行ない、3. 安価である、という特徴をもつ本書を書いたのである。さらに「教授法に関する私見」を付けている。

内容の事例を示すと、資料Ⅲ－5のように国定教科書を下段半分に縮小していれ、本文の説明部分に傍線をつけて解説してある。

#### ① 評価と特色

この『具体化せる小学地理教材と教授法』について、出版時にどのような評価がなされていたであろうか。新著紹介などでみたい。

東京高等師範学校内理科教育研究会編の雑誌「理科教育」、第10巻第10号、(昭和2(1927)年10月発行)、p. 87 に新刊紹介がある。

「地理科の教授書なり参考書なりは相当数多いが、何れも余に詳し過ぎて却って冗長に陥ったり、肝心の要点を逸している様な点がある様に思れる。本書は其欠点の一掃に苦心して主要点を明にしてある。主要教材の補説・児童の質問しそうな点、挿画の説明、統計その他遺憾なく集めてある。又他書に見られない教科書の本文全部を其儘縮刷してあるのも異彩である。又地理科教授法も登載してあって本書を手に入れば、教科書も要らず、又他の参考書も必要なく、本書一冊ですらすら完全な教授が出来ると思ふ。誠に好適の良参考書である。」

奈良女高師附属小学校学習研究会編の雑誌「学習研究」、昭和2(1927)年10月号に次のように新刊紹介がある。

「これは尋五の巻、尋六の巻と高一二の三巻に分かれて居る。世の多くの参考書が余り詳し過ぎて、却って要点を逸し、読みこなすにも実際の使用にも不便である点を補ひ極めて实际的に役立つ様に工夫して編纂したもので、その特色とみるべきものは、

1. 教科書の本文がその儘縮刷してあるから、此の書一冊あれば、別に教科書をもたなくても直ちに教室に臨むことが出来る事。

### Ⅲ 地理教育に関する研究

2. 主要教材の補説明，児童の質問しきうなこと，挿畫の解釈，新しい統計，教科書の誤謬に対する注意などが遺漏なく集めてあること。

の二点であって，實際教育家の参考資料としては要を得ている。内容の一例を左に示すならば，教科書10頁『広さに於て我国第一』（関東平野）に対して『関東平野は面積大約一千方里に近く，東西も南北も共に三十五里位の直径がある。この点から見て日本一であるが，越後平野や濃尾平野の様な沖積平原でなくて土地が少しく隆起して居るから，水田面積は却って少ない』としてあるように教科書の本文との対照がよく行き届いて居る。それに，地図中心主義，推究的創造的学習，実験学習，郷土中心主義，能力陶冶主義，模式的教材に力を注ぐことの項目があげられてゐる。特にその模式的教材案には大いに著者の識見を見るに足るものがあるように思はれる。便利で手軽で代価の安いことも本書の特色の一つと云ってよからう。」と高く評価されている。

雑誌「地理教育」，第7巻第1号（昭和2〔1927〕年10月1日発行）に，次のような新著紹介となっている。

「本書は尋常小学地理書の巻一及び二，即ち第5学年用と第6学年用との二冊よりなっている。従来の教授解説と異なり，小学地理書の各頁の縮図を出し，それによって重なる個所に傍線を附してそれが説明してある。又挿図にはすべてその場所が附号によって解説がついて居る。故にこの本の頁を重ねるに従って小学地理書の頁も自ら進み非常に都合よく出来ている。又各頁には各種の産額等の表が数字にてあらわされ具体化を示して居る。従来の解説書は一般総合的の所が多かったが，これにはそれらは見られないから小学校教科書と直接である所が，この書の価値で教授者にとっては便宜この上もないものである。（尋5 定価1円90銭，尋6 定価2円10銭）」

雑誌「地理教育」，第10巻第6号（昭和4年9月号）に，「『具体化せる小学地理教材と教授法』尋五用（修正版）」について，次のように紹介してある。

「本書は曩に本誌第7巻第一号にて紹介せるものゝ修正版である。修正版とは云ふものゝ国定教科書の改定に伴って、本書も亦修正増補され、全く改版されて居る。本書の特徴とせるは……（省略）……。一般の教材資料と異なり、或る個所を指摘して限られたる紙面に説明せる故に少々簡明過ぎる嫌いはあるが、それだけ直載要領を得ている。確に教授資料として一方面を劃して居る。（定価 金一圓九十銭、発行所 厚生閣）」

改定版（昭和5《1930》年版）の序に本書初版について「賞讃激励の辞を寄する人頗る多く」「その遍述の考案に対してこれを模倣するものもある」「著者は日夜歓喜と感激の連続を味わった」となど述べている。

以上によってみるに、「具体化せる小学地理教材と教授法」シリーズは、次の点において評価されている。

第1に、国定尋常小学地理書・高等小学地理書を縮小して乗せてある。

第2に、主要教材の補説、児童の質問しそうなことなどつけた。

第3に、実際に教授をする先生に参考資料としてすぐ役立つようにした。

第4に、この形式の教師用書の先鞭をつけた。

#### ㊦ 地理科教授法について

##### ㊦a 尋5・尋6初版本にみられる教授法

『具体化せる小学地理教材と教授法』において特述しなければならないことは、「小学校地理科教授法私見」（p. 191～195）に述べられている地理教授法である。前節「地理教授法への論及」（p. 111～113）で述べたように地理教授法について具体的に簡明に書かれており、私見ではあるが、昭和初年頃の地理教授の傾向をみることができる。

##### ㊦b 高1・2用初版本にみられる教授法

高1・高2用初版本に述べられた「小学校地理科教授法私見」は尋5、尋6のそれとは異にした根本の問題に触れている。

書き出しに「本書尋常科の部に於いて著者は初心者のために教授法に関する私見の二三を極めて具体的に述べて見た。併し本巻を手にする教師諸君は概ね多年の研究と経験とを積まれた老練家なることを思い、少しく根

### Ⅲ 地理教育に関する研究

本に觸れた二三の理論を述べて見たいと思う。……。」と述べ、〔地理学の  
本質〕〔地理教育の目的〕〔教科書の批判〕〔地方誌の取扱〕〔一般誌の取扱〕  
について述べている。

#### ㉔ 高1・高2改訂版にみられる教授法

高1改訂版（昭和8〔1933〕年7月発行）においては、小学地理教授法  
要説として、表Ⅲ－7にみられるように、〔生活指導と地理科〕〔地理的常  
識〕〔言葉の教授〕〔高一地理教材の特質〕〔地理区による指導〕〔世界地理  
と郷土地理〕〔地図中心主義〕〔自学自習〕の項目で書かれている。

#### ㉕ 尋5三訂版にみられる教授法

尋5三訂版においては従来の「小学校地理科教授法私見」が「地理教授  
法解説」と変更されており、その内容構成は、生活指導と地理科（目的論  
の1）、常識教育と地理（目的論の2）、郷土地理の主張（目的論の3）、  
地理区の教育（教材論の1）、祖国主義（教材論の2）、模式的教材（教材  
論の3）、地図中心主義（方法論の1）、実験実習と地理教授（方法論の2）、  
推究的学習（方法論の3）となっている。

ここにおいて「祖国主義」（教材論の二）の項が新しく付け加わる。

「われ等の祖国日本を忘れた地理教授のあろう筈はない。しかし、部分  
を教へる時に全体を忘れる事態になることが少なくない。外国を授ける時  
は尚更である。かうした弊害を除かんとするのが祖国主義の主張である。

今日の時局に刺戟されて発生した議論でもあるが、平常時でも必要でな  
いことではない。」

ドイツでの祖国地理の主張を例として説明し「日本だって今日の様に世  
界の日本になって見れば、その一舉一投足が凡て世界の各方面に影響する。  
日本の描く波紋がどう擴がってどう反響するかということ、それは祖国地  
理の大切な狙ひ所である。」と祖国主義の立場が述べられている。

「外国地理の教授も結局日本を理解するためなのだが、国定教科書では、  
最初の『日本』最後の『日本の総説』を合せても全体の1割5分の頁数で、  
どうみても地方誌偏重の嫌があると見られる。地方誌の教授でも常に全体、

全日本といふことを忘れぬようにしなければならない。」

「これを要するに地理教育の目的を、少しく大きい意味の郷土、即ちわが国家の生存発展に役立たしめるということに置くならば、地誌教材を祖国中心に選択するのは当然のことと云はねばならぬ。」と結んでいる。

### ① 国定地理教科書の批判

尋6改訂版にある「修正地理書巻二批判」においては「内容の嶄新」、「分量と順序」、「誤謬の訂正」、「新しき誤謬」、「挿絵の更新」、「写真類」、「地図とグラフ」について批判意見を述べている。同様に高1高2改訂版に「改訂地理書批判」があり、尋5・3訂版にも「修正地理書の解剖」の項があり、国定地理教科書の誤謬に意を留めるとともに訂正・改善についての考察がなされている。

## (2) 小学校国定教科書に関する研究

### ㊦ 修正小学地理書の研究

明治37（1904）年始めて編纂刊行され明治43（1910）年に修正がほどこされ使用されてきた『尋常小学地理』を修正し、旧書名の下に「書」の一字を加えて『尋常小学地理書』として、巻一は大正7（1918）年4月から、巻二は大正8（1919）年4月から使用されることになった。この尋常小学地理書の修正をうけて、「修正小学地理書の研究」1～6を雑誌「教育界」<sup>(1)</sup>に、「資料及研究」として大正7（1918）年7月から大正8（1919）年10月にわたって書いている。

- ① 地人相関の教材（教育界第17巻9号）大正7年7月
- ② 統計的教材（       "       11号）       "       9月
- ③ 聚落の教材（教育界第18巻4号）大正8年2月
- ④ 挿絵と地図（       "       5号）大正8年3月
- ⑤ 海外発展の教材（       "       7号）       "       5月
- ⑥ 立体的教材（       "       12号）       "       10月

の順に、修正された『尋常小学地理書』に関わる教材の取扱いを中心に述

### Ⅲ 地理教育に関する研究

べている。海外発展の教材と立体的教材は卷二が出てからであるから大正8（1919）年4月以降に書いている。

三度目の国定地理教科書の改版である大正7年（1918）3月および大正8年（1919）3月発行の『尋常小学地理書』巻一・巻二をとりあげて、新教科書において地人相関・統計・聚落・挿絵・海外発展などの教材などにおいて多くの改善が見られることを指摘するとともに、新教科書を活用する際に意を留めなければならない点を述べたものである。

地人相関的取扱いを、小学校において創作的発明的教育の見地からも、地理科教授の基本に置くべきであるとの主張は新しいものである。

統計的教材は地理科で切離すことができないこと、聚落教材は都市のみでなく村落も考えるべきであり、挿絵は地図と関連させて取扱うなど、理論と具体例で説明してある。

地理教材の取扱いにあたって本来平面的教材の多いなかで立体的教材の存在を指摘するとともに立体的取扱い（空間的であると同時に時間的）が必要であることを強調し、立体的教材なる言葉を発案している。

#### ④ 文部省との論争

国定教科書地理編についての常に関心をもって研究を続けていたことは前述からも言える。その一つが「大阪朝日新聞」の記事である。

大正15（1926）年6月26日「大阪朝日新聞」11頁の「教育ト運動」の欄に「誤解され易い地理書の内容」という国定教科書の誤謬について、西亀教諭の意見とそれに対する文部省編纂係の辯明が記事として載っている。これより文部省との論争があったことが窺える。

「文部省で編纂した大正14年3月発行の尋常（5年用）地理書及び15年1月発行の尋常（6年用）地理書の内容に合計50数ヶ所の誤謬と普通の学説でない点及び誤解を招きやすい点があることは児童教育上ゆゆしい問題で、一面文部省の権威を阻害するものとして県立広島第二中学校教諭西亀正夫氏は本社に意見書をよせ、輿論を喚起してあくまで誤謬をただす覚悟を伝へたが、その誤謬の主な点は大体次の通りである。」と記事として取上



げた理由を説明してある。

明瞭な誤謬—7項目、普通の学説でない点—3項目、誤解を招き易い点—6項目を指摘し、文部省図書課地理教科書編纂係、文部省嘱託山邊平介、碧海康温両氏によって上記に対する辯明がされている。

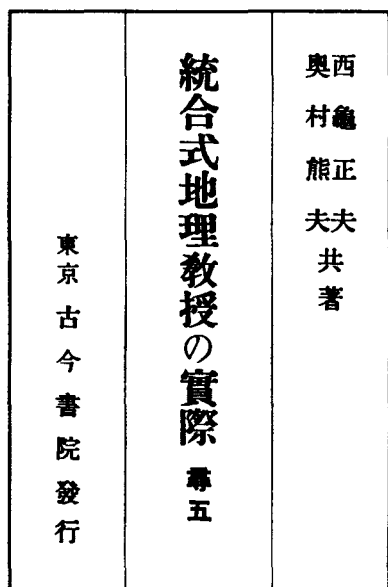
### (3) 『統合式地理教授の実際』尋五・尋六

昭和12(1937)年2月に西亀正夫・奥村能夫共著で『統合式地理教授の実際』<sup>(2)</sup>尋五、四六判、本文400頁、定価2円80銭、尋六、四六判、本文416頁、定価2円80銭、の2冊が古今書院より出版されている(図Ⅲ-6)。

「序言」は5頁にわたっており、本書の特色を窺いしることができる。

1. 「深遠高尚な地理教育の理論を展開したり、詳細なる教材の地誌的解説を羅列することは本書の目的ではない。……本書は観念の遊戯を避けて、極めて卑近な、手っ取り早く実地に役立つことを目的として編した。」とあることからわかるように実地に役立つことをねらって編纂された。
2. 「本書は寧ろ初めて教壇に立つ人、若くは久しぶりに地理科を受持つ人のために、極めて気易い伴侶たらんことを期した。最近の材料を集め、最近の思潮を酌むと共に、最も穩健中正の態度を失わないことに努めた。」と初心者を対象に最近の材料・思潮により穩健中正に書いたことに特色がある。
3. 「1学年を3学期38週間に分けて教材を配当し、これに模式教材と実習作業を便宜配置した。」また「時間配当に2案を立て、特殊事情によって伸縮加減する場合の参考になるようにした。」などの特色をもたせてある。
4. 「各大項目毎に教材観を立て、それには教材の特殊性を明かにすると同時に、その中心点を定めて凡てをこれに統合することを試みた。兎角羅列に陥り易い地理の教材を一貫の脈絡あるものに統合することは最も必要なことと考へるからである。教授者は常にこの統合表を脳中に描い

### Ⅲ 地理教育に関する研究



図Ⅲ－6 「統合式地理教授の実際 第五」の扉

て、個々の教材をして支離滅裂に陥らせないやう心がけねばならない。」と強調して、統合式地理教授の著書名としたと思われる。

5. 「教材区分表に於ては毎時間の教材配当を明らかにし、他教材との連絡をも附記した。そして、その第二案においては特に地域的取扱いを加味した。……備考欄には新国語読本巻八までに出ている関係記事の題目をあげておいた。」とあり、詳細な教材区分表がつけられている。

6. 「教授の実際欄に於ては第一案による毎時の教授略案を掲げた。」とし、「これは、日々の教

授案の作製にも又公開授業の際の教授案の作成にもよき参考となるであろう。」と教授略案の有効性を強調してある。

7. 「黒板の使用は教授者の最も苦心する所である。……表解でなくて略図で始終する主義としたいものである。本書は種々の略図、即ち地形図の外断面図、ブロックダイヤグラム、鳥瞰図、分布図等の例をあげ、尚種々の略図を示した。」と略図を多く取りいれたとしてある。また「図によって地人相関的な事項等を表記して置いた。」と略図の使い方の意義を示してある。

8. 教師の参考と題する項で、簡単な教材の解説、新しい統計や事実、教材の取扱上注意すべき事項、挿絵の説明などをいれて、直接教授必要なものをいれた。

9. 大題目の最後に受験指導の欄をもうけて、身体を害さぬよう、少ない時間で効果のあがるような指導の要領を書いた。
10. 本文中に掛図の素60余図を挿入して、教師の手で掛図を作らねばならぬときの素になるよう10倍、20倍なりに引延ばすのに都合がよいよう方眼を付けてある。
11. 「著者は25年～30年間小学校若しくは中等学校で地理科を担当し、地理科の研究を続けてきた経験者である。」 西亀正夫は小学校・中等学校にわたって38年、奥村熊夫は小学校26年間の教職経験者であった。

「統合式地理教授の実際」尋5の構成を目次によってみると次のようである。

第5 学年指導計画表	第1 日本
地理の基礎学習	第2 関東地方
1 教材観	第3 奥羽地方
2 指導の時期	第4 中部地方
3 教材の区分	第5 近畿地方
4 教授の実際	第6 中国地方
(教授略案・板書とノート・教師の参考)	第7 四国地方
5 受験指導	第8 九州地方

(第1～第8は地理の基礎学習と同じ内容構成からなる。)

第5 学年地理科指導計画表をみると、教材、時間配当(第1案・第2案の別に)、その教材における模式教材、実習作業、備考欄に関連事項の取扱いの順序で示してあり、指導計画の全貌がつかめる。

第6 中国地方を事例として、1 教材観、2 指導の時期、3 教材区分、を示したのが資料Ⅲ-6である。「教材観」として、1～8に分けて中国地方を教えるにあたっての観点を述べており、最後に教材の「統合」を示している。

〈注〉

### III 地理教育に関する研究

資料Ⅲ  
—  
6

### 一、教材類

- 當り、所謂地下の意味を多分に有する地方である。
1. 中國地方は本州の西部に突出してゐる一大半島で、四國、九州及び大陸との交通の要路に當り、所謂地下の意味を多分に有する地方である。
2. 中國地方を地勢上から見ると、中央部を北に傾斜して中國山脈が縱走し、南北の地域は所謂表裏、2. 中國地方と臺灣島の地帶を造り、自然及び人文上に至大の差異を生ぜてゐる。故に中國地方の指導はこの兩方面の特色を眞に理解させる様にすれば、その大年の目的を達せるものと云つても過言ではあるまい。

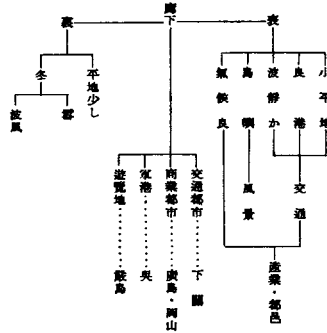
3. 中國の山脈は一般に峻峻な山は少く、概して高原性の地域又は中山性の山地が多く、地質的には古期の岩層の露出の多く、又在斷崖の露出が甚だ多く、各地に花崗石材の産出多きは本邦の一特色で著眼の要るべきことである。
4. 山地が一般に草原地に重むことは、林業に見るべきものなき反面に、牧畜は大いに發展して、本邦に於ける牛の産地として奥州の馬に對する地方である。

5. 氣候も山陰・山陽兩方面に著しき差異を示し、地勢の關係と相伴つて、山陽方面に産業の發展を來たし、殊に瀬戸内海沿岸地方に製鹽の業を盛ならしめて、四國の瀬戸内海沿岸と共に古來十州鹽田の名をなさしめてゐる。

6. 瀬戸内方面は海に陸に所被庇下としての交通發達をなし、四國、九州、朝鮮、遠絡點を通過することを始め、山陽本線は本邦の主要幹線として、我が國交通上の重要性を發揮し、瀬戸内海は航運上國無無比の交通道を有し、海の銀座の名もさしき通過地域の實を示してゐる。
7. 都市の發達も山陽方面に著しく、六大都市に次ぐ廣島市を初め、呉、岡山、下關など有力な都市も多く、これに反して山陰方面は人口五萬を有する松江市が首位を占めるので、半島性の都市も多く、現はしてゐる。
- 表裏をよく現はしてゐる。

8. 本地方を奥羽と比較すれば、共に半島的であり通過地域ではあるが、奥羽は一方が未開の北海道に對してゐるのに、中國は最も早く開けた北九州及び支那に對してゐる點が異なり、又氣候に於て大差あることがその景観に著しき差異を生ぜしめたのである。

9. 本教材は次表の如く統合することが出来る。



二、指導の時期 第十二週——第十五週 (十一月下旬——十二月中旬)

題 材	區域・地勢	農 業	交 通	都 邑
第 一 案	1. 區域・地勢の概観 2. 日本海方面と瀬戸内海 方面の自然地理	1. 農業、牧畜、工業、蠶業 水産業	1. 鐵道交通（鐵道運輸船 を含む） 2. 瀬戸内海の交通、風景	1. 都邑全體
第 二 案	1. 區域・地勢の全體	1. 山陽方面の農業 2. 山陰方面の農業	1. 瀬戸内海及其沿岸の 交通方面及陸路鐵路史 2. 山陽方面及陸路鐵路史	1. 都邑全體
備 考	國入第五ノノ一九 少回五ノノ五七九 多回五ノノ五七九		臨時第二案に復習 乃第七ノ加木大解 の始年時代四二	

- (1) 「教育界」は、明治教育社が明治34年11月に発刊した総合雑誌。このなかには社説・修養・学術・学校教育・資料及研究・雑録・批評紹介・内国彙報・叙任辞令などの記事がある。
- (2) 奥村熊夫（明治26年1月1日生れ）は明治43年3月私立松本学校正教員部卒業、尋常小学校本科正教員免許状受領、賀茂郡内小学校訓導、広島市内小学校訓導，などを経て、昭和15年より青年学校主事、戦後は広島大学の事務官を勤めた。執筆当時は広島市皆実町小学校訓導であり、師範学校教生の指導にあたっていた。西亀正夫が私立松本学校に勤務していた時代の教え子であった。西亀正夫とは親交が深く、前述した『最も能率の上る日本地理の覚え方』も事実上共著であった。

## 6. 児童生徒用読本の執筆

### (1) 『少年少女世界地理文庫』（12巻）

西亀正夫の地理教授法には、地理的能力の養成のためには自学自習が肝要であることを強調している。地理的能力とは「地理的事象を正しく認識し、且つこれに対して妥当な判断を下し得る能力」であり、いいかえると「地的景観を理解する眼識」である。これらの眼識の養成のためには自学自習によるのが最も賢明な方法であるとの立場に立っている。

しかし自学自習には、適当な資料を豊富に与えなければならない。教科書と附図だけでやるのはあまりに無理な要求である。しかも、わが国の教科書は一体に難解・無味で、自習に都合のわるいようにできている。

外国の教科書にはなかなかおもしろい記述法によったものが多い。例えば J. Favrgrieve and E. Young: Human Geography The World や Carpenter's New Geographical Reader などはおもしろいことで有名である。

学習に適した子供に読めるような読物が必要であるとの立場に立って、自ら執筆したのが、『少年少女世界地理文庫』であり、『趣味の地理・学習旅行文庫』である。

『少年少女世界地理文庫』は厚生閣書店から、最初『少年世界地理文庫』12巻（図Ⅲ－7 参照）として昭和4（1929）年5月から昭和5（1930）年10



図Ⅲ-7 少年世界地理文庫（イタリア）の表紙

月にかけて1巻1円50銭で発刊され、昭和7（1932）年3月『少年少女世界地理文庫』と改称した普及版として、60銭に値下げして一括出版されている。（表Ⅲ-11参照）

表Ⅲ-11 少年世界地理文庫 12巻発刊年月

昭和4年5月	支 那	242頁	定価 1 円50銭
5月	イ ギ リ ス	240頁	
6月	ア メ リ カ	235頁	〃
7月	フ ラ ン ス	247頁	〃
10月	イ ン ド	246頁	〃
5年2月	ブ ラ ジ ル	239頁	〃
3月	ド イ ツ	242頁	〃
4月	ロ シ ア	244頁	〃
5月	南 洋	241頁	〃
8月	北 欧	245頁	〃
9月	イ タ リ ア	245頁	〃
10月	オーストラリア	238頁	〃
少年少女世界地理文庫			
昭和7年3月	普 及 版	12巻	定価 60銭

昭和初年ごろまでに出版されている地理科の世界についての読物としては、6種のものを見ることができるが、いずれも本格的なものでなく、世界地理読本としては『少年少女世界地理文庫』が最初の本格的な児童生徒向けの著作として評価される。

この姉妹篇として、厚生閣は橋本賢康著<sup>(1)</sup>『少年日本地理文庫』12巻、各1円50銭を出版している。

両者をあわせると、まさに日本・世界にわたる24巻の、地理読本としては本格的なもので、小学校・中学校・図書館などで常備する本であった。かなり多くの児童生徒に読まれたものと思われる。

「はしがき」には、地理はおもしろい学科であるが、地理の書物にもおもしろいものが一つもない、われを忘れて読みふけるというようなものはいっこう見つからない。「アメリカあたりでは、ハンチントンという地理の先生の書かれたアジアという書物のように、とても面白くてたまらぬような本がありますが、日本にはどうもそんな書物がありません。」とアメリカにはおもしろい本があるとして、エール大学のエルスワス・ハンチント

### Ⅲ 地理教育に関する研究

ン (Ellsworth, Huntington)<sup>(3)</sup> の「アジア (Asia, A Geography Reader)<sup>(4)</sup>」をあげてある。この本は、露崎厚訳『国民東洋地理読本』として富山房（東京）から昭和2（1927）年2月に出版されている。ハンチントンは「本書の記述は正確と統一とを期したが、その陥り易き無味乾燥に就いては深く意を用いている。」と序文で述べているが、たしかにおもしろい。このハンチントンの本にも匹敵する本として「年若い皆さんに、面白く読んで貰おうと思って書いたのが、この少年世界地理文庫であります。」と本書の書いた理由を述べている。

地理学は「ただ気候だとか人口だとか貿易だと云う様なことを、切れぎれに頭の中に覚え込む学問ではありません。地勢や気候が人間の生活にどう関係しているか、産業や交通が何でその様になっているか、そう云う様な理窟を研究する学問であります。ですから一寸とした風俗や習慣のようなものでも何故そんなになっているかということを考えねばならないのです。」と特色を述べている。

このような立場から「この書物は、面白いこと珍らしいこと何くれとなく書きならべた中に、屹度『何故に』という問題が解けるようになってます。」として、ただの童話や小説と違った地理読本であることを強調している。

さらに、世界の主な国一国を一冊にまとめ12冊を出版したが、世界の小さな国々や新しい国々について、更に第二集を出したいとの意欲を述べている。しかし、第二集は出版にいたっていない。

また、目次の次に索引を入れて、調べてみたいと思う時にはすぐ引くことができるよう工夫している。

文章は、資料Ⅲ－7でみられるように、漢字にはすべて読みがなをつけて小学生5・6年生から中学1・2年を対象にしている。

昭和13（1938）年8月6日に古今書院から出版した『地理区と地理教授』（p.122）に、西亀正夫はこの本について次のように述べている。

「私は嘗て少年世界地理文庫12冊を書いた。フランスとかロシヤとかイ



ンドとかを一冊にして物語風に種々様々の面白い話を書いた。子供に与へるとほんとに喜んで読む。二百頁あっても数日の間に読み上げてしまふ。そして又繰り返して読んでゐる。何處にも地勢だの産業だのという項目はない。けれどもこれを読んだものは、地理の教科書にあることはすっかり知ってしまふ。そういう仕組みに考案してあるので、これは副読本として可成り広く行はれているらしいが、教科書をこんな風にするがよいかわるいかの問題は今はお預けにして置く。ただ項目式ならぬ渾一的な書きぶりを要望するが故に、こんな例を持って来たのである。……」

ここにも本書の特色を読むことができる。

『少年少女世界地理文庫第一編〈支那〉』を事例として本書の構成をみると次のようである。

扉	1 ページ	:	挿絵図版目次	4 ページ
地図	2 ページ	:	索引	10 ページ
はしがき	3 ページ	:	本文	242 ページ
目次	9 ページ	:	奥付け	1 頁

各巻の各章と各章内の節数をあげると表Ⅲ-12のようである。

各巻とも、まず国または地方について概観を述べ、ついで地域にわけて地域について記述し、最後にその国および地方の将来について書くという構成になっている。地理学において、その「地域の将来」を取り扱っているのは注目してよい。地理学の欠点として将来についての展望がないと言はれる点の克服とみてよいであろう。

第1巻である「支那」について各節の内容の一部をあげてみると表Ⅲ-13のようである。

『少年少女世界地理文庫』は、はしがきにもあったようにハンチントンの「アジア」がおもしろい本であるとして、これを一つの参考にされた点が窺えるわけである。事例として「満州の豆」についての節(資料Ⅲ-7)をみると「……」で示したようにハンチントンの著述と非常によくにている。勿論、児童生徒むきに平易にわかりやすく記述されていることは言う

### III 地理教育に関する研究

表Ⅲ-12 各巻の各章と各章内の節数

1 支那	93	2 イギリス	87	3 アメリカ合衆国	88
支那概観	6	イギリス概観	6	概観	10
蒙古	21	スコットランド	16	西部地方	26
満洲	16	イングランド	53	中部地方	18
支那本部	40	ウェールズ	5	東部地方	32
新疆と西藏	8	アイルランド	5	未来のアメリカ	2
未来の支那	2	将来のイギリス	2		
4 フランス	93	5 インド	91	6 ブラジル	86
フランス概観	3	インド概観	4	日本とブラジル	10
パリ一見物	36	ビルマ地方	16	コーヒー地方	22
北部フランス	15	印度平野	39	リオ市附近	12
西部フランス	16	北部山地	10	東岸地方	15
南部フランス	21	半島部	15	アマゾン盆地	21
未来のフランス	2	セーロン島	4	南西ブラジル	4
		未来の印度	3	未来のブラジル	2
7 ドイツ	87	8 ロシア	90	9 南洋	90
日本とドイツ	6	日本とロシア	3	印度支那	37
ライン地方	23	革命前後	7	スタダ列島	21
北ドイツ	41	シベリア	21	中央諸島	13
南ドイツ	12	中央アジア	15	フィリピン諸島	12
東プロシヤ	3	コーカシヤ	5	未来の南洋	3
未来のドイツ	2	ヨーロッパロシア	37		
		未来のロシア	2		
10 北欧	91	11 イタリア	91	12 オーストラリア	86
概観	2	概観	3	概観	4
ベルギー	24	大陸イタリア	31	東部地方	35
オランダ	27	半島イタリア	44	中部平原	23
デンマーク	7	島イタリア	11	西部高原	14
ノルウェー	19	未来イタリア	2	タスマニア	8
スエーデン	12			未来の濠洲	2

までもない。

「アメリカ合衆国」の巻における未来アメリカの章を事例として、どのように書かれているか取り上げてみる。

「世界のにくまれ児」の節で「アメリカは自分の国にお金が澤山あるばかりでなく、世界中のお金が集って来るのです。……全世界のお金が皆アメリカへ集って、世界中の国々は悉くアメリカの借金国、首も廻らぬみじめな国になるのではあるまいか。

そこで貧乏人が金持をねたまそねむ様に、全世界の貧乏国が金持の米国をにくみいやがる様になるのではあるまいか。そうなった時に第二の世界大戦が起るだらうとは思へませんけど、何とかしなければうまく治まって

表Ⅲ—13

少年少女世界  
地理文庫第一編 支那目次

支那概観

支那は日本の兄さま	一
昔の御恩	三
全盛時代	四
興亡五千年	七
革命常習の國	八
總身に智慧の廻らぬ支那	二

蒙古

蒙古の話	一四
沙漠の朝	六
昔の蒙古	八
なまけた生活	二
天幕の家	四
財産は羊と牛馬	七
奶茶と羊肉は何よりの御馳走	三
面白い風習	三
高原の緑	四
蒙古の王様	五

滿洲

無雨の洪水	元
旅は道づれ	四
猛犬の巡查	四
牛のお尻から石炭	四
鹽と曹達	四
廢れ行く熱河の殿堂	四
駱駝集まる張家口	四
外蒙の奥深く	四
ロシアの魔の手	四
アルタイ山脈	四
世界不安の生れ場	四
滿洲の話	空
符ふしの鴨綠江	空
十字に開く開閉橋	空
この橋一つで一時間	空
打獵く高粱畑	空
馬賊来る日	空
滿洲は豆の國	空
雨と風	空
萬丈の埃	空

支那本部

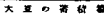
松花江	九
掘つても盡きぬ炭坑	九
何でもやる鐵道會社	九
滿洲の表玄関	九
營口と安東	九
南滿の王者奉天	九
ロシアの窓ハルビン	九
天地悉く黄色の國	一六
障子につもる怪さとり	一六
洪水に名高い黄河	一六
風がもつて来た泥土	一六
帆を上げて行く一輪車	一六
歴史に悲しき北平	一六
天津の港	一六
不思議な外國租界	一六
山東鐵道	一六
牛と卵で名高い青島	一六
帽子も敵らぬ兵隊	一六
上海は人種の市場	一六
長崎から一晝夜	一六
苦力と印度巡查	一六
堂々たる日本人街	一六

## 資料Ⅲ-7 西亀正夫の著述

馬賊と云へば随分恐ろしい話ですが、一面又滿洲はやさしい豆の國でありやうです。滿洲には至る處に澤山豆を作つてゐます。赤いの、白いの、黄緑黒、まだ

らといふ様に傳へる豆があります。どんな所でも肥料なしによく出来ずすし、  
 又どんな川邊でも用ひられる重要な肥料にもなります。生でも食ふ、漬  
 けても食へる、干して食ふ、煮て食へます。水に溶け二、三日の芽を  
 出せば肉と骨と食ふものは支那の大豆の大半です。又これにして粉で押し印すと素  
 子の中、最も多いのは大豆です。之を豆餅と云つて中々おいしいのです。  
 豆の中で最も多いのは大豆です。之を豆餅と云つて中々おいしいのです。

す。この場合は、食料の料理に用ひられまじす。支那人は石油のかはりランプに使つてゐます。又西洋では「煤油」油と稱して使はれにたり。石油やガムの代り、川品や木の油なども「煤油」として用ひる。原料とするのは、地味に漆油から抽出する。その油は清浄な精製した物と、さう切ないもので、多量に用ひられ「煤油」として用ひられる外處、つて家畜の飼料に用ひられまじす。何れにしても煤油や土油が大量に産出して貯蔵を要せず、飛石に品質のいいのが抽出出来るのです。』



澤山とれる大豆はとても家の中に入れることは出来ません。そこでこんなにして野積みするのです。鳥害の害で腐らだむしるを避く立てその中へ大豆を入れ、入れるに随つてだんだん高し、おしまひに屋根をつくつて蓋せます。そして出す時には下の方へ穴をあけるのですから虫作はありません。なんと澤山の大豆ではありますんか。

満洲は今の春、國であ  
 ります。南の端でも零下  
 二十度に降ることがあり  
 北の方では零下三四十度  
 は普通のことでありませ  
 ぬ。そんな寒い時候には油氣  
 のものを凍らせ出すまいと  
 分岐の道でやがて出来な  
 いので困りますが、油氣  
 と云つても肉類とそう深  
 山に食するわけに行きま  
 せんから、それで大豆を

食することが盛になつたのであります。満洲ばかりでなく支那本部でも大豆とか落花生とか云ふ種な油のたくさん含まれたものを盛に喰へます。そして肉類の不足を補つて居るのであります。

永久の平和を願う西亀正夫の一面がでていえると言えよう。

序文は2つに分かれている。一つは「教育者・父兄の方々へ」であり、

表Ⅲ-14 趣味の地理・学習旅行文庫10巻の発行年次

昭和6年5月	島 め ぐ り	255頁	定価 1円50銭
	山 め ぐ り	258頁	
	川 め ぐ り	254頁	
6月	湖 沼 め ぐ り	256頁	
	汽 車 の 旅	252頁	
	船 の 旅	252頁	
7月	空 の 旅	252頁	
8月	夏 の 日 本	251頁	
9月	冬 の 日 本	255頁	
12月	地 図 と 索 引	145頁	
昭和7年11月	普 及 版		定価 70銭

一つは「坊ちゃん・嬢ちゃんへ」である。

「教育者・父兄の方々へ」においては、「可愛い児には旅」のことわざは、今でも旅行によって新知識を得させ、常識を豊かにさせようという意味で意義がある。しかし旅行させるには、準備なくしては、労多くて効果が少ない。本書は、旅行の準備のための読本として書いたものである。

この本は、山に川に、陸に海に、田舎に都市に、地上より空中より、全国あらゆる地方に対して、あらゆる方面からの旅行の記録である。そしてこれを読むことによって旅行をしたと同じ効果をもたらすこともできる。

著者は「地理的知識の普及を以て畢生の事業としている」として、自分の立場を明確にしている。

本書は「自から体験を基礎として書いたものであって、出たらめの小説や無責任な寄せ集めものでは無い。」と体験を基にして書いたことを強調している。

読んでいるうちに「知らず知らず地理的知識を養う様に仕組んである。」だから「これを副教科書」とされることが極めて望ましい。

以上からわかるように、この文庫を読むことによって、日本を旅行したように地理的知識を吸収することができる。自身の体験をもとにして、子



図Ⅲ－8 「地図と索引」の表紙

供に興味深く読めるように工夫して書いており、著者の生涯の事業である地理的知識の普及の一環をなすものである。

「坊ちゃん・嬢ちゃんへ」の中では、旅行好きの中学2年の太郎君と尋常5年の花子さんの2人が、各地を旅行したときの会話調でまとめてあり、児童生徒の立場で書いてあることがわかる。

これを読むことによって、費用のいらい旅行をすることができる。読むときには必ず地図と見くらべることの必要であることが強調してある。

この序文「坊ちゃん・嬢ちゃんへ」には漢字にフリガナをつけてあるが、「教育者・父兄の方々へ」にはフリガナがつけてない。一つの配慮といえ

表Ⅲ-15 各巻の章・節および項の数

1 山めぐり (84)	2 川めぐり (85)	3 湖沼めぐり (85)
中央日本の山 (32)	中部日本の川 (33)	北海道・樺太の湖 (20)
富士山 11	利根川 6	大沼 4
日本アルプス 12	富士川 4	洞爺湖 6
白山 2	木曾川 6	登別湖畔 4
比叡山 3	信濃川 6	支笏湖 3
大和アルプス 4	黒部川 3	多未加湖 3
北日本の山 (15)	淀川 3	奥羽・関東の湖 (26)
上野三山 6	熊野川 5	十和田湖 6
筑波山 2	北日本の川 (19)	八郎潟 3
羽前の三山 3	阿武隈川 5	田澤湖 3
鳥海山 2	北上川 4	磐梯山諸湖 6
大雪山 2	阿賀川 2	中禅寺湖 5
西日本の山 (28)	最上川 3	霞浦と北浦 3
大山 3	石狩川 5	中部・近畿の湖 (28)
中国山脈 3	西日本の川 (20)	富士五湖 7
三瓶山 2	吉井川 3	蘆湖 5
四国山脈 3	中国三峽 7	諏訪湖 3
阿蘇山 6	吉野川 4	仁科三湖 4
雲仙岳 5	筑後川 4	濱名湖 4
霧島山 3	球磨川 2	琵琶湖 5
桜島 3	新領土の川 (13)	西南日本の湖 (11)
新領土の山 (9)	淡水河 7	穴道湖と中海 4
新高山 6	濁水溪 1	江津湖 3
金剛山 3	鴨緑江 3	日月潭 4
	大同江 2	
4 島めぐり (96)	5 汽車の旅 (85)	6 船の旅 (85)
瀬戸内海の島 (25)	九州一週 (14)	北海めぐり (11)
厳島 6	北九州 4	三陸沿岸 4
江田島 4	福岡から鹿児島 5	千歳丸 7
大崎島 4	日豊線 5	南洋ゆき (9)
大三島 4	山陽線 (15)	小笠原島 5
小豆島 4	岩国まで 5	わが南洋 4
淡路島 3	お城の国 6	横浜から神戸へ (20)
太平洋の島 (30)	松の名所 4	横浜港 4
松島 3	関西地方 (19)	遠州灘 4
江島 3	京まいり 7	紀伊半島 9
伊豆七島 10	大和めぐり 7	神戸港 3
青島 4	伊勢参宮 5	健康こども船 (21)
種子島と屋久島 4	東京近傍 (10)	琴平参詣 6
沖縄島 4	東京見物 6	納附近 5
紅頭嶋 2	房総めぐり 4	呉と宇品まで 6
東支那海の島 (10)	奥羽線 (12)	下関まで 4
平戸島 4	養蚕の国 5	九州北西岸 (15)
対馬 4	鉱業王国 4	玄海灘 6
済州島 2	苹果的里 3	長崎附近 5
日本海の島 (15)	朝鮮縦貫 (15)	有明海 4
鬱陵島 2	釜山近傍 5	黃海 (9)
青島島 4	米の国 4	木浦附近 4
隠岐 6	威鏡線 6	仁川まで 3
舩倉島と飛島 3		鎮南浦 2
オホーツク海の島 (6)		
千島 4		
海豹島 2		

### Ⅲ 地理教育に関する研究

7 空の旅 (85)	8 夏の日本 (85)	9 冬の日本 (85)
東京青森間 (16)	常夏の国 (19)	暖かい冬 (16)
東京近傍 5	台北 7	湘南地方 5
常磐地方 5	出鉱坑 3	伊豆半島 3
仙台附近 3	台中附近 4	南四国 5
青森まで 3	鹿港ゆき 5	肥後平野 3
東海道 (21)	風の国 (7)	南の島 (16)
箱根越 4	石垣島 3	台南 5
駿遠地方 5	鹿児島 4	高雄 3
名古屋見物 5	海水浴 (9)	砂糖の国 4
大阪まで 7	臨海学校 4	裏台湾 4
四国・九州線 (18)	海水浴場めぐり 5	出湯の里 (12)
高松まで 6	涼しい高原 (15)	別府 7
瀬戸内海 6	軽井沢 4	武雄と嬉野 3
九州横断 6	草津高原 6	日奈久 2
朝鮮・大連線 (17)	那須野 5	雪の国 (26)
海峡横断 3	北国の海岸 (16)	冬籠り 6
南鮮の一日 5	富山湾 7	北国の都 6
京城見物 4	親不知 4	薬の町 3
大連ゆき 5	佐渡 5	スキーの旅 7
裏日本 (13)	汗知らぬ国 (19)	スケート 4
大社詣で 7	函館 4	北邊の冬 (15)
城崎まで 4	室蘭へ 3	北海道 7
若狭湾 2	北見国へ 7	豊原と栄浜 4
	水産王国 5	北鮮 4

よう。

本文庫の構成をみるために、最初の巻である「山めぐり」を事例として考察したい。

「山めぐり」は次のような構成からなっている。

扉	1 頁	挿絵目次	5 頁
教育者・父兄の方々へ	2 頁	本文	257 頁
坊ちゃん・嬢ちゃんへ	1 頁	奥付	1 頁
目次	10 頁	広告	3 頁

「山めぐり」の目次をみると表Ⅲ－15のようになっている。各巻とも挿絵の目次がつけられている。

各巻の章・節・項の数の構成をみると表Ⅲ－15のようである。

章は日本の山を地域別けし、各節で主要山をあげ、各山についていくつかの項目を設けておもしろく書いてある。「山めぐり」における項は84項になっている。富士山についてみると、資料Ⅲ－8にみられるように11項



にわたっておもしろい題目をあげて書いてある。資料Ⅲ-9で示したように「山めぐり」のかきだしは富士山であり、太郎と花子の対話などなかなかおもしろく書いている。

西亀正夫は文筆家でもあったようで、サンデー毎日の懸賞小説に応募して村上元三と一二を争ったことが

あった。<sup>(5)</sup>

この奥付けには、販売策として、優待カードをつけている。1巻から9巻までのカードを集めて書店に送ると10巻である『地図と索引』を送ることにしてある。

『地図と索引』の巻の「はしがき」には、活用法が書いてある。

富士山	日本一の名山	お多き登山口	お婆さんの田植え	そりりく	仰ぎ見る白馬	下界に並ぶ縣様の駒	氷砂糖の喰べ方	夕食の御馳走	燦として輝く太陽	お鉢廻り	富士山と背くらべ
一	二	三	四	五	六	七	八	九	一〇	一一	一二

富士山

資料Ⅲ-9

地理の学習旅行文庫

山めぐり

中央日本の山

〔富士山〕（別巻第一圖）

日本一の名山

盲目も登る富士の山

山と云へば先づ富士、何と云つても富士山は日本一の名山です。高さこそ新萬山に負けても、姿の美しさ、高きはこの山にも負けません。日本一どころ

ろか全く世界一の名山です。それですから日本人でまだ富士山へ登つたことが無いと云つては、人中で断る出来なわけ、山登りと云へば先づ富士山へと雖でも考へることは、太郎君と花子さんとは山めぐりの第一に富士山を選びました。それはほんとに當然のことです。

「あゝほんとに早く富士山が見たいわ、お母さんのお乳を飲み頃から、富士山で、何度聞かされたかわからないもの」

「ほんとにそうだね、僕はアノお座敷にかゝつてゐる富士山の繪が何時も何時も目につてゐるんだ」

「繪の富士山や寫眞の富士山はいくら見ても知れないけれどね」

「そう云へば花子ちゃんは一年生か二年生の頃に、國書と云へば乾度富士山を描いてゐたね」

「そう、富士山の肩から日の出る繪をね」

### Ⅲ 地理教育に関する研究

まず旅行文庫を読むときには、「別巻第何図」とある地図を出しこれを見ながらよむ。通路を赤鉛筆で地図中に書き入れるなど述べている。

地図は、50万分の1、20万分の1、5万分の1地形図などを使用している。この巻の第1図には富士山がはいっている。

地図索引、全巻索引の外に、旅行の仕方・地図の読み方、登山、陸の交通・水上の交通・空の交通に分けた索引がつけてあり、例へば「登山」では服装、肌着、携帯品、強力、石室、山小屋、山籠……眠り方、山の天気など、登山のあらゆることがわかるようになっている。

#### (3) 『少年国史文庫』

児童読物として地理読本に続いて国史読本を執筆した（表Ⅲ-16）。

地理読本の著述と同じく、国史を児童のためにおもしろく平易に書いたものである。

「はしがき」に「学校でお習ひする国史の教科書は、あまり簡単でもあまり面白味も少なく、先生のお話は面白くても、聴いただけでは忘れ易いのです。それで教科書にあることを中心にして、ずっとくわしく面白く書いたのが、この国史文庫十二冊であります。」

表Ⅲ-16 「少年国史文庫」（四六判12巻、定価各1.00円）

昭和11年9月	1	神代と上古	198頁
	2	奈良及び平安時代	199頁
	3	源氏と平氏	196頁
	4	鎌倉時代	199頁
	5	吉野朝時代	198頁
	6	足利及び戦国時代	199頁
11年4月	7	織田豊臣時代	196頁
	8	江戸時代（上）	195頁
	9	江戸時代（下）	191頁
	10	明治維新前後	191頁
	11	明治時代	197頁
	12	大正昭和時代	200頁

「国史に関する読物は随分沢山あります。けれど、大抵は英雄豪傑の伝記の類で、日本の国史をはじめから終りまで、詳しく且つ間違ひの無い様に書いたものはまだあまり澤山ありません。そこでこの本を書くことにしました。」とあるように著述の目的が読みとれる。

西亀正夫の国史教育との関わりは、小学校教育にはじまり、中等学校においても地理と国史の両方を教授されいたときもある。国史に関しては、中等学校の免許状は持っていなかった。

#### (4) ま と め

『少年少女地理学習文庫』（12巻）、『趣味の地理学習旅行文庫』（10巻）、『少年国史文庫』（12巻）の執筆を通して、西亀正夫めざしたものはなんであったか考察したい。

第1は、「教科書はかならずしも生徒の自学自習に適していない。また、面白く生徒児童の興味を引くように書かれていない。」との立場から児童生徒用の読本を書こうとしたことである。この目的は十分に果している。

第2は、西亀正夫の畢生の事業は地理的知識の普及であり、地理教育の改善であった。この立場に立ったものと言えよう。

第3は、西亀正夫は「私の道楽は研究旅行、読書すること、書くこと、しゃべることだけです」と述べているが、まさに書くことについては文筆家としての才能を十分に発揮されたものであると言へる。短時間にこれだけの執筆をしたのは驚きと言って好いであろう。長い間の学問上、教育上の蓄積に裏打ちされたものであることはいうまでもない。

西亀正夫は児童文学史のなかでも着目されて、大阪国際児童文学館編集、大日本図書から出版された『日本児童文学大事典』（1993）のなかでも児童文学者の1人として取上げてある。

#### 〈注〉

- (1) 地理・鉱物・日本史・西洋史の文検に合格、香川県大川高女、東京府保善商業

### Ⅲ 地理教育に関する研究

- などに勤務，地理教材研究などに多くの投稿がある。大正10年頃帝国書院の守屋荒美雄社長より「日本地理資料」を西亀正夫と執筆を依頼されたことがあった。
- (2) 藤井成一氏（椿書店主・広島市在住）は，戦前，満洲長春の南の公主嶺小学校の図書室にあったことを証言された。
- (3) 1876～1947：「アジアの脈動」（1907），「気候と文明」（1915），「文明の原動力」（1945）などがある。
- (4) 1920年シカゴで発行，合衆国ハイスクール用の地理科副読本である。
- (5) 御子息達夫氏による。昭和9年（1934）11月サンデー毎日の大衆文芸に応募されたのではないかとと思われる。村上元三「利根の川霧」が選外佳作になっている。

## 7. 中等学校向け参考書の執筆

中等学校の生徒を対象とした参考書としては，大正14（1925）年5月に日本社から『簡明外国地理活法』，昭和2（1927）年5月に三宅書店から『最も能率の上る日本地理の覚え方』，『最も能率の上る世界地理の覚え方』，昭和5（1930）年6月に帝国書院から「日本地理のまなこ」を出版している。その他にも大正14（1925）年6月に日本社から『夏季地理練習帖』，昭和4（1929）年4月に『日本大学中学講義録，日本地理講義』の執筆がある。

### (1) 『簡明外国地理活法』

『簡明外国地理活法』は中学校生徒の自習用として書かれたもので，西亀正夫にとっては最初の生徒用参考書である。60余校の中等学校に準教科書として採用されたという。三六判・約500頁・総布金字模様入りである。

この参考書は，東京の日本社（東京飯田町5の24）が出版した「活法」シリーズの第2編（第1編は，法学士坂本無風子著，東京府立三中教諭高橋保氏補『西洋史学習活法』）である。大阪外語校長，前広島高師地理教授，中目覺閔，公立吉田高女長，地理辞典著者，西亀正夫著，『簡明外国地理活法最近の内容，最善の摘要，』というタイトルになっている。

緒言には，「高等受験生の参考」と「中等学校生徒の学習指針」たらし

めるべく編纂した。したがって「中小学校教師諸君の備忘用」としても手頃、出来るだけ「文章を簡明」にし、「表解」を用い、「最小限の紙面に最大限の内容を盛った。試験前の短時間に知識の整備をするにも便利にした。」と述べてある。とくに特徴としては、

- (1) 「多くの研究法と実習法」を掲げて、根柢ある実力を養うようにした。種々のヒントにとんだ研究法、実習問題を与えている。
- (2) 暗記の事項には「簡単な記憶法」を示して、笑ひながら覚えられよう学習能率の増進を図った。面白い記憶法、各地につき類似・異動の比較を試みている。
- (3) 形式を複雑ならしめざることに留意し、難解の事項には別に「頭註の解説」を施し、随所に「多数の地図と絵画」を挿み、理解と視覚的記憶に便するようにした。
- (4) 「最近十数年間の試験問題」を本文と対照して掲げ、問題の出た回数を付した。
- (5) 毎年1回10月に追補録を出す。

などをあげてある。

地理の学習法と記憶法については、その考え方が次のように書かれている。

地理の学習は、「只読物を読み、只地図をみただけでは、決して目的を達することは出来ぬ。色々な実習をやったり、実地実物の観察をしたりすることが極めて重要である。実習観察が真の知識を養い、忘れることの出来ぬ確固たる素養を作る」とし、「もっと精しく学習法と記憶法について説明しよう」と具体的に説明してある。これは現在の学習法に通ずるものであり、注目にあたいする。

- ① 何よりも第一に教科書を読む、そして教科書にあることは何に限らず必ず地図で探し、地図と対照して行くこと。
- ② 各種の略図や精密図を描くこと。ことに略図はたびたび繰り返して書いて充分に地図のまま頭の中に入れる。凡ての知識が地図の形で頭の中

### Ⅲ 地理教育に関する研究

に入るようにする。

- ③ いろいろな実習は必ず行なわねばならぬ。断面図、分水線記入、距離や面積の測定とか、人口や物産の計算とか、グラフの製作など、本書の例示以上に工夫してやってみる。
- ④ 機械的に記憶せねばならぬこともたくさんあるから、自分で工夫した記憶法を考案する。ただし記憶することは主に地名や物産名で、数字のときは骨を折って記憶するには及ばない。
- ⑤ 地名とその位置との記憶には、暗射地図（文字を記入しない略図）を作って、それを指点して地名をいってみることを繰返すがよい。英単語のようにカードで練習も一方法。
- ⑥ 試験問題については、必ず一度解答を作って見る。
- ⑦ 写真や絵画も決して軽んじてはならない。学校の標本室や博物館などに行って、種々の標本を充分に観察する。
- ⑧ 比較研究ということは、知識を確実にする上にも、記憶をたすける上にも、又興味を増す上にも極めて効果ある方法である。

特に本書の特徴として、次の点があげられる。

- (1) 実習問題をあたえて各種の実習法を加えたこと。(2) 面白い記憶法を加えたこと。(3) 各地について類似・差異などを比較して比較法を用いたこと。(4) 種々のヒントにとんだ研究法を加えたこと。

その他、難訓索引が付けられているのも特色といえよう。

現在の参考書と比較しても、よくできた参考書といえる。この本の広告にもあるように「早く善く学習し永久に記憶させる活書」といえる。

#### (2) 「最も能率の上る覚え方」シリーズ

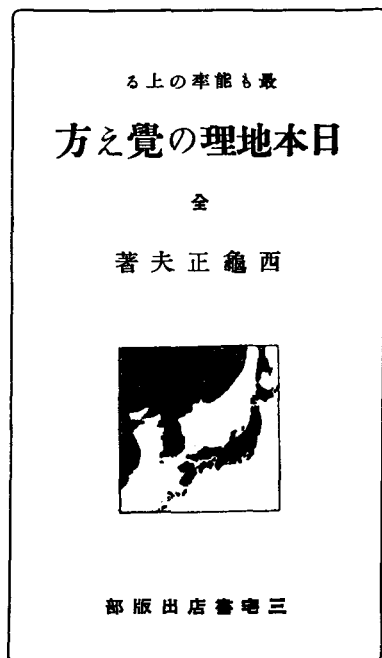
昭和初めには中等学校地理参考書の執筆が続いている。『最も能率の上る日本地理の覚え方』『最も能率の上る世界地理の覚え方』2冊がある。『最も能率の上る日本地理の覚え方』（三宅書店出版部、昭和2〔1927〕年5月20日発行、定価1円50銭、三六判）（図Ⅲ－9参照）

緒言	2 頁	：	付録	1 混同し易い地名表
覚え方の原理	8 頁	：		2 比較研究例
目次	18 頁	：		3 地名のつく物産
本文	300 頁	：		4 試験に出そうな地名物産名術語索引

という中学生向けの参考書である。

緒言より本書の特色をみると次のようである。

1. 本書は「高等受験生の参考」と「中等学校生徒の学習指針」として編集したものである
2. 本書は3段に分け、中欄を本文とし、上欄には是非記憶せねばならない要件だけを抜き書きし下欄には「考え方」「覚え方」等を示して記憶



第五章 中国地方	
<p>【農業】 到る處よく耕され、殊に南岸や島嶼の部では丘陵の絶頂まで悉く耕作せられて居る。又何處でも二毛作を行つてゐるので概して農産は豊かである。米、麥、蕎麥等を産し、又果實の産が殊に多い。</p> <p>【牧畜】 山地一帯には牧牛が行はれ、殊に廣島縣の北部東部は盛で、食用として多く京阪地方に送られ、神戸牛と稱せられて居る。</p> <p>【水産】 瀬戸内海には鯛、いわし、さかな等の魚が多く、廣島灣にはかき、養殖が盛に行はれて居る。又南岸に臨む砂浜が</p>	<p>草 果實（桃・梨・蜜柑） 牧畜 牛（神戸牛）</p>
<p>【問題】 山陰・山陽の重要物産を列記せよ（南船）</p> <p>【補説】 岡山縣には桃・梨、廣島縣には蜜柑、山口縣には夏橙を産する。</p> <p>【考へ方】 地勢上大平野が無いから、牧畜といつても多く家內的で、大規模の牧場などは少い。</p> <p>【問題】 瀬戸内海岸に鹽田多き理由を説明せよ。（葉書）</p> <p>【考へ方】 瀬戸内海に鹽灘が狭いのは、砂浜が多いことの外に、雨量が割合に</p>	

図Ⅲ-9 「日本地理の覚え方」の扉 資料Ⅲ-10 「日本地理の覚え方」の本文

### Ⅲ 地理教育に関する研究

の能率を上げる様にした。(資料Ⅲ-10参照)

3. 本書の内容は必要最小限度にとどめた。多くをむさぼると不徹底に終わるから、材料を精選して確実に覚えしめんが為めである。
4. 下欄には本文の「補説」と「試験問題」を入れ、また多数の地図をも挿んだ。試験問題は最近十数年間のものを本文と対照して掲げ、なお、出た回数をも示して出題の傾向を知らしめるようにした。
5. 附録には「混同し易い地名表」「比較研究例」「地名のつく物産」「試験に出さうな地名物産名術語索引」等を掲げた。いずれも覚え方の資料として重要なものである。
6. 読者は先ず巻頭の「覚え方の原理」を熟読せられたい。それから教科用の地図と対照しながら中欄に就て研究し、下欄によってこれが「記憶法」を学び、次に上欄の摘記を通覧して自分の記憶を試し、なお、試験問題については回答を作って見られんことを望む。
7. 本書は最新の事実を網羅したけれども、地理科の材料は日々変動するものであるから機を見て訂正増補を怠らないつもりである。

記憶の能率ということを重視してあることがわかる。

「覚え方の原理」では次のように述べられている。

〔地理は暗記ものである〕 暗記をヌキにすることはできない。試験前に1日か2日むやみに詰め込むのでは効果が少ない。〔平素から少しづつ覚えること〕 しかし「覚え方」がまずいとすぐ又忘れるので、「覚え方の原理」を説明しよう。

第1に大切なことは、〔分量を少くすること〕 万事一事に徹底して10題不完全より5題を完全に答える方がよい。〔類似事項の混同を避けること〕 類似事項をならべて覚えると却って都合がよい。〔頭で覚えること〕 奥羽と九州とはどう類似しているか、反対かを比較研究することで一度に覚えらる。類似と、反対の理論がわかる。

〔理法の研究〕 と言うことが最も記憶を深くし強くするもので「頭で覚える」とはそこを言うのである。当時の地理教育の思想が理法時代であっ



たことを反映している。「考へ方」の項目にあるのは、その理法の主なものを示したもので、この理法をじゅうぶんにのみ込むと、一つの事柄から次々に別の事柄までが推究されて、自然に頭の中に湧き出るようになる。

〔目で覚えること〕 地図など何も目に見て、目から頭の中に入れておかねばならぬ。

〔肉で覚えること〕 手を動かして地図・グラフなどじゅうぶんに練習すること。

〔口を動かして耳で覚える〕 何でも口に出して言って見て記憶する。

〔人に教えるに限る〕 自分1人で秘蔵せずに、友人に教えるのが最も賢明な方法である。「与えるほど殖える」ということを考えて必ず友達に教えること。

これが、「西亀式覚える原理」である。地理の学習と覚える関係を表解している。(資料Ⅲ-11参照)

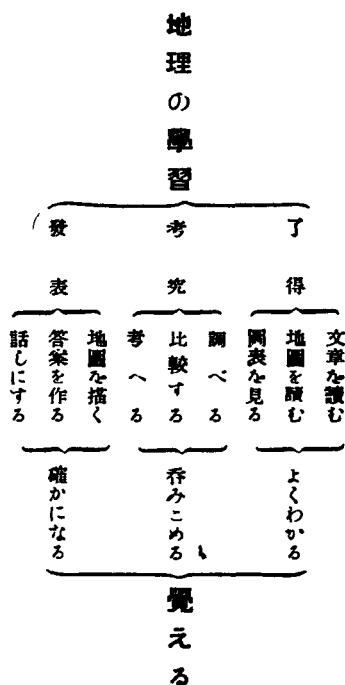
姉妹篇にあたる『最も能率の上る世界地理の覚え方』についても、前者と同様な考え方から著述している。

内容構成は、

緒言 2頁 : 目次 19頁  
口絵 3頁 : 本文 398頁  
覚え方の原理 8頁 :

附録 1 混同し易い地名物産名表  
2 試験に出さうな知的名辞  
索引

出版社である三宅書店は帝国書院の関西販売所であり、帝国書院と深い関係があり、「覚え方」シリーズ



資料Ⅲ-11 地理学習と覚える関係

### Ⅲ 地理教育に関する研究

の出版には帝国書院守屋荒美雄の息がかかっていたのではないかと推察できる。

#### (3) まなこ叢書（帝国書院発行まなこ叢書シリーズの一冊）

『まなこ叢書：自習・受験・日本地理のまなこ』〔帝国書院，昭和5（1930）年6月，定価1円，本文182ページ，三六判〕

本書の序においては、「いずれの学科についても同じことが云ひ得られるだろうが、殊に地理を学ぶには地理眼という「まなこ」が必要である。これなしに慢然と教科書や普通の参考書を幾遍読んだところで地理の精神がつかめるものではない。従って受験の場合にも要領を得た答案を作ることが出来ないということになる。……（5行略）……

私は本書に於いて日本地理は如何なる点に眼を据えて学ぶべきものであるか。又日本地理の試験問題は如何なる形に出されるものであるか。それに対して如何なる答案を作るべきものであるかといふことを、簡単に明瞭に示さうと企てた。在学生諸君はこれによりて日本地理の要点を見逃さずにすみ、受験生諸君はこれにより既に学ばれた智識を正確にまとめることが出来るならば幸甚である。」と特に試験問題の出され方と答案のつくり方を示そうとした点が注目される。

さらに、改訂原本に「本書の著述に関し、新進の学者奥村熊夫君の努力による所大なり記して謝意を表す」の追記がみられる。これより奥村熊夫氏との共述であることが窺える。

#### (4) 中学講義録の執筆

『日本大学中学講義録，日本地理講義』（日本大学出版部発行，昭和4（1929）年4月3日発行，215頁，菊判）は，書名からわかるように日本大学発行の中学講義録で，現在でいう通信教育のテキストに当たると考えてよいであろう。

(5) 『夏季地理練習帖』

大正14(1925)年6月に、西亀正夫編；夏季地理練習帖，1年用，2年用，3年用，4年用，上級用の5冊を，日本社から出版されている(図Ⅲ-10)。

1年用，2年用，上級用とは師範学校・中学校・女学校とも共通，3年は授業進度の相異があるから，一問を甲乙2種に別けて教授者の取捨に任せている。4年用は中学校だけの専用で，巻末に最近受験問題集を添えるなどの工夫がしてある。

B6判(12cm×18cm)の16頁定価10銭(郵税共)，の練習帖であるが，はしがきにも書いてあるように，地図の見方・描き方，グラフの作り方，その他

種々の興味ある学習法と，休暇でなければできぬような郷土の研究や，天体の観察などをする仕組みを主として，若干の復習問題を加味した点で特色がある。

例へば，「名古屋と富山との間に，鉄道を敷くとしたらどういう風に敷いたらよいか，地図上に色鉛筆で書き入れなさい。(地理1年，p.9)」などはおもしろい。

「特に学生諸君に」という注意書きがある。一つは解答についての注意であり，「……よく思想を練り工夫を凝した上で，假名一字も無駄のない様な，簡明な文章で書きなさい。長いのが必ずしも善いものでは有りません。



図Ⅲ-10 夏季地理練習帖一年用の問題例

### Ⅲ 地理教育に関する研究

……」もう一つは、「各巻にハガキで答へる問題があります。学校から指定された先生へ、一寸暑中見舞を書添へてお出しなさい。……」とある。例へば、二年用の13頁に「『面積測定』支那の或省又は或る地方の面積を測って、ハガキに記入して送れ。」のような問題をつけている。

## 8. 地 理 区 論 争

### (1) 地理区論争の発端

地理区論争の発端は、藤村定一氏が地理学、第4巻第12号に「地理閑話」に書かれた「地理区の地位」にあると云ってよい。西亀正夫の「地理教育と地理区」も古今書院からの依頼原稿であったのではないか。古今書院社長の橋本福松氏による地理教育界を見通した問題意識が、大きくこの論争に関わっていると思われる。表Ⅲ-17に見られるように、西亀・香川両氏による2回の論争で終了させ、「地理学」編集部は佐藤弘・綿貫勇彦・多田文男・岡山俊雄・渡辺光・橋本福松による座談会「地理区をどう観るか」を設定し、西亀正夫には『地理区と地理教授』の単行本を出版させることで収拾したのではないか。

この地理区論争について佐藤由子は、「戦前の文検制度と地理の受験者たち——地理学と地理教育との関係を考える——」（地理学評論、61-7, 1988）のなかで、この地理区論争を「地理教育の中に地理学の成果をひたすら導入するに努めた山崎時代のあと「独自性」を求める動きの萌芽が中等教育の現場に生じていたと考えられる。」(p. 537)「アカデミー地理学者がそのまま地理教育の権威者とされる体制は変らないものの、少なくとも昭和12（1937）年にはこの体制の矛盾や批判が中等教育の現場で顕在化したもの」と位置づけている。同じく佐藤由子は著書『戦前の地理教師—文検地理を探る』（昭和63年（1988）年9月20日古今書院発行 p. 129～130）の中で「西亀はこの『地理学』3月号において、ともかく今日は地理区時代である（その前は地人相関も含めた理法時代と西亀はいう）として、地

表Ⅲ-17 地理区論争に関する主な文献

昭和8年(1933)	西亀正夫「地理教育の諸問題」, 古今書院
昭和11年(1936)	藤村定一「地理区の地位」, 「地理学」, 4-12, pp. 145~148.
昭和12年(1937)	西亀正夫「地理教育と地理区」, 「地理学」, 5-3, pp. 100~109. 香川幹一「西亀氏の地理区について」, 「地理学」, 5-4, pp. 213~216. 桜井 静「地理区に関する諸問題(一)」, 「地理学」5-6, pp. 136~141. 「地理学」, 5-7, pp. 113~120. 川口丈夫「地理区と地理教授」, 「地理学」, 5-8, pp. 194~199. 西亀正夫「再び地理区について」, 「地理学」, 5-8, pp. 200~209. (座談会)「地理区をどう観るか」, 「地理学」, 5-8, pp. 213~239. 香川幹一「地理区論」, 「地理学」, 5-12, pp. 108~114.
昭和13年(1938)	西亀正夫「地理区と地理教授」, 古今書院

理区による教授では、ある地区を地的渾一体として分析的でなく総合的に  
みることだと述べ、関連して地理教授の現状に意見を述べた。

これに対して香川は、分析よりも総合を重んずべきであるということに  
反発したのか、中等学校は立ちおくられているということに反発したか、西  
亀が曖昧にした点について反論した。編集部が投稿を歓迎すると載せたの  
で桜井静は、これは地理区を地理教授にどうとりこむかという問題であり、  
地理的理法・環境論、地人相関論から国民精神の躍動も含めて、地誌こそ  
が重要であると述べた。

川口は、桜井の論を読む前に投稿したものと思われるが、地理区による  
中等地理教育に賛成であると述べ、人文現象は必ず特定地域を中核として  
集積するから濃厚の度合において生活を限りとして教授したい、と自分の  
教育的地域観を述べた。同じ号に西亀の文が、12月号に香川の文が掲載さ  
れているが、どちらも細かいあげ足とりや優位に立つために権威をもち出  
す態度がみられ、必ずしもかみあっていない。西亀は地理区を授業の単元  
に直結させたいというのが香川は「現在いる二三の学者が設定した地理区思  
想の全体をそのまま可憐な児童に採択することに反対する」という。香川  
は当時、自作の模型や資料を使い、豊かな知識と見聞、巧みな話術により、  
授業の練達者としての評価を得ていたので、地理区に直ちに追従する必要はな

### Ⅲ 地理教育に関する研究

いとんの自負があったのであろうか。一方では西亀に対して、「文部省の検定教科書を勝手に変えて教えてよいかと権威を背景に自説を主張してもいる。」と述べている。

また、寺本潔は、「戦前・戦中の地理教育界における地理区論の展開」、『新地理』第30巻第2号《1982年9月》, p. 23~31) において、西亀・香川論争を以下のようにまとめている

「地理区論の展開において最も議論が盛んであったのは、雑誌『地理学』誌上で論じられた西亀・香川論争であろう。表Ⅲ-18は、両者の主張を整理したものである。両者共、地理区を加味した教授の重要性は認めているが、実際の授業への応用に関しては、多少のとらえ方の差異がみられる。

表Ⅲ-18 寺本潔による西亀・香川論争のまとめ  
(新地理, 第30巻第2号, p. 27 より)

論者 観点	西 亀 正 夫 (1937 a, 37 b), (1938)	香 川 幹 一 (1937 a, 37 b)
地理区のとらえ方	地域性は自然・人文の渾然一体の特性だから地理区も総合的な区分法でなくてはならない。 地理教授の目的は諸地方の地域的特性を明らかにすることだから地理区による教授が必要。	地理区的観察は必要だがこれのみが地理学的努力の全体ではない。
地理区教授のとらえ方	地誌教育の立場からするのであって地理学研究のうちでやろうとするのではない。	西亀氏の論文は純地理学の立場からではない。二、三の学者が設定した地理区を児童にそのまま教授するのはおかしい。
地理区の導入について	すみやかに地理区式へ改善すべき、トピックス的な扱いを望む。 現在の地方区分は大き過ぎる。	地方別は取り入れるべき、項目も知識として大切である。
漸移地帯のとらえ方 総合と分析 地理区の決め方	漸移地帯は地理区でない。 境界は“帯”。 “総合”重視。 地理区は教師が定める。	漸移地帯も地理区である。 境界は“線”。 “分析”重視。 天下り式には反対。

総じて、西亀の論は地理区導入に関して積極的に賛成するもので、香川のそれは、やや消極的賛成にとどまるものであろう。」

## (2) 西亀正夫の地理区論

西亀正夫の「地理区」に関する言及を考察してみる。前述した『地理教育の諸問題』の「地理教育思潮の変遷」の中で、地理教授法は、講演時代—実習時代—理法時代—地理区時代と変化していると説明したなかで「地理区」に論及している。

「地理区という言葉は比較的新しいが、地理区の考へというものは昨今に始ったものではない。前にも記した大正10（1921）年京都で開催された全国中等学校地理歴史教員協議会において、文部省の諮問<sup>(1)</sup>に対する答申案を議するにあたって、著者もその特別委員の一人となって協議に参加したが、その委員会の席上に於て地理区の話が出て……答申の第二項に」（p. 6）

「各地方の地理的単元を定め、適切有効なる材料を選択して之を教授すること。」ということを掲げることとなった。この『地理的単元』と云ったのが、実は今日の『地理区』と同じ意味であったのである。（p. 6）

「日本の地理区については田中啓爾教授の研究が最初の完備したもので、地理区によって記述した地理書は山本熊太郎君の『概観日本地誌』が最初であろう。中等学校の教科書では田中教授のものが細かい地理区によって記述されている……」（p. 7）

「昭和7（1932）年7月に京城で開かれた第十回全国中等学校地理歴史教員協議会に於て、地理区によって記述した教科書の出現を要望する声が高かった<sup>(2)</sup>……」（p. 7）

「地方誌を地理区によって教授せねばならぬということは、今更論ずるまでもないことと思う」（p. 66）

「現今の教科書は凡て項目式であると云ってよい。……或中等学校の教科書で地理区によったと自称しているものの中に、……処誌にのみ……幾

### Ⅲ 地理教育に関する研究

分地理区を加味したというだけで……」(p. 66～67)

「地理区はどんな風に区分したらよいか、これが大きな問題である。…普通教育の教材としてはどうしても自然人文を綜合した渾一的景觀区分でなくてはならない。」(p. 68)

「如何に区分するかは学者の研究に譲っておかねばならぬが、区分の仕方は大小精粗色々になるから、その中のどれを採用するかは教授者の判断に俟たねばならぬ。即ち被教育者の程度と、教授せんとする内容の分量、時間数等によって考へなければならないことであり、小学校にあっては現行教科書との調和といふことも考慮せねばならぬ。」(p. 70)

「地理区の境界を明瞭に定めることは至難の業である。元来地域の地理的景觀といふものはその中心をとって見れば特徴ははっきりしても……隣接地との境界を定めることは極めて不自然のことである。即ちそこに漸移地帯といふものゝ存在するのが常である。随って地理区の境界は境界線ではなくて境界帯で示すべき場合が多い。」(p. 74～75)

「適当な地理区を定めて教授するにしても、その教材の内容が依然として項目式では何にもならぬ。各区に於ける渾一的な景觀を掴ませ、その人間生活のありのままの姿を認識せしめるには、これを地理的要素に分析するのでなくて、人生というものに綜合して行かねばならぬ。」(p. 76)

「人間が如何に地形に順応し、如何に気候に順応しているかを理解せしめねばならぬ。それで始めて地理区による教授の意義が徹底するのである。」(p. 77)

このような地理区論をふまえて、雑誌『地理学』、第5巻第3号（昭和12《1937》年3月）の「地理閑話」に書いたのが「地理教育と地理区」、p. 580～589 である。

「地理教育と地理区」に書いた論点をあげると次のようである。

- ① 今日の地理教育家で地理区を口にしないものは無い。ことに小学校方面では地理区による教授ということがよほど研究せられ、種々の新しい試みがある。中学校はいずれかと言えぱたち遅れ気味で教科書にも地理



区的にできているものは甚だ少ない。

- ② 地理区とか地域とかいう言葉は今では常識的になっているが、大正中頃に *Geographical regions* という語が日本に紹介されはじめた頃には、普通にこれを地理的単位と訳していたようである。
- ③ 地理区の理想は地理教育の中に完全にとりいれられたかと言うと、そこには多くの誤解や行き過ぎがあつて、なかなかうまくいっていない。
- ④ 地理区の問題が最も高調に達したかと思われるのは昭和5～6年頃……
- ⑤ 一体、地理区によって教授するのは何のためなのか……
- ⑥ かくの如く地的現象というものは、各要素が互に関係し合つて、複雑な網の目を張つたわかし難き統一体である。これをブリュンヌは地的渾一 *terrestrial whole* と言つた。こうした全体性の著しい地的現象を、地勢・気候と言つたような要素に分解するのは、ただ研究の便宜のためであつて、一つの要素を研究するにあつても、常にその全体性なるものを逃さぬように顧慮すべきであることは言う迄もない。
- ⑦ 普通教育における地理科は……地理学者を養成するのではないから……分析よりもむしろ総合を重んずべきである。
- ⑧ 地理区によって扱えば地域性を明かにするのに都合がよい。地域性とは、その区における地理的特性である。地勢とか交通とか言わないのは、その区の渾一的な現象それ全体の特性即ち相貌だからである。
- ⑨ 地理区について何から着手したらよいかという、それは地域性の相違によって必ずしも一様でない。
- ⑩ 例へば関東地方ならば東京市の存在が最も大きな特性であるから、これを中心にして交通も産業も説明して行くがよい……。
- ⑪ 一口に地理区といっても、大小広狭いろいろに設定することができる。
- ⑫ 関東・奥羽といったような全国11分法……単なる行政区画ではなくて已に立派な地理区なのである。
- ⑬ 教材として見るとき……せめて4～5時間で一地理区を完了する程度

### Ⅲ 地理教育に関する研究

にした方が教材取扱い上から見て便利であり、児童の了解記憶の上にも好都合であると思われる。

- ⑭ 先ず大きな地理区について大観し、更に小地理区の一つ一つについて検討するという方法が望ましい。
- ⑮ 併し地理区を採用したという中等学校の某教科書を見ると、一地方の地勢を述べるに地形区に分ち、気候を又気候区によって述べ、その次に処誌という項を置いて細分した地理区によって主として都邑を述べ、最後にその地方の全体の産業・交通・人口密度等を記述している。これも「地理区による教授」ということを少々突き違えているのでは無いかと思う。
- ⑯ ある学者は「地理区とは自然地理区で、地勢・気候を外にして地理区は無い」などと言って、先ずある地方の自然地理を授けた後に地理区を定め、その地理区によって処誌を述べるのが順序だと言うが果してどんなものか。地理区による教授でなく地理区の教授となりはしないか。  
(p. 586)
- ⑰ 現在の国定教科書は、地理区によって書いてあると言ってよい。ただ問題は、この地理区（関東地方）があまり大き過ぎはしないかということである。もっと小区分した方が特徴をつかむに都合がよくは無いか。
- ⑱ 地理区の大きさは……教授時間数の関係からいうと、一区に1時間以上4～5時間程度が取扱い易いように思う。
- ⑲ 日本地理を120時間に授けるとして、30乃至50区に分けねばならぬが、それではあまりに細分し過ぎて全体を通観するに不便であるから、大小二重の地理区を設けることにしたらその点は救われるであろう。その上日本を一地理区とした総論というものも無論必要である。
- ⑳ （地理区）の分け方の研究は学者に任しておいて、児童にはそのまま与えればよい。先ず地勢気候を説いてそれによって地理区を分けさせるなどというのは誤った方法である。(p. 588)
- ㉑ 11地方の区分法は行政区画を利用しているので、従来通り判然たる境

界を設けてよいが、これを更に細分するには……幅のある帯を以て区分すべきであると思う。

- ② 最後に繰り返して言うて置くが、筆者のいう地理区による教授とは、地理的事象を地勢・産業などという知的要素に分析することなく、地的渾一体としてある地区の地域性を明瞭ならしめる教授をいうのである。
- ③ オーダーを定めるということは、それ自身が已に地域性を無視したやり方であると言わねばならぬ。

### (3) 香川幹一の西亀正夫への批判

香川幹一の「西亀氏の地理区について」の中でどのように述べられているか取りあげてみたい。

- ① 「西亀氏は地理区教授は賛成であるらしい。」という前提に立って、
- (1) 地理区の方法は11地方の区分そのものが地理区であること。
- (2) 更に二三十位というのは20か30かはっきりしない。関東を京浜工業地帯、養蚕地帯などに別けたら100以上になるのではないか。「30乃至50区に分けることが便である」といっておいて、「京浜工業地区とか、養蚕地帯という様な小地理区に入っていく事がよい」とはいかなる考え方であろうか。現在論議されている地理区の問題はかかる大地理区ではないと思う。甲府盆地とか伊豆半島というような所謂小地理区を小学校ではいかに取扱うべきかという問題であろう。西亀氏はその長所と短所については問題にしていない。これは淋しいし的はずれの議論ではあるまいか。
- ② 日本というものは一地理区だろうか。一単位という事と一地理区ということは明らかに違う。日本が地理区ならイギリスも地理区・フランスも地理区である。高一地理書は明らかに地理区による地誌であるはずである。しかるに「教科書は物足りない」という。

「地理教授の順序はどうであってもよい。順序は自由であるという。」自由であるならば地勢・気候・産業・交通という順序でもよいわけであ

### Ⅲ 地理教育に関する研究

る。然るにそれはいけないという。どこがいけないか不明である。日本の教科書は中・小学校を問わず説明単元に大小の差はあれ、どれでも必ず地勢・気候・産業等と記載されている。

- ③ 「分析よりも総合を重んずべきであり、地勢とか交通とかは言わないで」とあるが、地勢とか交通とかを言わない地理教授はどこにあらうか。……分析のない総合はないはずである。総合が綿密な分析から導かれるくらいは地理学者たる西亀氏も御存知のはずである。地勢・気候・産業と分析しながら地勢は地勢で生かし、気候は気候で生かし、産業は産業として統一を求め、而して順次地表を諸視覚から観察して後でこそ健全なる地表の全体性・渾一性が把握されるのではあるまいか。
- ④ 西亀氏によれば地理区の境界線は不適當で、幅のある帯をもって区分すべきである。しからば幅のある帯は何区に属するか、もし漸移地帯であるとするとすれば漸移地帯との境は何であるか。
- ⑤ 「大地理区においても熱海を関東へ、下関を北九州へ入れるという修正を行なわねばならぬ」と述べているが、修正という意味は間違いを正すという意味ではあるまいか、熱海が中部地区でどういう誤りがあるか……そうした特例をほうぼうに設ける繁雜を何のためにするか。
- ⑥ 近江盆地を1時間の教材として取扱ってこれが「誤った地理区教授」にどうしてなるうか。中部地区の教授にあたって先ず地勢区に分けることがどこが誤っているだろうか、立派な地理区教授であらうと思う。そうした思想を教授者自身がもっていて、児童生徒に臨めば、必ずや地理教授としては成立すると思う。
- ⑦ 西亀氏は地理区の研究は小学校ではやっているが、中学校では立ち遅れ気味だといっている。西亀氏はどこどここの中等学校を見られたか、現今の中等学校の地理教師で地理区を知らないものがあるうか。
- ⑧ 「中学校の教科書に地理区的に出来ているものは甚た少ない」とのお言葉であるがどの教科書が地理区的に出来ていないのか僕には判らない。地勢・気候・産業の語を使用したからといって、それが地理区を加

味していないとどうしていわれようか。

⑨ 西亀氏に欲する所のものは、氏の地理区を加味せる日本地理の教授上の単元を具体的に示されたいことである。

『地理学』第5巻第8号(200～209頁)には、香川幹一氏の疑問やら批評、桜井静氏の御高見に敬意を表し、香川氏や、一般の読者にも、私の真意を知っていただけるようにもう一度書かせていただくと『『再び地理区について』—香川君に答ふ—』という再論がある。

西亀正夫の「再び地理区について—香川君に答ふ」、川口文夫「地理区と地理教授」、岡山・多田・綿貫・佐藤・渡辺(光)の諸学者による座談会「地理区をどう観るか」が雑誌「地理学」第5巻第8号に載ったのを受けて第5巻第12号に「地理区論」が香川幹一によって再反論された。

香川幹一「地理区論」の冒頭に、「これらの緒論の中には時々脱線の語句も入り交り、或は○○学者が手強く痛めつけられたり、更に学的真理が披瀝されたり種々卓見が発表されて蔭ながら傾聴した。西亀氏の再度の所論には、いろいろ脱線の語句とも思われる言葉が出て来た。川口氏のように真面目な態度でありたいと思う。言外の意味を多分に読んでからにしたものである。」と論争においてありがちな言葉尻を捕へている点の反省がみられる。

#### (4) 地理区論争の結末

藤村定一氏は「地理区は地理教育に厄介であり、地理区を高く評価し過ぎる。しかし地理区的態度は必要である。地理区は最初から決めて与えるものではない。地理区も一つの項目として位置・区分・気候・生物分布・地理区、各地理区を題材とせる処誌・産業・人口分布の順序で教えるのが良い。地理区を加味した中等学校教科書は大失敗である。」と述べている。

桜井静氏は「西亀の天下り式の地理区の設定に反対である。地理区による教授には消極的ないし反対であるようである。中等学校の場合『関東地方から地誌を始める場合、郷土地誌と連絡をとって、関東地方の位置・地

### Ⅲ 地理教育に関する研究

形・気候・処誌・交通・住民の順序に説明する。この場合地形・気候・産業は互に関係づけて考察し、処誌は小地理区に細分して地域性を教授する。更に交通・住民等も項によって関東地方の一地理区として認識を深めるのである。』と項目立てによる教授法は継承しており、教授の順序についても藤村氏・香川氏とは同意見である。」

川口文夫氏は「西亀氏の所論に大体賛成である」との立場で一貫している。香川氏の論調は「地形を中心として見ている一人であって、人文地理が地理学の主潮となっている現在では幾分機械的宿命的観念への疑いを免れない。」と香川氏の学的傾向を述べている。田中啓爾の薫陶を受けた立場がはっきり出ている。

「地理区の単位については、町村を3つ、4つ集めた位の大きさを考え、それを小地理区としている。」教授に当っては、中等学校では中地理区（小地理区が2～3集合）で初等教育では大地理区によるのが適当である。

この論争の段階で西亀氏に近いのは川口氏、香川氏に近いのは藤村氏・桜井氏ということになる。

西亀と香川の地理区論争の論点は表Ⅲ-19のようにまとめられよう。

西亀・香川地理区論争を通して感じることは、西亀正夫は地理学の新しい主潮を常に摂取する傾向があり、しかも地理学は地域性を明らかにすることを目的とするという立場にあった。これに対して香川幹一は自然地理（とくに地形学）に関心があったことから地人相関の地理理想に立っており、この立場から地理教授のあり方に固執した点があった。また、佐藤由子が述べているように「自作の模型や資料を使い、豊かな知識と見聞、巧みな話術により、授業の練達者との評価を得ていたので、地理区に直ちに追従する必要はなかった。」こともあったのではないか。西亀正夫も授業の練達者であったが新しいものを追究する意欲が強かったのではないか。

この論争は昭和13（1938）年西亀正夫『地理区と地理教授』（古今書院）の発行を以って、一段落した。

この地理区の考えを導入した初等教育の教科書は、昭和18年（1943年）

表Ⅲ-19 西亀、香川論争におけるそれぞれの立場

論者 論点	西 亀 正 夫	香 川 幹 一
①地理区のと らえ方	地域性は自然・人文の渾一体だから、地理区も総合的な区分法でなくてはならない。地理教授の目的は諸地域の地域的特性を明らかにすることだから、地理区による教授が必要。	地理区の観察は必要だが、これのみが地理学的努力の全体ではない。地勢・気候・産業という順序に1つ1つに分析したものを徹底させておけば児童の知識は総合渾一に導かれる。
②地理区による 教授のと らえ方	地誌教育の立場からするのであって地理学的研究のうちでやろうとするのではない。	西亀氏の論は純地理学の立場からではない。2～3の学者が設定した地理区を児童にそのまま教授するのはおかしい。地理教育＝地誌教育ではない。
③地理区の導 入について	すみやかに地理区式へ改善すべき、トピック的な扱いを望む。現在の地方区分は大きすぎる。	地方別は取り入れるべき、項目も知識として大切である。
④地理区の境 界について	境界は“帯”である。漸移地帯は地理区でない。	境界は“線”である。漸移地帯も地理区である。地理区の境界は府県界と一致させたい。
⑤地理区の決 め方	地理区は学者の決めたもので教師が定める。	天下り式には反対。
⑥総合と分析	“総合”重視	“分析”重視（分析のない総合なし）
⑦国定教科書 への評価	地理区による教授には適していない。地理区の分け方と教材の単元を一致させる。	国定教科書は文部省編で権威があり地理区一点張りで働きかけるのはどうか。
⑧記述の順序	その他の地域性に即してその地方色の最も著しいものを中心として常に人類の自然利用という観点から説明する。	具体的に地理区を加味した日本地理の教授上の単元を具体的に示されたい。
⑨中等学校の 地理教科書	地理区的に出来ているものは甚だ少ない。地理区を加味したというのも地理区による教授をはき違えている。オーダーを定めることは地域性を無視。	地勢・気候・産業の語を使用したからと云って地理区を加味していないとは言えない。

### Ⅲ 地理教育に関する研究

2月、文部省作『初等科地理（上）』（東京書籍156頁）として出現した。これには執筆者松尾俊郎氏（文部省図書監修官）によって、これら地理区の主張が地理学の発達を背景に当時としては、新鮮な方法論として主に日本地誌教授の中に取り入れられた。地理区論争は意義があったと言えよう。

戦後の地理教育界は、地理区によって記述した教科書も出版されたが、再び地方別区分が復活した。その理由は「地理区が主観的、概念的な広がりとその限界を画するやり方では、とかく科学性を欠き、かんじんのその地域社会の核心となるべきところを無視したり歪曲してしまったりする。……特色ある地域社会を現実<sup>(4)</sup>に即してつかもうとすることが不十分であったことは否定できない。」と岩田孝三が述べているように「地理区」の概念の科学性」「複雑な日本の地域像を適切にとらえることが困難であったこと」また「従来の地形・気候・産業・交通などという順序によって教授法が容易であるという因襲にとなわれた地理教育者が多かった。（いまでもこの傾向はかわらないと思う）」ためであろう。

最近の地理教育はどの方向に進んでいるかという点、西亀正夫が論じた「地理区による教授」方向に進んでいるのでなかろうか。

#### (5) 『地理区と地理教授』の著述

地理区論争のあとを受けて、昭和13（1938）年8月6日に古今書院より『地理区と地理教授』（本文136頁）が出版された。

本書の目的は、序に「地理区のこととは可成り古くから教育者間の問題になっている。……これは古くて而も新しい問題である。著者は近頃これについて1～2回雑誌上に論争を試みたが、まだ充分意を尽すことが出来ないで、少し纏めて書いて見たのが本書である。」とあることから地理区論争で意を尽していないので地理区と地理教授のかかわりを纏めたものであることが読みとれる。

本書の構成は、まず「地理区をどう取扱うかを小学校・中学校の場合に別けて論じ」、ついで「地理区とは何か、地理思想の発達、地理区の分け



方、地理区の境界」と「地理区について理論的に考察し」、つづいて「地理区の教授方法」について述べ、さらに「教科書のかかわり」を論じ、最後に「地理教育の目的は何か」で締め括ってある。

国定教科書を生かしての教授の進めかたとの事例として、中部地方を北陸・東山・東海に分けて指導例をあげてある。

第一 概観 1時間

第二 中央部 4～5時間

第三 太平洋海岸地方（南部） 4～5時間

第四 日本海岸地方（北部） 3～4時間

概観では、先ず地図を開いて区域を一瞥させ、教科書によって九県の名称を図上に求めしめ、然る後読図に入っていく。土地の高低、山脈の位置、平野の所在、交通線の方向、都会の分布などを读ませて、問答しながら三区に分けることの便宜である所以を呑み込ませる。

## 資料Ⅲ—12

### 第一時

- 一、地理区の指示、圖上概観、山が多く土地が善いといふこと（教科書四三頁）。
- 二、東京方面からこの地方に旅行すると假定し、鐵道中央線（六〇頁）を通過すること、こゝで地形と交通との關係を注意する。
- 三、富士山・八ヶ岳、火山の帯山あること、火山の位置相など（四五頁）。
- 四、富士山の形と風景（四五頁、附圖第八圖のカット）富士山の路。
- 五、火山特有の地形（四五頁挿繪）その裾野の利用（四六頁挿繪）。

### 第二時

- 一、鐵道中央線が一直線に延びないで、へろ字形になつてゐること、山脈や川の方向との關係、信越線（六〇頁）。
- 二、山脈概観（四三—四五頁本文及挿繪）、日本アルプス登山の話。
- 三、山脈の間の谷・川・急流、發電所（四六—四八頁）。

- 四、信濃川（四七頁）木曾川（四六頁）、電氣の送り先（附圖第五圖のカット）。

- 五、木曾川流域に大森林（五八頁）、海材と發電との兩立しないこと。

### 第三時

- 一、川の沿岸所々の盆地（五三頁）、氣候が大體なごと（五一頁、氣候グラフ）。

- 二、關谷市の氣候（五五頁、附圖第八圖のカット）、森林養蠶の理由、生絲の日本蠶業上の地位（五五頁）。

- 三、盆地には聚落が盛なこと（五四頁）、灌漑と森林養蠶との關係、湖の灌溉分布（五四—五五頁グラフ、附圖第八圖）。

- 四、盆地と都市、甲府・松本、長野と群衆等（六四—六五頁）。

### 第四時

- 一、盆地と農業（五三頁）、甲府附近のぶどう（六五頁本文及六四頁挿繪）。

- 二、都市と交通線との關係、概ね南北に通すること（附圖北岸比較）。

- 三、中央部が交通に恵まれる理由（附圖第九圖のカット）を讀まして、この時各鐵道の交通量を示した地圖を提示したい。

- 四、本地域の特色を闡めしめる。土地の高いこと、氣温の低く雨の少ないこと、それに對して森林・養蠶業の發達、從つて女子が男子よりも多いこと、地勢氣候の關係と東には登山帯、多にはスケートなどの盛なこと、それ等が他地方と如何に對照をなしてゐるか。

### Ⅲ 地理教育に関する研究

次に地理区に入っていくが、教科書を生かし、これに接触を保って行くとなれば教師によほどの手腕が要望されるとして、資料Ⅲ-12のように中央部を四時間でやる試案が示されている。読図させ問答しつつ進んでいる。

この際思わぬ方向に発展するかも知れないから、その時は臨機の処置をとって行けばよい。要はその特殊景観の由って来たる所を明らかにするとところにある。

この読図と発問を中心としたこの事例は、現在の社会科地理の教授法でも十分に使用に耐えるであろう。地図と教科書で教える好事例である。

地理教育の目的論のなかで「地理区の教育が決して地理教育の全体でないことを一言して置きたい。地理区は主として日本地理における各地方を教授する所謂地方誌の方法論として採用したものである。

地理教育の目的には、日本の国勢を知らせ愛国心を養成することもある。真の愛国心を養うためには、真に日本を愛し、日本の長所を生かし短所を補う知識は、世界各地の地域性を明らかにして、如何に自然と人間とが交互に作用しているかを知らしめることによって得られる。この意味で地理区の教授は生きている。郷土教育においても地理区の教授が必要となる。」

さらに祖国地理を提唱して結んである。「祖国地理の思想は第一次世界大戦後にドイツにおいて勃興したやうである。ラッツェル時代にはただ一国一地方の地理的事象を正しく教へるという単純なものであったが、近時は、如何にして国家を強盛ならしめるかに重点をおくようになった。」とオールブリヒト (K. Olbricht) の「祖国ドイツの国民地理」の事例を紹介してある。

本書に次のような要約がつけてある。

- ① 地理区の教授は困難な問題である。
- ② 地理区は地誌記載の唯一の方法である。
- ③ 地域性に即した記載法をとらねばならぬ。
- ④ 現行の教科書の修正されることが望ましい。
- ⑤ 地理区が地理教育の全部ではない。

以上よりわかるように、日本の地誌は地理区による教授によらなければ

ならない。そのためには教科書も地理区による教授に適するように修正が必要であることを主張したものであり、地理区論争において述べたことを再度まとめて終止符を打った著作といえよう。

〈注〉

- (1) 諮問二、「中等諸学校に於ける地理科の教授を一層實際生活に適切ならしむる方法如何」に対して答申が1～10まである。
  1. 教師は一層自然と人生との相関に留意し、殊に従来比較的輕視されたる地文地理に於ける機構天産等人文地理に於ける住民の特性、社会組織等に関する事を重視すること。
  2. 各地方の地理的単元を定め適切なる材料を選択し之を教授すること。(3以下略)

西亀正夫（当時福岡浮羽高女）は富士徳次郎（東京女高師）、依田豊（東京女子学習院）、金井千仞（京都第一中学）など7人が委員に付託されている。
- (2) 乙協議(7)、「地方誌ハ適當ナル地理区ニ別ケテ之ヲ説キ教授ノ進歩ヲ計ルヲ以テ最モ有効且ツ興味アルトスルモ現今此ノ見地ニ基キ編纂サレタル教科書ニ乏シ仍テ速カニ斯種教科書出版ノ氣運ヲ助成シテハ如何」
- (3) 昭和4から昭和23年まで湘南中学校（現在湘南高）に勤務した。昭和60年（1985）5月81才で死亡。戦後も活躍された。
- (4) 岩田孝三（1955）：地理教育とは何か。日本地理教育学会編『新地理教育』金子書房，p. 12.

## IV 広島地学同好会などでの活躍

### (1) 広島地学同好会の設立と発展

広島地学同好会は、昭和5（1930）年1月18日、広島高等師範学校地質鉱物学教室を中心に設立された。同好会の発起人は和田重之<sup>(1)</sup>（当時は高師助教授）、谷山四方一<sup>(2)</sup>（可部高女）であり会運営の中心として世活係として会を引っ張っていった。

広島地学同好会の役員・会員・部門・目的・行事・会費などは趣意書より窺い知ることができる。（資料IV-1）

部門の中で地理学との関係では「地形学」とあるが、昭和10（1935）年8月からは「地理学」に変更した。

会員層は師範学校・中学校・高等女学校・小学校の博物（なかでも地質・鉱物）・地理担当の教師が中心であった。<sup>(3)</sup>会員の住所は全国的であった。会員として江口元起、木下亀城、鹿間時夫、藤岡一男などの地質関係での著名人の名前がみられる。地理関係では、下村彦一、田中館秀三、岸本実、籠瀬良明、村上節太郎などの名がみられる（昭和12（1937）年1月10日現在の会員名簿）。

昭和15（1940）年9月26日の役員会（仲佐会長、和田・谷山・西亀の各世話係会合）にて、会名を同好会として置いては、如何にも道楽仕事の様に見えて新体制に副わないからというので、“広島地学会”と改名することになり、第11巻第3号（昭和15《1940》年11月）より誌名は『地学』となった。

広島地学会になったことによって、目的を「本会は地学（地質学・地理学・鉱床学・天文学・岩石学・鉱物学・結晶学・地史学・化学・海洋学・気象学・地誌学を含む）の研究発達とその普及を計る目的とす。」とした。

資料 IV-1

廣島地學同好會趣意書

昭和五年の春廣島の地に産れました本會は、別に四角ばつた會則らしいものは作らず且つ會員の種類を色々作つたり入會資格をやがましき云つたり等はしない積りで同好の士でせうあれば喜んで會員として入會を許し又止むを得ず退會される方、許可致しますから皆様方及同好者の多數御入會下さる事を希望いたします、さば申せ只抽象的に、總括的に同好者の會と云つたのでは何だか見當がつき兼ねますから一般の會則式に本會の内容を記して御參考に供します。

一、會ノ名稱 廣島地學同好會

(事務ハ廣島高等師範學校地質礦物學教室ニテ)

一、役員

會長 仲佐貞次郎 (同校教授)

理事 縣師松浦、國信、附中長谷川、相原、

進徳秋田、神崎十津川 (順序不同)

世話係 可部高女、谷山、廣島一中、中村

高師和田、

一、會員

校ノ職員生徒及中等學校、小學校ノ職員が大部分テ有リマ

セウガ其他ニ斯學ノ熱心家ナラ運動家、登山家、キヤムバ

ー、旅行家、實地家其他ノ方々モ歡迎セシマス (入會退會

ノ時ハ必ず和田重之ニオ属ク下サイ整理上助カリマス)

一、部

門 地質學、地形學、鑛床學、天文學、岩石學、鑛

物學、結晶學、地史學、化石學 (古生物學)、其他旅行登山、

キヤンプ、海洋、氣象等各方面ヲ網羅シマス——學問的ニ

言ヘバ上記ノ様ニ大體ムツカシイ様アスカ其取扱ヒマス仕

事ハ極メテ單純ナモノガ多イノデス

一、目

右ノ次第テスカラ會員相互ヤ一般人ノ斯學啓發

普及ヲ計リ手近ナ本縣下ノ地的現象ノ發見研究發表カラ少  
クモ西日本一般ノ夫レニ早ク手ヲ延ス積リテアリマス

一、行 事

1 例會 毎月一回 (第二火ノ豫定) 各日午後四時開會

普通約一時間乃至一時間半、會場高師地質學教室

例會ハ打クツロイダ會ニ致シ茶菓ヲテ食ベナガラ座談シ發表

シ聞ク事アラバ聞キ且ツ答ヘ、標本、圖等ノ覽過ヤ時々ハ幻

燈ヤ活動寫眞モアリマス

又各學校デノオ氣付キノ事ヤオ得意ノ方法ヲオ聞カセ下サレ

バ大變好都合デス

2 何カノ機會デ入手シタ多數ノ標本ガアリマシタラ皆様ニオ

分ケシマス

3 令報發行

4 實地研究ヤ見學ヲ隨時行ヒ近距離ノモノヨリ初メ遠距離ノ

モノニ及ビ時ニハ團體旅行トシテ相互ノ利益ヲ得ルオ世話モ

致シマス

5 講 習

6 講 話

7 各學校ノ採集品ヤ標本ノ整理鑑定等モオ手傳ヒシマス

一、會 費 會員ハ入會ノ時ニ年額壹圓五拾錢納入スルモノ

トス (毎月例會ノ茶菓ヤ會報ヤ通信費等トスルノデアリマス)

出金ハ現金ヲ和田ニオ渡シ下サツテモヨロシ又左記振替口座

ヘ御拂込下サツテモヨロシデアリマス

振替貯金口座下關二七一

廣島高等師範學校内 和田重之

尙例會ヘ一二度出テ見タイ其上テ入會シテモヨイト云フ方々

ハ御出席下サル事ヲ歡迎シマス

但シ一回ニツキ其部席拾五錢宛頂キマス

# IV 広島地学同好会などでの活躍

表Ⅳ－１ 広島地学同好会での発表および関連記事（\*拙稿ですでに論及したもの）

広島地学同好会報（地学）への投稿	例 会 での 発 表
第1巻第1号 昭和6年3月 趣意書	第3回 昭5.5.12 台湾の泥火山
第2巻第2号 昭和6年7月	第12回 昭6.5. パリーに供給する野菜と果物
第2巻第4号 昭和7年1月 合衆国の紡績業 現下の地理状況一瞥（Seiko）	第31回 昭7.6.21 文化地理学の諸問題*
第3巻第3号 昭和7年10月 倉橋島人文景（その1）	第32回 昭7.7.12 文化地理学の諸問題*
第3巻第4号 昭和8年1月 倉橋島人文景（その2）	第33回 昭7.10. 満州の現況について
第4巻第1号 昭和8年4月	第34回 昭7.12.13 文化地理学の諸問題（続）*
第4巻第2号 昭和8年7月 西亀氏文化地理のお話について（S.W）	柳井支部例会 景観の測定
第4巻第3号 昭和8年10月	第35回 昭8.1.18 文化地理学の諸問題（続）*
	第36回 昭8.2.21 "（続）*
	第37回 "8.4.18 "（続）*
	第38回 "8.5.16 "（続）*
第5巻第1号 昭和9年4月 悲願を立てゝ（SEIKO） 解題—愉快な報告（S.W）	第43回 昭9.10.16 比婆郡新発見のピラミッドに就いて
第5巻第3号 昭和9年11月	
第5巻第4号 昭和10年1月 広島市の東西性と南北性* 小学地理異動教材	第47回 昭10.1.15 人口の増加形態
第6巻第1号（5周年記念号）昭和10年4月 世界生活景観地誌(i)* 面白い地理教科書 小学地理異動教材 編輯後記（錦雪）	第48回 "10.2.19 東北の冷害
第6巻第2号 昭和10年8月 世界生活景観地誌（その2）* 高2地理教材解説（その1）	第49回 昭10.4.16 山陰旅行の話し
第6巻第3号 昭和11年1月 世界生活景観地誌（その3）* 高2地理教材解説（その2）	
第6巻第4号 昭和11年3月 世界生活景観地誌（その3）*	第57回 昭10.10.15 徳山市
第7巻第1号 昭和11年6月 自然と人間、地理眼	第62回 昭11.4.21 ウクライナについて
第7巻第2号 昭和11年8月 地理眼と地理識 日食の日の思い出 「つ」ということ（錦雪） 微地形と微気候、丸石の村（AB生）	第64回 "11.6.16 皆既日食について
第7巻第3号 昭和11年10月 世界生活景観地誌(4)* 地人相関と土地相関 天恵と人力	

戦前における地理学・地理教育に関する研究

<p>地誌の記載法①②, 晴曇区々, 振り売 (A B生)</p> <p>第7巻第4号 昭和12年1月</p> <p>世界生活景観地誌(s)*</p> <p>密柑の村</p> <p>地理教育瑣談(1) ○□生</p> <p>ネオンサインの地理, 環境は変化する</p> <p>土地利用度 (綿雪)</p> <p>因縁ということ(1)(2) (A B生)</p> <p>第8巻第1号 昭和12年4月</p> <p>世界生活景観地誌(6)*</p> <p>地理教育瑣談(2)</p> <p>筆箒 (中国新聞より)</p> <p>評判が作る名産, 支那の丸石舗道への追記 (綿雪)</p> <p>警察署の地理, (A B) 教科書の誤謬 (X Y)</p> <p>第8巻第2号 昭和12年7月</p> <p>地理教育瑣談(3)</p> <p>名産の幽霊, 地誌の記載の順序 (A B生)</p> <p>路面舗装の順序 (綿綿)</p> <p>母親の分布 (A B生)</p> <p>第8巻第3号 昭和12年11月</p> <p>世界生活景観地誌(?)*</p> <p>地理教育瑣談(4)</p> <p>国民精神総動員(1)(2)(3) (綿雪)</p> <p>石油の罪 (綿雪)</p> <p>第8巻第4号 昭和13年2月</p> <p>最近地理学の傾向</p> <p>地理教育瑣談(5)</p> <p>中等地理教科書批判 (編輯部)</p> <p>地価, 不利益の転嫁 (綿雪)</p> <p>ひどい間違い (X Y生)</p> <p>第9巻第1号 昭和13年5月</p> <p>白地図教育</p> <p>地理教科書批判(2) (編輯部)</p> <p>古田町の今昔 (綿雪)</p> <p>第9巻第2号 昭和13年8月</p> <p>地理教科書批判(3) (編輯部)</p> <p>地理学の本質, 都市度について</p> <p>歴史地理学 (綿雪)</p> <p>第9巻第3号 昭和13年11月</p> <p>世界生活景観地誌(s)*</p> <p>地理教育瑣談(6)</p> <p>人口密度, 統計の見方 瘠せるチェコ (N)</p> <p>第1回臨地講習会概況 (綿雪)</p> <p>第9巻第4号 昭和14年2月</p> <p>銃後の地理教育</p> <p>世界生活景観地誌(9)*</p> <p>地理教育瑣談(7)</p> <p>第10巻第1号 昭和14年5月</p> <p>世界生活景観地誌(10)*</p> <p>小学地理書の修正</p> <p>地理教育瑣談(s)</p>	<p>第68回 昭11. 11. 17 関東地方見聞談</p> <p>第71回 昭12. 2. 16 安佐郡の地理的研究</p> <p>第74回 昭12. 6. 18 広島県の人口問題</p> <p>第76回 昭12. 9. 17 四国における見聞 2. 3</p> <p>第79回 昭12. 12. 17 周桑平野の瞥見</p> <p>第83回 昭13. 5. 20 オーストリア合併のドイツ</p> <p>第85回 昭13. 7. 10 スペイン動乱の地理的意義</p> <p>第86回 " 13. 9. 16 隠岐島見聞談</p> <p>第90回 昭14. 2. 17 新東亜の資源</p>
---	--

#### IV 広島地学同好会などでの活躍

第10巻第2号（記念増大号）昭和14年9月 国境の町、熱河省の地勢、新満州を見直す、大陸の 鉄道、満州の水、蘇満国境を見る（綿雪）	第92回 昭14. 5. 19 工業港について 第94回 # 14. 7. 7 満ソ国境の近況
第10巻第3号 昭和14年11月 第11巻第1号、昭和15年1月 世界生活景観地誌(1)*（綿雪） 追っかけ研究、満州の京都、満鮮所々 地方誌の順序、水力資源（綿雪）	第95回 昭14. 9. 21 挿絵と地図
第11巻第1号 昭和15年 月 小学地理書と附図の修正 地理漫談(一)イロハ生 砂漠の雨、洪水大作、広告板（綿雪） 地理科新教材	第100回 ? 戦争とイタリアの資源
第11巻第2号 昭和15年8月 世界生活景観地誌(1)* 地学漫談(2) イロハ生 東亜の安定圏（MN生）	
第11巻第3号 昭和15年11月 欧州選局の地理的批判 地学其折々(1)～(4)（綿雪）	第106回 昭15. 10. 24 ヨーロッパ共栄圏の食糧資源
第11巻第4号 地学（改題）昭和16年3月 世界生活景観地誌(1)* 地学其折々(5)～(7) 米と小麦、雨後の筍（綿雪）	
第12巻第1号 昭和16年6月 初等科6年地理書の修正 高1地理書中の疑問、たよりない話 地理科新教材（編輯室） 広島県地誌	
第12巻第2号 昭和16年9月 世界生活景観地誌(1)* 熊野毛筆（郷土の産業） 少閑随想録(1)(2)（なにがし） 国土計画と地理学（達）	第112回 昭16. 5. 15 満州国の金資源
第13巻第1号 昭和17年5月 世界生活景観地誌(1)* 兎耳録(1)(2)(3)	第115回 昭16. 9. 18 地政学について 第116回 # 16. 10. 9 国土計画について
第14巻第1号 昭和18年1月 世界生活景観地誌(1)* 少閑随想録(3)（なにがし）	第121回 # 17. 4. 16 南方圏の石油 第122回 昭17. 5. 21 熱帯生活について 第124回 # 17. 7. 16 印度の近況 第125回 # 17. 9. 17 南方の鉄資源

西亀正夫は創立期より理事として会の運営にたずさわり、昭和11（1936）年第7巻第1号からは、理事・会報係（発行兼編輯人）として会誌発行に責任をもった。会報の発行兼編輯人として会誌発行が困難になるまで精力をつくした。

昭和13（1938）年からは相談係として会員の相談にもあたった。



昭和15（1940）年広島地学会に改称してからは、評議員、理事（会誌係・報道係）として、会の運営の中心的役割をになった。この地学同好会を地理学・地理教育の発展普及の拠点としたとも考えられる。

## （2）広島地学同好会報（地学）への投稿，および広島地学同好会（広島地学会）例会での発表

「広島地学同好会」における活躍は、役員としての運営だけでなく、表IV-1に示すように同好会報への投稿，例会における発表など、地学同好会内において地理的分野を一人で引き受けていたといつてよい。

とくに、発行人兼編輯人となった昭和11（1936）年6月の第7巻第1号からは、原稿の空欄を埋める必要もあり、多くの地理的エッセイを書いた。

非常に多くの投稿や発表があるので、そのうち2点にのみ論及することにする。

### ○「現下の地理状勢一瞥」

第2巻第2号（昭和7《1932》年1月）に SEIKO（西亀<sup>セイコ</sup>）生のイニシアルで書いている。

「地理は範囲の広い学科である。現下の世界の主要国の地理学の状況は、独逸は、地文・人文および地誌に多士済々だが、その多くは大学の城にやっている。仕事もするが出版物も独逸式のものを出して世界の王者と云える。英国は、地理学での大家が少ないけれども互に集って力を共にすれば基礎ある仕事は出来る。私は、各方面に天才的学者を有するも数において少なく中央の大学に集まる。独り米国の地理学は其の歴史新しく、且農業地理から発達したもので、まだ盛んとはいえないが、近い将来に大をなす要因を有する。地理科を新設する大学多い。

日本は、東大と文理大の理科に地理学あるのみ。京大は歴史の一部に付置されている有様。米国の如く意気ある学徒も多い。近い将来発達するであろう。近年地方研究という事がやかましい。集まれば、わが国全体の基礎ができる。結構なことである。」と世界および日本の地理学界の動向を

#### IV 広島地学同好会などでの活躍

まとめている。

○「面白い地理教科書」第6巻第1号（昭和10年4月）

「日本の教科書はどれも無味乾燥である。面白いといふところが少しもない。教師の力によって肉をつけ血を通はせない限りは、骨組ばかりの教科書に面白味のあろう筈がない。小学校の教科書もそうであるし、中等学校のも尚更その通りである。

曰く位置、曰く地勢、それから気候、産業・交通・都邑と云った風に千篇一律に事実を羅列する。何故こんなにしなければならないだろうか。…何故だろう。

已むを得ないから、実際教授にあたっては教科書の順序によらないで色々工夫してみるが、それでは予習や復習もあったものではない。今の教科書は予習避けのまじないに出来ているやうなものだ。

Carpenter の地理書がどんなに面白いかということは多くの人が知っている。読み始めたら実際止められない。あんな書きぶりの教科書は外国もたくさんないが、日本には絶無である。

J. Fairgrieve の世界の人文地理という小冊子がある。12才の少年に読ませるための教科書であるが、その書きぶりが頗る面白い。目次を見ると、移民から始まって平野のインディアン、毛皮貿易、西部の高地、コロンブスと西印度、アマゾンの低地、と云った風になっていて、簡単な繪と略図をいれて実に面白く飽かせないやうに書いてある。

日本という項をみると、ロンドンの子供には珍らしい極東の景観を如何にも巧妙に取扱っている。以下簡単にその一節を訳して見やう。（省略）

ざっとこんな調子である。こんな教科書だったら読むなと云っても子供は読む。読めば片端から知識となる。教師はそれを整理してやればよい。ほんとに面白い教授が出来ると思う。

日本にもこんな風の教科書の一種位は出来たらどんなものだろう。国定教科書高一のイギリスの項をみると……。

無味乾燥な書きぶりがわかる。具体的なところは教師の説明に譲ったと

云うか知らないが、それなら何もこんな文章を出さなくても地図と統計表だけで沢山だ。イヤーブックを持たせて置けば、それで結構ということになる。……どうか思ひ切った大改革が望ましい。」

持論であった「面白い教科書」がどのようなものであるか具体的に述べられたものとして着目してよい報告である。

### (3) 地理教育同志会

前述した『具体化せる小学地理教材と教授法』三訂版尋常五年用の末尾に、「地理教育同志会」の会則と会員申込みハガキが付けられている。「地理教育同志会」を結成して地理教育の改善・発展をはかろうとされていたことがわかる。会則をあげると資料IV-2のようである。

会員には地理教育の質問に応じ「地理新教材」をつくり配布、講師として研究会などへも出かけるなどより、熱意を窺うことができる。新教材の

<div data-bbox="194 890 269 965" style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content;">切 二 手 銭</div> <div data-bbox="312 873 448 895" style="text-align: right;">郵便はがき</div> <div data-bbox="429 916 456 1200" style="text-align: right;">広島市昭和町五八四</div> <div data-bbox="364 981 404 1318" style="text-align: center;">地 理 教 育 同 志 会</div> <div data-bbox="328 1305 353 1329" style="text-align: center;">行</div>	<div data-bbox="859 896 884 1134" style="text-align: center;">地 理 教 育 同 志 会 々 則</div> <div data-bbox="581 863 831 1385"><p>一、別紙カードに記名の上表記の處へ送付せられた方を本会の會員とする。</p><p>一、會員は地理教育に関する質問をなすことが出来る。但し返信料添付を要する。</p><p>一、會員には毎年六月に發行する「地理新教材」を無代贈呈する。但し郵券三銭を添へ申込まれた方に限る。</p><p>一、會員にして地理教育の研究會又は講習會を開かんとする場合には講師兼達の相談に應ずる。</p></div>
---	---

資料IV-2 地理教育同志会の会則と申込みハガキ

#### IV 広島地学同好会などでの活躍

配布はかつて大正12年（1923）朝鮮咸興高等普通学校時代にも実施されていた。結局、地理教育同志会はできなかったようである。

前述したように「地理学研究会」にも創刊時からかわり、「地理教材研究会」にも主要なメンバーとして参加、機関誌「地理教材研究」には15輯で使命を終っているが、9度の投稿がみられる。

##### 〈注〉

- (1) 和田重之（ワダシゲユキ）：明治28年生，大正3年広島高師附属中学校卒業，大正3年広島高等師範学校雇，大正6年鉱物学および地質学科助手補助，大正10年師範学校中学校高等女学校博物科の内鉱物科教員免許状受領，大正11年広島高等師範学校助手，昭和4年広島高等師範学校助教授，昭和21年3月17日広島高等師範学校学校教授（死亡）。
- (2) 谷山四方一：大正6年広島高等師範学校教育科卒，明治専門学校教授，可部高女・上下高女などの教諭，広島市立工専教授などを勤めた。
- (3) 大正8年から大正14年まで7年間は，博物科（博物と地理）の教員養成を行ない，博物と地理の免許状を得ていた。大正15年からは文科第3部乙において，歴史と地理の教員養成をした。

## お わ り に

地理学者・地理教育者として日本の地理学の発展や地理教育の改善に寄与した西亀正夫の地理学・地理教育の特質を総括する。

### (1) 地理学観

西亀正夫の地理学研究は、明治40年代前半（1907～1912）の自然地理学の研究にはじまり、大正中期（1918～1922）からは聚落の研究、交通の研究など人文地理学の研究へと変わった。これは地理学の人文地理学への傾斜を反映した結果ともいえよう。昭和4年（1929）・昭和5年（1930）に出版された『人文地理学講義（上）（下）』は人文地理学の体系化を行なったものであった。この書は、西亀正夫の地理学とくに人文地理学についての考え方を述べたものであり、学術書と位置づけてよいであろう。

彼の地理学の体系化は、この『人文地理学講義』につづいて『農業地理学』『文化地理学の諸問題』『景観区分世界経済地誌 北米篇』『重要商品地理学』へと展開していった。これらの著書は、いわゆる学術書というより、学界の研究成果を自分の地理観でもって体系化するとともに、教師・一般に向けて平易にまとめたものであり、多くの読者に親しまれた。

地理学の対象は「地域における諸現象の総合、即ち地的渾一そのものである」（『人文地理講義』p. 6）とし、地理学の中核は「人文地理学」であるとの立場に立っている。「人文地理学に於いて研究すべきことは、第一に人文現象相互の関係、第二に人文現象と自然現象との関係でなくてはならない。」「併しながら人文地理学に於ける研究すべき事柄は、何といっても人類と自然に関することが最も主要な部分である。」（同上、p. 8）としており、地人相関論よりは広い立場に立っている。

「何と云っても地理学は地理的渾一の景観を対象とし、人類を主題とし

てこれを解剖しようとするものであるから、先ず人類の存在及びその活動の状態というものを適当に分類し、それを中心として研究して行かなければならない。」と地理学観をまとめている。

「地理的景観」を「地域に起るあらゆる現象の綜合体、これを地理的景観となづける。……故に地理的景観は自然に順応しつつあるところの人類の活動現象であると考ええることも出来る」(同上, p. 15) としている。

『具体化する小学地理教材と教授法』のなかで「地理学の本質」について、「地理学は地上の現象を研究する学問には相違はないが……総括して研究するものである。地上の現象はその相互が関係し、協同し、連帯し、共存し、適応し、衝突しつつ結合して渾然たる一つのものとなっている。その渾一の状態を地理的景観と呼び、それを研究することを真の科学的地理学の使命としなければならぬ。」と述べ、ブラーシュなどのフランス派地理学者の思想を自分の立場としている。

1938年の「最近の地理学の動向」(『地学同好会報』8巻4号)によると、「景観論より地域論へ発展するのであるが、人間の文化的現象を強く考慮に入れ、景観論の見地から地域を区分し、その区分を基礎として記述するのが地誌である」として、景観論・地域論・地誌論へと流れを統合している。

1938年の「地理学の本質」(地学同好会報)では、ブラーシュの可能論の立場に立ち、「景域・地域性などが研究対象であり、横の研究たる世界地誌と縦の研究たる歴史地理が必要となる。世界地理と歴史地理を綜合した時に、はじめて原則が編みだされ、この原則をある土地に適応する研究が応用地理学である。そこまで行って地理学は実用の学となる。」と述べている。

以上から読みとれるように、地理学観はブラーシュなどの立場に立って地人相関論を脱却して地的渾一を研究するのが地理学であり、地理学の中核をなすのは人文地理学であり、実用学としての応用地理学に発展を期待している。

著書『人文地理学講義（上・下）』は人文地理学全般を体系化した最初のものとして評価されるべきである。

次に地理学の発展に寄与したものとしては「文化地理学」の内容および本質に関する論考であろう。日本において最初に「文化地理学」の名を冠した著作を発表したことである。研究書ではなくて研究課目録の開設であるとの評もあるが、文化地理学の体系化を意図したことは評価されてよい。

また「未来地理学」の発想は注目に値する特色である。

## (2) 地理教育への貢献

地理教育の発展と普及に生涯を捧げたといつてよい。

まず地理教師を対象とした『具体化せる小学地理教材と教授法』シリーズ（1927～1933）をはじめとし、『郷土地理の調べ方の実例』（1931）、『地理教育の諸問題』（1933）、『非常時局と地理教育』（1935）、『地理区と地理教授』（1938）、『日本地理教材辞典』（1938）、『皇国中心地理教授』（1941）などの単行本を書いている。特に『具体化せる小学地理教材と教授法』は小学校における地理教育の進歩、教師の教材研究、指導法の進歩に果たした役割は大きい。また遍述の方法の考案、とくに教科書を縮小して入れることは日本における先駆をなしたものである。

『地理教育の諸問題』は、明治後半から昭和初年代までの実践と研究をふまえて、平易に述べられており、戦争に突入するまでの地理教育の回顧と反省をまとめたものである。しかし、1931年の満州事変後の『非常時局と地理教育』、『皇国中心地理教授』においては、国家の方針に沿った地理教育に変化している。

1936～37年におよぶ「地理区」をめぐる論争は、地理教育において「地理区」による教授の定着させるうえで大きな役割をはたしたと思われる。

次に、小学校の国定地理教科書を常に批判的に考究して教科書のあり方を論じたことである。多くの小学地理書の修正意見を常に出され、一時は

文部省と正誤について論争したこともあった。

帝国書院発行の中等学校地理教科書の一部を分担執筆だけでなく、地学同好会において中等学校の地理教科書を企画・執筆におよんでいる。

日本の教科書は難解で無意味で、自学自習に向かないようになっている。子供が喜んで読むような学習に適した読物が必要であり、このような読物の存在は「地的景観を理解する眼識」を養成することとなり、地理の普及の大きな力となるとし、児童生徒用読本『少年少女地理文庫』12巻、『趣味の地理・学習旅行文庫』10巻などの執筆となった。この児童生徒用読本の執筆は、西亀正夫と同時代の地理教育者のなかで特筆に値いする。

地理教授法については、地理教授法の発展を踏まえて、大正8年(1919)ごろの、①地図基本主義、②実習本位主義、③郷土中心主義、④自学自習主義、⑤個性尊重主義から、昭和2年(1927)頃には、⑥推究的創造的学習(発見学習へ)、⑦模式的教材学習が加わり、昭和8年(1933)頃には、⑧地理区(景観区)による学習、⑨項目式による総合的調和景観による学習が積み上げられている。これらの①～⑨は地理教授法の進展を示すとともに、地理教授における教授法のあり方を示している。

地誌的内容の教授においては、以下のように述べている。㊦地理区を設定する。地理区は自然と人文のすべてを総合し、あらゆる地的要素の渾一した調和景観によるすなわち景観区であることが望ましい。㊧この地理区について項目を総合的に取扱い、生活景を出すようにする。とくに地域の景観の特徴をとらえた項目を中心に教授を進める。㊨模式的な地域・材料を選んで掘りさげた指導をする。そのためには模式的教材の類型化と系統化を行っておく必要がある。㊩一つの単元については、存在の事実の発見から出発して、比較研究により他の地域と相違した特色を見出させ、興味をもたせて原因を探索しようという気を起こさせる。さらに事実と事実がいかに関係して、そのために他の地域と異なる特異性が形成されているかを考究させる。この際に教師は示唆を与え、指導誘掖して行かなければならない。



しかし「地理科が生活指導に大きな役割を持つもの」と位置づけ、「生活指導は地理科の全生命である」というのは、昭和10年代（1935～45）の一教育思潮であるとしても問題があるといえよう。

### (3) 地理教育の技術

西亀正夫の地理教育法は、前述したような地理学観と地理教授法によって特徴づけられる。

地理教育の技術は多くの著書・文献で述べられているが、その特徴は、通常は教科書より地図を重視し、略地図を主体とした板書、掛地図や自作の主題図・グラフ・実物標本などの活用、実物投影機の活用といった直接的手法で行なっていた。掛地図については世界地図・日本地図・郷土地図の3掛図でよい、それより大縮尺の地図は各自の持っている附図を使用すればよい。授業の中心は教科書ではなく附図であるという考え方であった。

また、生徒に略地図へ地理的事象を記入して整理させ、作業学習を全生徒に課した。産物や岩石の標本室を設け、地理研究室には地理関係の図書を収集した地理文庫をもうけ、各自が借り出して読むようにしている。測図版などの教具を考案して指導したことも特筆大書されなければならない。

西亀正夫の授業は周辺中等学校に影響を与え、文部省から派遣された視学官がその影響をみとめている。

地理教授において、郷土地理学習を地理学習の中心にすえて、自から「郷土地理」のテキストを作成し、自学自習する課題も与え、郷土から出発し、日本・世界の地理に進み、再び郷土に帰って郷土をみつめるという流れが重視されている。

### (4) 著作者として、研究会講師として

教職にありながら63冊の単行本を著述し、120篇以上の論文を地理学関係の雑誌（主として歴史と地理、地球、地理学、地学同好会報）に執筆し

## おわりに

ている。これは書くことが趣味であると自称していたとはいえ、超人的であつたといえよう。戦前は教職にある人が著述をすることはアルバイトとしてさげすまれ、教職に専念する人をよしとする傾向にあつた。しかし、西亀正夫は「多くの教師は物見遊山や寄席、芝居などと遊んでおり勉強しているという状態ではない」という認識に立って、生涯にわたって研究と勉強しつづけ、地理学をはじめとして地理教育の研究に精進することを信条として努力した。

広汎な著作活動と特色ある授業は、地理教育者としての地位を高め、全国各地から講演会、研究会、研究授業、教科研究会へ招聘されて、多くの地理教師へ助言活動を行っている。

また広島地学同好会(のち広島地学会)の推進役として活躍し、会員600名の会にまで発展させた。この同好会を基盤として地理教育の改善に努力した。そのほか「広島地理歴史同好会」、「広島地理学会」などでも推進役となった。

西亀正夫は、以上述べたように確固とした地理学観をもち、地図を中心とする授業法を実施し、また多数の著書や地理教師への助言を通して、原爆を受けて死去するまでその生涯を地理教育一筋に捧げ、ひいては地理学の発展に貢献した。

学校長・教頭として学校運営に手腕を発揮した一時期もあつたが、どちらかというとき清貧に安んじ、印税なども研究用書籍雑誌の購入、研究旅行などに投資したようである。

## あ　と　が　き

本研究を進めるにあたって、これを可能にした第一は、御子息西亀達夫さんから第2次世界大戦の際に疎開されて原爆でも残った著書および資料<sup>(1)</sup>を提供していただいたことである。深く感謝申し上げたい。しかも地理学および地理教育にたずさわる人のために、その著書及び資料が広島大学教育学部社会科に『西亀文庫』として寄贈され、保管されることとなった。これにより散逸をまぬがれることになったのは、同慶にたえない。この資料が今後とも活用されることを期待したい。

つぎに、資料を収集するにあたって広島経済大学図書館にお世話になった。その他国会図書館をはじめとして広島大学、奈良女子大、立正大学などの図書館、福岡県立図書館、愛媛県立図書館、広島大学理学部地学科、西亀正夫の勤務校の流れをくむ西大寺高等学校、浮羽高等学校、吉田高等学校、観音高等学校などの御世話になった。厚く御礼申し上げる。

また、個人的には、紺家逸治、中川浩一、竈瀬良明、伊東亮三、楠見久、寺谷亮司・波田勝など多くの人々に援助を受けた。改めて深く感謝申し上げます。

### 〈注〉

- (1) 1917年生れ、旧制広島第二中卒、旧制広島高等学校卒、1941年東京帝国大学工学部土木工学科卒業、鉄道省に入省。1941年陸軍入営。1961年工搏。1964年大阪工事局長。1966年鉄道技術研究所長。1974年国鉄退職、不動産建設(株)常務取締役。1977年専務取締役。
- (2) 広島市昭和町に居住されていたので、原爆で焼けたものとおもっていたが、著書だけは疎開してあり残っていた。30余年にわたって集められた書籍、雑誌（とくに外国雑誌）などが防空壕のなかで喪失したのが残念である。

著者略歴

三上 昭 莊

(経済地理学・地理学)

昭和2年広島県に生まれる。

東北大学卒

昭和60年より広島経済大学助教授，

平成元年より広島経済大学教授，現在に至る。

現住所 〒733 広島市西区古江西町13-11-8

---

平成5年11月30日発行

戦前における地理学・地理教育に関する研究

——西亀正夫の業績を通して——

広島経済大学研究双書 11

(非売品)

著 者 三 上 昭 莊

発行／広島経済大学地域経済研究所

〒731-01 広島市安佐南区祇園5-37-1

Tel (082) 871-1000 (代)

871-1664 (直通)

---

印刷／中本総合印刷株式会社